



Title	日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能
Author(s)	大山, 隆子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13401号
Issue Date	2019-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k13401
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91526
Type	theses (doctoral)
File Information	Takako_Ohyama.pdf



[Instructions for use](#)

博士学位論文

日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び
語用論的機能

北海道大学大学院文学研究科

大山 隆子

目次

第1章 はじめに	1
1.1 本研究の目的	1
1.2 本研究の意義	3
1.3 本論文の構成	4
第2章 枠組み：予備的議論	5
2.1 日本語における「文」	5
2.2 文の定義についての再検討	7
2.2.1 単文と複文の境界	8
2.2.2 複文における従属節の構造と種類	9
2.2.3 文における階層性	13
2.3 複文の種類と整理	14
2.4 言いさし文の位置付け	18
2.4.1 白川(2009)の「言いさし文」	18
2.4.2 Evans(2007)の非従属化現象	20
2.4.3 大堀(2002)の中断節構文	22
2.4.4 本研究における言いさし文の定義	23
2.5 メタ語用論的知見の再検討	24
2.6 社会語用論的基盤	26
第3章 節の接続の考察	32
3.1 接続助詞の機能と定義	32
3.2 先行研究の再検討	33
3.3 「連用て形」接続と「連用非て形」接続	38
3.4 複合形式と文法化	38
3.5 「連用で形」の形態と意味解釈	40
3.6 「非て形」「て形」「し」「たり」の接続の異なり	42
3.7 「非て形」「て形」「し」「たり」のテンス	42
3.8 本章のまとめ	43

第4章 「し」の用法	45
4.1 「し」の歴史的変遷	45
4.2 地理的変異の扱い	45
4.3 先行研究における「し」の統語と意味	46
4.4 本研究における「し」の論点と分析の観点	48
4.4.1 「し」の接続要素	48
4.4.2 「し」の意味用法	49
4.5 「並列」と「理由」の区分と基準	50
4.6 「し」の構造形式と意味の関係	51
4.7 「し」の文と意味の関係	54
4.8 理由の文が成り立たない場合	57
4.9 南の分類における「し」の制約	58
4.10 本章のまとめ	59
第5章 「し」による言いさし文	60
5.1 「し」の「非連言用法」としての拡張的使用	61
5.2 言いさし文における「付加型」と「省略型」	61
5.2.1 「省略型」非従属化	61
5.2.2 「付加型」非従属化	62
5.2.3 「付加型」言いさし文の談話機能	63
5.3 「～し。」の語用論的機能	65
5.3.1 談話標識としての機能	65
5.3.2 完結させないやり方	67
5.3.3 話者交替における優位性の確保	70
5.4 本章のまとめ	71
第6章 「たり」の基本特性：選言性と言いさし文への拡張 ...	73
6.1 先行研究における「たり」の統語的特徴と意味用法	73
6.2 「たり」の統語的特徴	75
6.3 南の分類における「たり」の制約	77

6.4	歴史的変遷	78
6.5	「たり」の特性	78
6.5.1	「たり」の意味的特性	78
6.5.2	選言関係が成り立たない場合	80
6.6	非選言用法としての拡張的使用	80
6.7	話題を限定しない非選言使用の「たり」	81
6.8	「たり」の記述と総括	81
6.9	非選言用法「たり」の社会語用論的機能	82
6.9.1	「～たりする」の社会語用論的分析	82
6.9.2	関連事象とその拡張用法	83
6.10	「し」と「たり」の対人的機能	84
6.10.1	「し」とポライトネス	84
6.10.2	「たり」とポライトネス	85
6.11	本章のまとめ	86

第7章 因果関係から言いさしへ文の語用論的分化 89

7.1	「から」の意味用法と接続要素	89
7.2	理由を表さない「から」	91
7.3	「から」と言いさし文	92
7.4	「から」の談話標識としての機能	93
7.5	「し」との比較	94
7.5.1	「から」と「し」の統語的特徴と先行研究	94
7.5.2	「から」と「し」の語用論的機能	97
7.6	「ので」の意味用法と接続要素	102
7.6.1	「ので」と言いさし文	104
7.6.2	「ので」が言いさし文になりにくい理由	106
7.6.3	「し」との比較	106
7.7	「ので」の語用論的機能	107
7.7.1	「ので」と「し」の語用論的機能の比較	108
7.8	本章のまとめ	111

第8章 引用形式の言いさし化	113
8.1 先行研究における「って」	113
8.2 先行研究の批判的検討	116
8.3 引用辞の分析と考察	117
8.4 「し」と「って」の比較	122
8.5 本章のまとめ	125
第9章 「し」による言いさし文と終助詞の対立	126
9.1 終助詞の区分と機能	126
9.2 「よ」の特徴の分析	129
9.3 「し」と「よ」の機能比較	133
9.4 「ね」の特徴の分析	136
9.5 「し」と「ね」の機能比較	140
9.6 本章のまとめ	146
第10章 結論と今後の課題	148
10.1 結論	148
10.2 今後の課題	150
参考文献	152
資料	155

第1章 はじめに

1.1 本研究の目的

本研究では、日本語の構造特性に見られる様々な現象の中に、白川(2009)の研究にある「言いさし文」の現象、また、Evans(2007)の「非従属化」現象などにおける「従属節+接続助詞」で終わる文に注目し、それらの持つ統語論的構造と語用論的機能を考察することを目的とする。これまで、「言いさし文」は統語論的には、未完結で不完全なものとして、扱われてきた経緯がある。しかし、「従属節+接続助詞」で終わる「言いさし文」は日本語の特に会話文で頻繁に見られる。なぜ、日本語の会話文において、「完全文」ではなく、「言いさし文」が多用されるのか。「言いさし文」が好まれる要因として、日本語の持つ構造的性質とどのような関係があるのか。談話の中でどのような効果を持つのかなどについて、その現象を詳しく知りたいと考えたのが研究の出発点である。

「言いさし文」における典型的な例は「接続助詞」で終わる従属節だけの形式である。その中でも最近若者を中心に使用が多く観察されるのは、「泣いてないし。」「まだ夏だし。」などの新しい「言いさし文」である。本研究ではこのような新しい「言いさし文」の中でも特に注目したのは「従属節し。」である。若い世代のこれまでの「言いさし文」とは異なった使用と考えられる「従属節し。」に焦点を当て、これらが、談話の中でどのような機能を持って使用されているのか、その統語論的構造及び語用論的機能について考察する。

なぜ、接続助詞「し」で終わる「言いさし文」に特に注目したのかは、接続助詞「し」はこれまで、「今日は天気が良いし、暖かいし、出かけよう。」のように複文で並列的に述べ立てる用法が規範であったが、最近では、先の例のように従属節のみで終わり、「し」単独での非並列形式での使用が観察される。本発表ではこのような「し」の文法的機能の拡張、あるいは制約の変化が語用論的機能に関わるものと見て、まずその統語論的構造を踏まえ、談話の中でどのような機能を有するのか分析する。

次に、「たり」は「し」と同じく「今日は掃除をしたり、本を読んだりする予定だ。」のように並列を表す接続助詞であるが、「たり」もまた「し」と同じように最近の使用で「ワイン飲んだりしますか。」や「これ全部食べちゃったりして。」など「たり」に関しても、元の並列の用法から、「たり」の非並列形式及び言いさしでの使用が見られる。「し」は基本的に「a および b および c」と累加していく並列表現であるが「たり」は「a あるいは b あるいは c」とある集合の要素を提示し、その中からある要素を選び取るという特性を持つものと思われる。このような拡張的使用の「たり」について、談話の中でどのような機能を持って使用されているのかを分析する。これらの並列を表す接続助詞を分析することにより、談話における新しい単独使用・非並列使用の「言いさし文」への拡張が明らかになるものと考えられる。ここでは、さらに、「し」及び「たり」の非並列使用と語用論的機能との関係について

比較分析をする。「し」と「たり」は共に、並列を表す接続助詞に分類されているが、最近、非並列・単独使用が観察されるため、これらが社会語用論的機能として、対人的にどのような効果を持っているのか、二つの機能の異なりを含め、分析する。

次に、因果関係を表す接続助詞の「から」と「ので」について分析する。「から」は「し」と同じ接続助詞である。「から」は論理関係を標示し、原因結果を示す用法を持つ。一方「し」は事態関係認識を標示する機能を持ち、並立を表す。この二つの接続助詞は出現位置も似ており、「から」も「泣いてないから。」のように言いさし文でも多用されている。先行研究でも「「から」は「言いさし文」で頻用されている」としている。「から」も運用の中でその使用を変化させてきたものと考え、「から」を分析対象とする。

次に、同じく接続助詞の「ので」も「から」と対での研究がなされていることが多い。「ので」も「から」と同じように論理関係を標示し因果関係を表す接続助詞である。また「ので」は、「言いさし文」の場合、「から」とは異なり、「言いさし文」での使用が少ないと言える。これはどのような理由によるのか「から」との異なりも見据え検証する。

次に、「し」と出現位置が似ており、これまであまり研究のなされてこなかった引用形式の「って」についても分析する。「って」については「泣いてないって。」のような「従属節って。」での言いさしでの使用が見られる。「って」の言いさし文は先行研究、あるいは辞書記述においては終助詞あるいは終助詞的用法とされている。また引用構文における「泣いてないって(言っている)。のように、元は複文形式の構造を持っているものと考えられるが、複文の構造から、「し」と同じように、従属節のみで使用されている。「って」が運用の中で元の構造をどのように変化させてきたのか、言いさし文における談話機能はどのようなものか、分析する。

次に、「泣いてないよ。」「泣いてないね。」のように、命題の外に現れ、出現位置が「し」とよく似ている終助詞の「よ」と「ね」も分析の対象とする¹。国立国語研究所(1951:56-59)の先行研究では、「言いさし文」の「し」は、接続助詞「し」の終助詞的用法ともしている。出現位置が終助詞と似ているが、どのような異なりがあるのかを分析する。終助詞「よ」と終助詞の「ね」は先行研究においては対で研究対象とされることが多い。「よ」と「ね」を比較した先行研究も多くある。「よ」と「ね」を語用論的機能の面から分析し、談話の中で、どのような機能を持っているのか、その機能を分析する。

本研究では、これら「し」を中心に命題の外に現れ、機能語として共通性を持つ「たり」、「から」、「ので」、「って」、「よ」、「ね」が談話の解釈にどのような効果をもたらしているのか、その統語論的構造と語用論的機能を分析する。語用論的機能においては、メタ(語用論

¹ 他の終助詞「さ・ぞ・わ・ぜ」などもあり、これらを排除するものではない。

的) 標識として、主に談話標識としての機能を分析する。「たり」と「し」については、社会語用論的基盤として対人配慮の観点から、主にポライトネスとの関係を分析する。各章の最後には「し」との比較を試みる。「し」と他の表現を比較することにより、それぞれの持つ談話での機能の異なり、特徴を明らかにしたいと考える。

1.2 本研究の意義

本研究は、日本語の話し言葉においてなぜ「言いさし文」が多用されるのか「言いさし文」が話し言葉の中で、どのような効果を持って使用されているのかを考察することにより、「完結を避ける」など、日本語の話し言葉の構造的特徴が見えてくるものと思われる。

本研究では日本語における「言さし文」を研究対象としているが、「言いさし文」は通常、文法規則の上では未完結で、不完全な文であり、日常的な言葉使いとしての分野とされる傾向にあるが、決してそれだけではなく「節」が完結するとはどのような事なのかという意味を含んでいるものとする。日本語の文の成り立ち全体を解明するのはなかなか難しい問題ではあるが、本研究がその問題提起の糸口となり得ることを願う。

語用論的観点からは、最近の研究では、メタ語用論的標識とされることが多い、談話標識の研究では、自立的な要素ではないという理由で、接続助詞などは除外されてきた経緯がある。しかし、日本語においては本研究の対象である接続助詞もこれまで談話標識の研究対象となってきた接続詞と同じ機能を持っており、接続助詞類も談話標識としての機能を有すると考え、これらが談話の中でどのような機能を持っているのか、助詞類をも含めた研究の成果をまとめたいと考えている。

本研究における主な分析対象の「言いさし文」は、これまでの「言いさし文」とは異なり、新しく観察される「言いさし文」であると見られる。新しい「言いさし文」については、これまであまり研究がなされていないものと思われる。なぜ、このような拡張的使用が見られるのか。日本語の構造的特性との関係、談話における効果を明らかにしたい。また、語用論研究の分野において、社会語用論的観点から、主に対人的配慮の面と「言いさし文」の関係を、最近観察される単独使用の「し」と「たり」でみたいと考える。日本語でなぜ完結文ではなく「言いさし文」が選好される傾向にあるのか、使用動機はどのようなものなのか、どのような対人的機能を持つのかなど、これらを「言いさし文」の持つ構造的特性と語用論的観点の両方から分析することはこれまで、あまり行われてこなかったと思われる。

最後に、会話の場において、話者交替を考える時、本研究の対象である「し」の「言いさし文」は、どのような効果を持つのかについても検証する。これらの分析を通して、日本語の話し言葉における「言いさし文」の機能的特徴がわかることにより、その使用が好まれる理由が少し、明らかになるものとする。

1.3 本論文の構成

本論文の構成は、まず第1章では、「はじめに」で「研究の目的」と「研究の意義」を述べ、「本論文の構成」について述べる。次に第2章において、予備的議論として、本研究の主な枠組みについて述べる。ここでは、はじめに、先行研究を概観し、研究の枠組みについて述べた後、それらの議論についての検討を行う。

第2章の本研究の枠組みでは、統語論的構造については、主に「日本語における文」について、「複文における従属節の種類と構造」、「文における階層性」について取りあげ、「言いさし文の位置付け」と先行研究、「白川(2009)の言いさし文」、「Evans(2007)の非従属化現象」、及び「大堀(2002)の中断節構文」について述べる。次の「メタ語用論的知見の再検討」では、談話標識(discourse marker)について述べる。社会語用論的基盤として対人的機能の面から、ポライトネスを主な分析の軸として述べる。

次の第3章においては、「節の接続の考察」について述べる。

次の第4章では、「し」の用法」について述べる。

次の第5章においては、「し」による言いさし文」について述べる。

次の第6章においては、「たり」の基本特性：選言性と言いさし文への拡張」について述べる。ここでは「し」と「たり」を社会語用論的観点からその対人機能の分析も行う。

次の第7章では「因果関係から言いさし文への語用論的分化」として、接続助詞「から」と、接続助詞の「ので」について述べる。

次の8章においては、「引用形式の言いさし化」として「って」について述べる。

次の第9章においては、「し」による言いさし文と終助詞の対立」について述べ、主にこの章では、終助詞の「よ」と「ね」について述べる。

なお、これら各章の最後では「し」との比較について述べる。

最終章の第10章においては本論文の「結論」と「今後の課題」について述べ、本論文を終える。

第2章 枠組み：予備的議論

第2章では、枠組みについての予備的議論を行う。はじめに、本論文の枠組みとする理論の先行研究を概観し、その後、それらの先行研究の問題点について、再検討を行う。

日本語における言いさし文の統語論的構造について考える上で、主に、日本語の文及び複文についての先行研究を見る。複文の定義では、益岡・田窪(1992)と益岡(1997)を概観し、文の階層性では、南(1974, 1993)の先行研究をみる。その後、これらの先行研究に問題点はないのか整理、再検討を行う。

次に「言いさし文」では、白川(2009)の「言いさし文」についての先行研究と従属節が主節として再構築するという Evans(2007)の非従属化について述べ、大堀(2002)の中断節構文について概観し、その後、本研究における「言いさし文の定義」について述べる。

次にメタ語用論的知見については、談話標識について述べ、談話標識についての再検討を行う。次に社会語用論的基盤として、ポライトネスの枠組みを概観した後、これらの検討を行う。

2.1 日本語における「文」

学校教育における作文教育指導ではいわゆる「だらだら文」は悪文と名付けられ、永野(1969:182, 199)では、「だらだら文」は文が長くなる時に注意すべき第一の悪文症状である」と述べている。このことから、作文教育など特に書き言葉では、論理的で簡潔明快な「完結している文」が要求されることは確かであろう。

しかし加藤(2009:230, 231)では、「日本語は書こうと思えば、一文が1頁を超えるようなものも書けるかもしれないが、日本語はこれがそもそも可能で容易な言語である」と述べている。そして、「句読点を中心にした文章観は、西歐式と重ね合わせるにより、近代になって急速に普及したものであるばかりでなく、むしろ、このような日本人の本来的な表現の好みと相容れないものである」とも述べている。また、「そもそも古い時代の日本語は文の切れ目が明確ではない。現在のように句読点で文の切れ目を示す文章表記法が確立するのは近代に入ってからである」と述べ、「源氏物語」や「東海道中膝栗毛」の作品をあげ、「これらの作品は文が終わっているように見えるが、次に続いているようなところが多く、短い文を述べるような文章ではなく、切れ目なく章の終りまで文が続くような書き方さえみられる」と述べている。実際の日本語の使用では文を簡単に言い終わらないで、次につなぐようにして文章を編みあげていくというのが日本人の伝統的なやり方だったとし、これは、だらだら続き、しまりが無いようにも思えるが、状況に応じた柔軟な対応とも言えるとも述べている。また、「この事実は近代以降の日本語が明確に文を区切ることを強く意識す

ようになったからこそ奇異に思えるかもしれない」と続けている。

実際の話し言葉はどうであろうか。同じく加藤(2009:49, 50, 86, 87)では、日本語の構造的な特徴として「文を閉じたくない」現象をあげ、「文を完結させて、閉じなくても次に続けるように連鎖させることを許すことがこの背後にあり、文を閉じることで発生しがちな緊張を回避したり、断言することで生じる発話者の責任を回避したりしようとする心理が強く働いていると思われる」と述べ、断言して文を閉じるのを無意識に避けようとする日本人は「・・・して、・・・だが、・・・というこで、・・・なんだが・・・」ように接続助詞を多用して文をつなげることが多いが、それ以外にも文末になると声が小さくなってフェードアウトしてしまう話し方をすることもあると述べている。

確かに加藤が述べているように、かつての日本語は文を単文として切るという意識が希薄だったと言える。しかし、明治以降、西欧の文章が導入され、句読点を明確に打つ文章教育が始まり、一つの主語のみからなる単文や従属節と主節からなる複文などの区分が導入されるような形式が日本語で確立し、先に述べた学校教育での作文教育指導においても簡潔明解で完結する文を良しとするようになっていったと考えられる。

それでは、明治期から現在に至るまで「文とは」「文を切る」ということはどのように考えられてきたのだろうか。文の定義は、これまで何百という数で定義されてきたと言われているほど、考えられてきた問題であると言える。

これまでの主な文法論における「文の成立」を見ていくと、最初に、大槻(1897)は『広日本文典』の中で、『文の要素として主語と述語を備えるもの』としている。大文法論の一つである山田孝雄の議論では、山田(1936)は、『日本文法学概論』の中で、「一の句(=文)とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表を言う」とし、統覚作用については「吾人がここにいふ統覚作用とは、意識の統合作用を汎くさせるものなれば、説明、想像、疑問、命令、禁制、欲求、感動等、一切の思想を網羅するものなり」としている。山田孝雄のいう統覚作用とは「意識の総合的な作用」であり、このような統覚作用により、山田は文が成立すると考えた。のちの文法論に大きな影響を与えた「陳述」であるが、山田は「述体句=述語文」について述べ、文の成立には「陳述の力の寓せられてある点にあり」とし「陳述」により、文は文となるとしている。次に、橋本(1934)は『国語法要説』の中で、「文の前後には必ず音の切れ目がある」としている。また、時枝(1950)は『日本文法口語篇』の中で、「詞と辞」の概念を挙げ、「詞と辞」の結合により、文が成立するとしている。文の成立には「完結性」も必要であり、この完結性は終止形によって与えられるとしている。次に益岡・田窪(1992:2)の先行研究では、「文」については、「我々は言語を用いて相互の意思を伝達するわけであるが、言語表現の最も基本的な単位は「文」である。「文」はあるまとまった内容を持ち、形の上で完結した(表記において「句点」が与えられる)単位

である。文章や談話は、複数の文の有機的な組み合わせによって構成される」と述べている。

次に、仁田義雄・益岡隆志(1998)の『日本語のモダリティ』及び、益岡隆志(1991)の『モダリティの文法』では、「文は命題とモダリティからなり、モダリティは、「命題めあてのモダリティ」と「聞き手めあてのモダリティ」からなるとした。仁田は「文は、発話、伝達のモダリティ（聞き手目当てのモダリティ）を帯びることによって、まさに文になる」としている。

「文とはいかに成立するか」を、大文法論を中心に、駆け足で見えてきたが、文の成立を形式、要素に求める論、あるいは意味に求める論、様々である。

次に、加藤(2006:7-13)では、文の種類を表1のようにまとめている。

命令文：そのまま、主節になり、従属節になりえない。

疑問文：そのままの形で名詞節になることができるが、形容詞節になることができない。

平叙文：従属節を導く要素を使うことで、副詞節の一部になることができる。

また、「こと」などの形式名詞の前に現れれば、名詞節の一部になることができる。しかし、「疑問文」は形式名詞などにそのまま続くことができない。

表 1. 文の種類 加藤(2006:12)

文の体裁をなさない	本来的に、文の要件を満たさない、未分化な表現 例)「おい、太郎」		未分化な文
	潜在的には文であるが、文の要素が欠落しているもの 例)「水！」		不完全な文
文の体裁をなす	従属節にはなれない		命令文
	従属節になれる	そのまま名詞節にのみなる 例) 明日、行くかを聞いた。	疑問文
		名詞節の一部、副詞節の一部、形容詞節になれる 例) 英語を学んだ大学	平叙文

2.2 文の定義についての再検討

本研究では大木(2017)の定義に注目する。大木(2017:211)では、言語行為論の立場から文を機能的にとらえている。「文とは一つの発語内目的を持つ語・語列、あるいは一つの発語内目的を持つ語・語列を(続けられる場合において)接続形式で接続させたものであり、統語的關係が切れることによって成り立つもの、そしてそれは言語行為の基本的な単位体として働くものである」としている。また、大木(2017:191-198)では、統語的關係が続く範

囲が文であり、それが切れるところで文が終わるということ、文が切れることによって文が成り立っていると述べ、文が切れるという点について、行為達成のため、一つの言語行為完遂、行為の終結による断止という点を挙げている。「言語行為を行い、発語内目的を達成し得るのが言語を発する目的なのだ」とすれば、その行為が遂行されれば目的は達成されるため、その行為を続ける必要性はないということになる。そこで、一つの言語行為完遂と「切れる」ことが対応すると考えられる」としている。「例えば「そのテレビのリモコン」と言った瞬間に、リモコンを手に渡して貰えばそこで発話を終了することは普通かもしれない。「そのテレビのリモコン」という語列で要求表出という発語内目的が達成されたため、そこで、切ってしまったわけである。この場合の「切る」という面は、その文が「言いさし文」となるとはいえ、文の成立と即応するため、この点から見ても発語内目的が達せられると捉え、一つの発語内行為・言語行為の終結、あるいは言語行為完遂と「切れる」ということが対応しているということができるだろう」としている。この文についての大木(2017:191-198)の考えは多くの示唆を与えている。

しかし、ここであらためて、文の形とは何なのだろうか。「主語+述語」と構造的に与えられた形式を文の切れ目とするなら、文の切れ目が形式的にできないこともある。本研究では統語的には「言いさし文」のような完結しない文もあるという立場をとる。文の完結性は統語的な考え方に強く縛られていると考える。しかし、機能的には「文が切れる」とは、大木(2017:191-198)の立場を取り入れ、一つの発語内目的が達せられるということ、言語行為完遂と捉えることができると考える。

2.2.1 単文と複文の境界

ここでは、複文と単文の境界について、先行研究を概観する。

まず、益岡・田窪(1992:4,5)では、「単文」と「複文」及び「節」について以下のようにまとめている。

1. 単一の述語を中心として構成された文を「単文」という。

(1) 次郎は仕事が忙しい。

2. 複数の述語からなる文を「複文」という。

(2) 太郎が重い荷物を運んだので、花子は驚いた。

「複文を構成する述語を中心とした各まとまりを「節」と呼ぶ。上記の例では「太郎が重い荷物を運んだので」と「花子は驚いた。」は節である」としている。

また、益岡(1997:1-7)では複文について「複文」は「単文」と対立する概念である。「単文」とは、単一の述語を中心にして組み立てられる文のことである。これに対して、「複文」とは述語を中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文、すなわち、述語を中心としたまとまりが2つ以上集まって構成された文のことである」と述べている。また、「節」については、「複文における述語を中心としたまとまりを「節」とし、「節」には、それだけで文として独立できるものと、他の節に依存することで文の一部を構成するものがあるとし、それらの節をそれぞれ、「主節」「従属節」と呼んでいる。

2.2.2 複文における従属節の構造と種類

以下に益岡・田窪(1992:4,5)の「複文における「従属節」の構造と種類」についてみる。

1. 複文は複数の節で構成されるが、原則として、文末の述語を中心とした節が文全体をまとめる働きをする。この節を「主節」と呼ぶ。「主節」以外の節は「主節」に対して特定の関係で結びつく。この節を一括して「接続節」と呼ぶ。下記の例では「花子は驚いた」が「主節」で「太郎が重い荷物を運んだので」が接続節に当たり、接続節は、主節に対する関係の違いによって、「従属節」と「並列節」に分けられる。

2. 「従属節」とは、主節に対して従属的な関係で結びつくものをいう。

(3) 太郎が重い荷物を運んだので、花子は驚いた。

という文における接続節は主節に対して従属的な関係にあり、「従属節」とする。

「並列節」とは、主節に対して対等に並ぶ関係で結びつくものをいう。

(4) 花子が詩を書き、太郎が曲をつけた。

接続節である「花子が詩を書き」と、主節である「太郎が曲をつけた。」は、並列的な関係にある。この文は並列節と主節からなる複文であると言える。

また、益岡・田窪(1992:5)では、上記の「並列節」に関して「主節」に対して、対等に並ぶ関係で結びつく節を「並列節」と呼ぶとし、並列表現には、複数の節からなるものの他に、複数の名詞からなるものがあるとのべている。

以下に益岡・田窪(1992:5, 181-210)における主に複文の種類について図にまとめる。

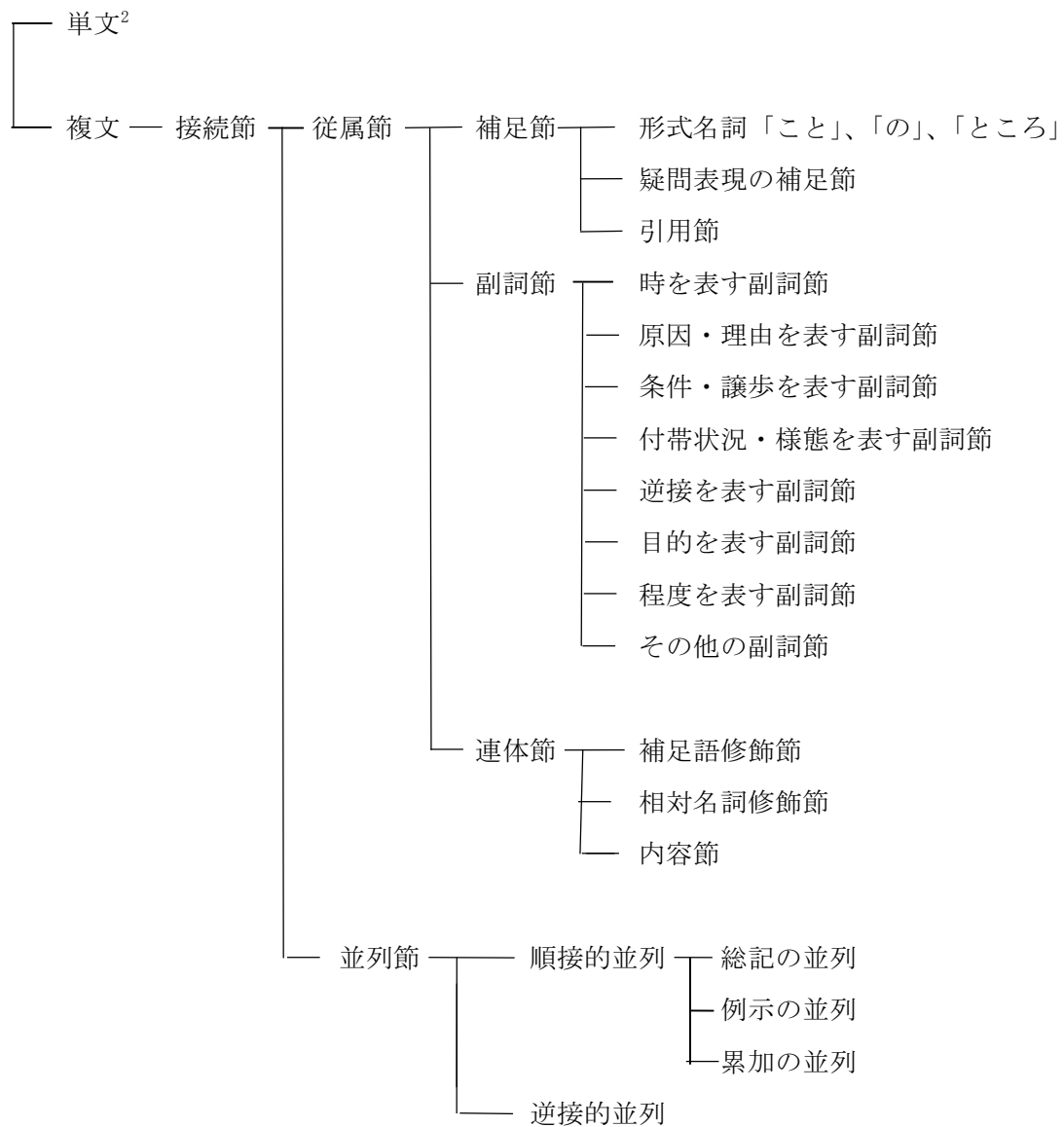


図1. 複文の種類 益岡・田窪(1992)³

次に、益岡(1997:1-23)では、従属節を下記の4つの類型に分類している。

² 主に「複文の種類」であるが、単文、複文の異なりを見る上で「単文」も表記する。

³ 前田(2009:13)を参考にしたが、本研究では、前田とは異なるまとめ方をとる。

【名詞節】

(5) 朝、早く起きるのは大変だ。

上記例の文において、「朝早く起きるの」という従属節は名詞の性質を持っている。名詞の性質を持った従属節を「名詞節」と呼ぶ。

【連体修飾節】

(6) これは、僕が昨日京都で買った古本だ。

上記例の従属節「僕が京都で買った」は名詞「古本」を修飾している。このような従属節を「連体（修飾）節」と呼ぶ。

【連用修飾節】

(7) 需要が増えれば価格は上がる。

上記例の「需要が増えれば」という従属節は「価格が上がる」という主節全体を修飾している。このような従属節を「連用（修飾）節」と呼ぶ。

【並列節】

(8) おじいさんは山へ芝刈りに行き、おばあさんは川へ洗濯に行った。

上記例の「おばあさんは川へ洗濯に行った。」は「主節」とみられるが、単独で文になることができる。また、この場合、従属節と主節の意味内容は対等な関係で並べられている。このような関係を「並列節」と呼ぶ。

益岡(1997:1-23)の文の分類を以下の図にまとめる。従属節の種類は、上記で述べた4種に分類している。

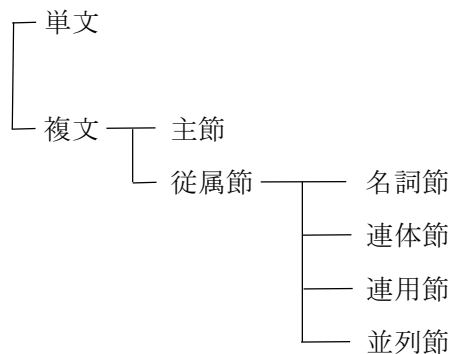


図 2. 文の分類 益岡(1997)

益岡・田窪(1992)と益岡(1997)の違いは、前者の方では「接続節」を「従属節」と「並列節」の二つに分けていたが、後者では「接続節」を設けず、「従属節」のみで「従属節」を4つの種類に分類し、「並列節」をこの4つの「節」の中に分類している点である。

また、加藤(2014:495-505)では、「複文とは、一般的に「1つ以上の従属節と1つの主節からなる文」をみなすことが多い。」と述べ、以下のように、その修飾構造から従属節の統語的な3つの区分をあげている⁴。

1. 連体修飾節 (=関係節、形容詞節) : 形容詞のように名詞を修飾する。主要部となる名詞句に先行して、その名詞句を修飾する節である。

(9) 私は、太郎が教えてくれた書店で、課題図書の中で最も高価な本を買いました。

2. 連用修飾節 (=副詞節) : 副詞のように述部あるいは述部を含む節を修飾する。連用修飾節は、述部が連用形を取るか、接続助詞を後続させることで形成する。連用修飾節は、後続の節の統語機能に依存する度合いが高い。

(10) 私は、昨日太郎に三平方の定理を覚えてもらったから、今日のテストで満点がとれました。

3. 名詞節 (形容詞節+主名詞 (連体修飾節+名詞)) : より大きい構造の中で、その全体が名詞相当として扱われる。

⁴ 例文(9), (10)は加藤(2014)による。例文(11)は、筆者によるもの。

(11) 市場移転の目途が立っていないことがわかった。

2.2.3 文における階層性

南(1993:74-120)では、文における階層性について述べ、従属句を「どのような要素を内部に含むことができるか」を基準として「A類、B類、C類、D類」に分類している。各類が内部に含むことができる要素は以下の通りである。本研究で取り上げる接続助詞「し」及び「から」はC類に分類される。また「たり」は後続章で述べるが、B類相当とされている。「って」はD類に分類される。

南の従属句の分類(1993)

【A類】

A類に含まれる要素：A類；ガ格以外の成分、ボイスおよび、それに関連する副詞的成分
A類に含まれにくい要素：ガ格、アスペクト、肯否、丁寧さ、テンス、対事的モダリティ、対人的モダリティ

【例】～ながら など

(12) 背中の子供に音楽を聞きかせながら、勉強する。

【B類】

B類に含まれる要素：A類に含まれる要素、A類、B類；ガ格、アスペクト、丁寧、否定、テンス、A類、B類に含まれる要素に関連する副詞的成分
B類に含まれにくい要素：主題、対事的モダリティ、対人的モダリティ

【例】～て、～ので など

(13) 戸をボタンと閉めて、出て行った。

(14) レポートの締めきりが迫っているので、気持ちが焦ってきた。

【C類】

C類に含まれる要素：A類、B類に含まれる要素、A～C類；主題、対事的モダリティ、
A類～C類に含まれる要素に関連する副詞的成分
C類に含まれにくい要素：対人的モダリティ

【例】～から、～し など

(15) もう遅くなったから、帰るとしよう。

(16) もう遅いし、帰りましょうか。

【D類】

D類に含まれる要素：A類～C類に含まれる要素；对人的モダリティ、A類～D類に含まれる要素に関連する副詞的成分

【例】引用～と（って）

(17) 彼は「もうすぐ出かける」と言った⁵。

2.3 複文の種類と整理⁶

初めに、益岡・田窪(1992:5, 181-210)では、日本語文法を体系的にまとめており、これらの点では評価できる。「複文」については、主節と接続節とに分け、接続節を従属節と並列節に分けている。しかし、その後の益岡(1997:1-23)では、接続節を使用せず、従属節のみになっている。この変更理由が明らかになっていない。また前者の研究において、「て形」「連用形」「たり」「し」を「並列節」として、ひとまとめにしているが、これらは詳しく見るとかなり違いがある。「て形」「連用形」「たり形」はテンス分化を持たず、「し」はテンス分化を持つ。するとこれらを全て、「節」として同じようにまとめていいものなのか疑問が残る。益岡・田窪(1992:1-5)の「複文」と「節」の定義についてもう一度見ると下記のよう記述してある。

・複数の述語からなる文を「複文」という。

(2) 太郎が重い荷物を運んだので、花子は驚いた。 (再掲)

「複文を構成する述語を中心とした各まとまりを「節」と呼ぶ。上記の例では「太郎が重い荷物を運んだので」と「花子は驚いた。」は節である」としているが、これはかなり大まかな定義である。これらの点において、より詳しい記述が必要だと考える。益岡・田窪(1992)では、いわゆる並列節なのか、従属節なのかの問題には、小さく「注」の中で触れているに過ぎない。本研究ではこれらをあらためて考えてみることにする。

以下に益岡・田窪(1992:207)の「並列節」での例をあげる。

(18) 太郎は、芸術の才能もあるし、スポーツも得意だ。

⁵ 含まれる要素については、庵(2001:200-205)を参考とする。

⁶ 大木(2017:211)では、複文に於ける「文を切る・続ける」という点について、「ある語列(語)が一つの発語内目的を担えば、そこで「切れる(切って文にする、文に切る)ことができる。」そして① 相手の反応に委ねる内容を持つ言語行為のあと ② 瞬間性に即応した言語行為のあとでなければ接続形式を使いながら、さらに別の発語内目的を担う語列を続けることができる」としている。

そして、「注」の中で、「接続助詞「し」には、並列表現全体を主節に対して従属的に結び付ける用法がある」とし、以下の例を挙げている。

(19) 締め切りは迫っているし、体調は悪いし、一体どうしたらいいのだろう？

本論文では、この問題を検討する上で、「複文」と「重文」の区別について触れなければならないと考える。

(20) 太郎は絵の才能があり、花子は音楽の才能がある。

(21) 太郎は絵の才能があって、花子は音楽の才能がある。

(22) 太郎は絵の才能があるし、花子は音楽の才能がある。

上記例はいずれもいわゆる「重文」と呼ばれているものである。(20)は連用中止法を使用しており、次の(21)は連用て形、次の(22)は接続助詞「し」を使用している「一つの文の中に複数の節を含むものにはそれらの文の間に従属関係がある場合(複文)と、従属関係がなく、並列的な関係になっている場合(重文)が考えられる。また、主節は他の節などに従属していない節、主節でないものを従属節としている。

上記例では「太郎は絵の才能がある」ことと、「花子は音楽の才能がある」ことは対等の資格で結ばれていて、どちらが主でどちらが従かは区別しにくい。主節と主節が並列されているものとみることができる。上記の例は全て重文になる。

では次に「複文」の例を見る。

(23) 今日は天気が良いから、洗濯物がよく乾く。

例(23)では、「今日は天気が良い」という節は、接続する節の理由を言っており、「洗濯物がよく乾く。」を主節とし、前の節を従属節とする、いわゆる「複文」になっているとみることができる。「重文」は、複数の主節からなるが、それらの間には主従関係はなく、いずれの節も等しい資格で並んでいるものである。しかし、確かに「等しい」ようには思えるが、先の「重文」の例をみると、例(20)と例(21)は一つ目の節で時制は表示できず、二つ目の節を過去形とすれば、全体は過去のことになる。しかし「し」の場合は、すべての節で時制を表示できる。また、一つ目と二つ目の時制を変えても「し」は成り立つことになる。時制をみると、この場合、節はすべて等しく、対等と言えるのかどうかという問題が生じる。そう

すると、これらを「重文」と見るのか「複文」と見るのかというこの区別が非常に難しくなる。

加藤(2006:7-12)では、日本語の複文構造についてを以下のようにまとめている。

節：単独で文を形成できる最小の単位

単文：一つの節だけで形成されている文

複文：一つの文の中に複数の節を含むもので、それらの文の間に従属関係がある場合と、従属関係がなく並列的な関係になっている場合がある。前者を複文、後者を重文と呼ぶ。

主節：他の節などに従属していない節

従属節：主節でない節

加藤(2006)における「複文構造」を「表2」に示す。

表2. 日本語の複文構造 加藤(2006:9)

一つの節からなる		単文	文＝主節
複数の節からなる	従属節を含む	複文	文＝従属節＋主節
	従属を含まない	重文	文＝主節＋主節

加藤(2006)では、従属節は以下の3つに分けることができるとしている。

- (1) 名詞を修飾する働きをしているもの（形容詞節/連体節/関係節）
- (2) 全体が名詞の性質を持つ節になっているもの（名詞節）
- (3) 用言を含む主節を修飾しているもの（副詞節/連用節）

また、加藤(2006:11-12)では、重文については、「節と節が並列している文であるが、前の節は構造上、副詞節であることが多く、原則として、前の節が従属なら複文、並列なら重文になるが、どの程度独立しているかは意味的關係によることも多く、明快な境界線は引きにくい」としている。加藤(2006:11-12)では、重文を設けてはいるが、「文法入門書」とし

て書かれたものであり、加藤は「重文」を認めない立場に立つ。

「重文」と「複文」についてはその区別は連続していると考え。並列節か従属節かまたは「節」か「句」かの判断もある。加藤(2014:505-508)では、「節とするもの」「節ではないもの(句)」の判断として、意味的に前者が「テンスを持つもの」と後者が「テンスを持たないもの」としている⁷。本研究では加藤(2014:505-508)の先行研究を参考にし、並列節は「節」になるものと「句」に留まるものを分類する必要性があり、連体修飾節も「属性叙述」を表すものと「事象叙述」を表すもので「テンスを持たないもの(句)」「テンスを持つもの(節)」に分類する必要性があると考え。これは、「言いさし文」を考える時、「文」とは、「節」とは何かという大きな疑問を解く糸口にもなるものと考え。

続いて、加藤(2006:11)では、副詞節は形容詞節や名詞節に比べると自立性が高いため、従属節だけで文を終えてしまうことがあるとして以下の例を挙げている。

(24) 明日は忙しくて参加できないと思うんだけど。

(25) この件についてはもう太郎に頼んであるから。

これらは、副詞節で、接続助詞で終わる本研究の「言いさし文」と同じものである。日本語では副詞節の自立性が高いため、接続助詞で文を終えることが可能である。日本語の副詞節は自立性が高いという統語的機能により、「言いさし文」が作りやすいと考えられる。

本研究における重文と並列節の扱いであるが、並列節は一様ではないため、これらは従属節に組み込むこととし、従属節の中の「並列節」という考え方をとる。従って、「重文」という考えは本研究ではとらない。また、「節」か「句」かの判断は加藤(2014:97-121)のものを参考とする。

次に、南の分類については、他の研究でも使用され、接続形式に注目した分類である点で評価できる。その後、他の研究者により、修正を加えられてきている。本論文の「言いさし文」との関係では、従属節を主節から独立させて、分類した点が評価できる。これまでは、従属節のみの文は、未完結で、文として統語的に不完全なものとして重要視されてこなかった経緯がある。しかし南の観点に立てば、「従属節+接続助詞」で終わる言いさし文も文として独立性を持つものとして考えることができることになる。本研究では、「し」を始め、

⁷ 加藤(2014:505-508)では、「節」「句」として以下の例をあげている。

- (1) エアコンから{乾いた【テンスなし・属性叙述】/乾いている【テンスあり・事象叙述】}風が出ている。
- (2) 今のところ{*乾いた/乾いている}風
- (3) 凍結乾燥機の中で、瞬間的に乾いた苺【テンスあり・事象叙述(節)】
- (4) エアコンからかなり乾いた風が出ている。【テンスなし・属性叙述(句)】
- (5) 乾いている苺/乾いている風【テンスあり・事象叙述(節)】

分析対象においては、従属節に含まれる要素の異なりによって、文に階層性がみられ、節の独立性の高さも明らかになると考え、本研究では、南(1993:74-120)の分類も分析の枠組みにする。

また、先に述べた大木(2017)では、発語内目的という観点から文をとらえているが、本論文では、統語論的構造及び語用論的機能の両面から、言いさし文を検証する。

2.4 言いさし文の位置付け

この節では、本研究における「言いさし文」を考える上で、代表的な先行研究と言える「白川(2009)の言いさし文」、「Evans(2007)の非従属化現象」、「大堀(2002)の中断節構文」を見る。

2.4.1 白川(2009)の「言いさし文」

白川(2009:1-12)では、広義の「言いさし文」として、「従属節だけで、言いたいことを言い終わっている文」としている。白川のいう「言いさし文」とは言い切りの意味で使用されているものであり、主節を欠いた統語的に不完全な文による発話を指しているが、内容的には完全な「文」と同等の完結性を持った発話が対象になっている。

白川(2009:11)では「言いさし文」の類型として3種類のタイプにまとめている。研究対象は以下の「言い尽くし」と「関係づけ」のタイプに属する「言いさし文」としている。「表3」に白川(2009)の「言いさし文」の類型を示す。

関係づけ：関係づけられるべき事態が文脈上に存在する

言い尽くし：関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文

言い残し：言うべき後件を言わずに途中で終わっている文

表3. 「言いさし文」の類型 白川(2009:11)

	関係づけ	言い尽くし	言い残し
主節の非存在	+	+	+
発話内容の完結性	+	+	-
関係づけられるべき 事態の文脈上の内容	+	-	-

白川(2009:8)では、上記「言い残し」として、以下のような例をあげている。

(26)

恵子： 恋愛なんてサ、恥かかないでモノのできるほどナマやさしくないわよ。

みのり： わかっているけど・・・・・・・・

そして、この言い残しの説明として、上記例において、話し手は、後件を言わずに言葉を濁している。表現されなかった内容は、聞き手の側で検討をつけなければならない。その意味で、文字通りの言いさしであり、内容的に未完結である。これらは、的確に言えば「言い残し」というのがふさわしい文である。白川(2009)ではこのタイプの文は考察の対象とはしないと、また、「関係づけ」としては以下の例をあげている。

(27)

耕作：美味しいっ。

ともみ：おいしいね。

耕作：今日はよく働いたから。

ともみ：お腹空いていると何でもおいしい。

耕作：いや。料理上手だよ。

ともみ：田舎料理は得意なんや。もともと百姓の娘やから。

そして、上記例の「から節」は、「(食事が) 美味しい」という既定の事態と因果関係で関係づけられている。あえて主節を補って「完全文」の形で言うならば、次のようになるだろうとして以下のように説明している。

(28) 今日は、よく働いたから、美味しいんだ。

また「関係づけ」について、「重要なことは言語表現として主節が唯一的に復元できることではなく、「から節」で関係づけられるべき事態がすでに文脈上に存在し、どういう事態に対して「から節」の発話が向けられているかが聞き手にとって容易に解釈できることである」としている。

そして「言い尽くし」の「言いさし文」として、言い残しがなく、なおかつ、従属節の内容と関係付けるべき事態が文脈上に見つけられるわけでもない「言いさし文」、すなわち、従属節の内容のみで言いたい内容を言い尽くしている「言い尽くし」の「言いさし文」として次の例をあげている。

(29) 大樹が出て行く

大樹： 行ってきます

正樹： うん・・・・・・・・

慎平が部屋から出てきて、

慎平： おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入っているからな。

大樹： うん、行ってきます！

上記の説明として、「例は話し手の言いたい内容は前件のみで言い尽くされている。

実際、母語話者であれば、この後に続くべき後件を待っている人はいないだろう。現にこの「言いさし文」においては、その直後に相手である聞き手が会話のターンを取っている。この反応を見て「相手の発言の途中で割り込んでいる」と感じる母語話者はいないだろう」としている。そしてこの例の「から節」と「関係づけ」の「から節」の違いとして、「前者は主節に相当する事態は文脈上どこにも存在しないが後者はすでに文脈上存在している事態に関係づけられる形だから節が使われている」している。

本研究では、白川(2009:1-12)の「言い残し」について、これも分析対象とする。何故なら、白川は「言い残し」について、「表現されなかった内容は聞き手の側で検討をつけなければならない。その意味で、文字通りの言いさしであり、内容的に未完結であり、「言い残し」とするのがふさわしい」としている。しかし、本研究は語用論的機能を分析することもその目的としている。この白川(2009:1-12)の「言い残し」も、聞き手の推論に任せるといふ話し手の意図も考えられるため、この「言い残し」も分析対象となり得ると判断し、研究対象とする。また、この「言い残し」が果たして内容的に未完結と言えるのかどうか。完結性を持たないとは言い切れず、完結しているかどうか明確には判断できないものも広義の「言いさし文」として捉えることとする。

2.4.2 Evans(2007)の非従属化現象

また、Evans(2007:366-376)では「非従属化(insubordination)(従属節の主節化)」の定義を「形式的には一見明白な基準で従属節のように見えるものの慣習化された主節用法」とし、非従属化に至る4つの段階を以下のようにあげている。

- (1) 従属関係(複文の段階)
- (2) 主節の省略(偶然、省略が起こる段階)
- (3) 主節の省略の慣習化(一部慣習化される段階)

(4) 主節としての従属節の再構築（慣習化され文法規則となる段階）

(30) 私たちが正しいかどうかわからない。➡私たちが正しいかどうか。

(31) *Ob wir richtig sind.*
Whether 1. PL. right COP(1. PL.)

(32) I wonder whether we are right.

* Whether we are right.

上記例は日本語の場合とドイツ語、英語の例をあげたものである。ドイツ語の例(31)は主節の省略が可能である。このドイツ語の非従属化の特徴は、従属節での語順が変わり動詞が日本語と同じ最後に位置していることである。語順が変わることにより、従属節が主節として再構築されている非従属化となっていると見ることができる。日本語の場合の例(30)も「わからない」の部分の省略は可能であると言える。英語の場合は例(32)の下のようにはできない。

Evans (2007:366-376)の言う非従属化現象とは、主節の省略の慣習化である。また、ドイツ語など、左方部主要型の言語で、時間軸上先に構造を決めて話し、話ははじめから省略を決めて話すことが可能であるいわゆる固定化された「構造的省略」であり、Evans (2007:366-376)も構造的に省略が可能であるドイツ語の例をあげている。また、非従属化とは主節の省略の慣習化（規則化）であり、省略された主節の復元も可能であると言える。

本論文では、Evans (2007:366-376)における非従属化現象と日本語における「言いさし」の現象は同じ現象なのかという点について再考する。Evans (2007)の言う非従属化現象とは、主節の省略の慣習化である。また、ドイツ語などは、左方部主要型の言語で、先に述べた、時間軸上先に構造を決めて話し、話ははじめから省略を決めて話すことが可能であるいわゆる固定化された「構造的省略」であると言える。Evans (2007:366-376)も構造的に省略が可能であるドイツ語の例をあげている。これは右方部主要型の日本語との大きな相違である。

日本語の場合は右方部主要型の言語であり、主要部を後で決められる構造を持つ。加藤 (2014:510-518)で述べられているように、意味的重要性は左方の従属節になるが、右方にある主節は情報内容に影響を与えないモダリティの要素などがくることになり、右方での調整は可能になると言える。そのため、文末は接続助詞を付加し、続けることもできるし、切れることもできるのである。いわゆる発話の生産過程でその変更が可能になり、話し始めからその構造を決めて話す固定型の非従属化のタイプとは異なる。日本語の場合、何も決めずに

話し始め、完結した文も選択できるし、あえて接続助詞を付加した上で主節を潜在化することも可能であり、可変性を持つ。また慣習化（規則化）の場合とは異なり、付加型の「言いさし」の場合は主節の復元が出来ない場合もあり、Evans (2007:366-376)の非従属化とは異なるタイプの非従属化と考えられる。

2.4.3 大堀(2002)の中断節構文

また、大堀(2002:127-131, 195, 196)では「中止め・言いさし」の用法を、中断節構文という名称で呼び、その枠組みを示している。また、接続助詞「し」の中断節構文を例にとり、「後続する節が省略された時には、「並列」の意味が得られないために「理由」の意味だけが可能性として残り、それが使用の場面で強化されるとしている。中断節という構文の枠組みが与えられると元々、何通りかの解釈をとる接続構造が一定の解釈に限られるという点をあげている。

(33)

構文：中断節

統語論的カテゴリー：文

意味論的特徴：推論集約的

語用論的特徴：対人機能

[[節〈依存：±、埋め込み：-〉] — 接続辞 #]

そして、接続助詞「し」の中断節構文を例にとり、中断節という構文の枠組みが与えられると元々、何通りかの解釈をとる接続構造が一定の解釈に限られるという点をあげている。

この構文になるプロセスを以下のように説明している。

(34) P-シ、Q (P-並列-Q) → P-シ、Q (P-並列 / 理由-Q)

→ P-シ、 ϕ (P-理由- ϕ)

大堀(2002:127-131, 195, 196)では、「言いさし文」において、並列の意味は失われ、理由の意味に集約されるとしているが、本論文では、「従属節し。」においても並列の意味は失われてしまっているとの立場はとらない。従って、「理由の意味だけが可能性として残る」のでもないとする。「し」における意味用法は基本的に並列の用法であり、理由の用法はそもそも確立、固定化していない用法であったと思われるが、この点においては、通時的な検証が必要である。第4章の「し」の用法で詳しく述べるが、「し」は基本的なその統語構造

から並列と理由の二つの用法に、明確に分かれるものでもなく、二つが重なり合うこともあり得る。また、「し」の理由の意味は「し」そのものにあるのではなく、前件と後件の文の異なりによって生じるものであるとの立場をとる。発話内行為を持つ異なる文の種類をつなげる時、「し」は理由・根拠を表す効果を示すことができるものと見る。

従って本論文では、「し」の用法は基本的に並列・列挙であり、理由の意味合いは前件と後件の持つ文の性質が異なる場合に生じるものとの立場に立つ。「し」は本来の並列の用法から、「従属節し。」で打ち止めていても、統語論的構造から潜在的にその並列性は続いており、従って、「言いさし文」の用法には、並列の場合もあり得るし、理由の場合もあり得ると考える。

2.4.4 本研究における言いさし文の定義

これまで、言いさし文は、統語的には未完結で、不完全な文として扱われてきた経緯がある。しかし加藤(2006:355)では「動的言語観」について述べ「言語は常に変化しつづけるものであり(中略)言語は不完全な規則体系なのであって、その言語の不完全性こそが言語変化の原動力になる」としている。本論文の研究対象である新しい「言いさし文」も統語的には未完結であるが、動的言語観の観点から、研究対象になり得るものとの立場に立つ。

また、大木(2017:187)では、日本語の文を機能的に捉え、「一つの発話内目的を担っている語列が文という単位体である」としている。従って、「言いさし」も例えば、「それ、取って。」で話者の発話内目的「命令(依頼)」を遂行でき、発話者の発話意図(目的)が反映されているものと考え、機能的には文と捉えることができると考え、「言いさし文」と呼ぶことにする。

本研究における「言いさし文」は、統語的には「従属節+接続助詞。」のように、従属節のみで終わるものを指す。「言いさし文」は、これまで、統語的には不完全な文とされてきたが、内容的には完結性を持っている独立文として機能しているものと考え。本研究の「言いさし文」は、従属節の前に並存する他の文や節はなく、話し手の意図で従属節のみで終える場合、本研究では「言いさし文」と呼ぶ。本研究の分析対象とする「言いさし文」の例を下記にあげる。

(35) 「従属節+接続助詞」 「泣いてないし。」

(36) 「従属節+接続助詞+終助詞。」 「まだ夏だしね。」

2.5 メタ語用論的知見の再検討

最近の研究動向としては本節で取り上げる談話標識を「話し手のメタ語用認識を反映するもの」として広く談話標識を捉え直し、「メタ（語用論的）標識」と呼ぶようになってきている。本研究では、それらの動向を確認し、加藤(2004:220-228)の「談話標識の機能」を参考に語用論的分析を行う。

談話標識(discourse marker)⁸は、『日本語文法辞典』⁹(2014:399-400)において、次のような説明をしている。「談話標識とは、談話の前後の構造に依存し、談話の単位を区切る機能を持つものである。文をつなぐ‘and’‘but’‘so’などの接続詞、情報の受け取りを示す‘oh’などの間投詞、話者の主観的態度を表示する‘I mean’などの語句であり、それぞれ談話を区分すると同時に構造的(structural)・認知的(cognitive)・社会的(social)な機能を持つ形式である。談話の全体構造を指し示すものや語用論的態度を指し示すものを含む。」としている。また、「談話の展開そのものに言及するメタ言語的発話、接続表現などを談話標識と呼んでいる。」としている。また、「メタ言語的発話」についても説明しており、「メタ言語的発話」は言語行動を注釈したり、説明する言語表現であり、具体的な例として、実際の電話の会話においては、談話の始まりを示す「話は変わるけどね？」や談話の展開を示す、「そう言えば」、談話の終わりを示す「そういうわけで」、などを「メタ言語的発話」の例としている。また「メタ言語の機能」として(話題の提示、焦点化、総括、サブポイント提示、補正、表現の検索、宣言)の7つに分類し、これらは、討論において聞き手の助けになると指摘している。また、接続表現は文脈を展開するために用いられ、話を開始する機能、「それでは」など、話を展開する機能、「さらに、ところで」など、話を終了する機能、「というわけで」などの文脈形式であるとしている。

語用論の研究分野においては、加藤(2004:211-228)では、談話標識について述べている。

加藤(2004)では、「談話標識の定義はいろいろあるが「論理つなぎ語(logical connectives)」や「談話つなぎ語(discourse connectives)」などと呼ばれることもあり、これまでの欧米の研究では‘but’や‘though’などの接続詞、‘after all’や‘so’などの(接続)副詞、‘well’や‘oh’などの間投詞が主に扱われてきた。一方、日本語では「しかし」「だから」などの接続詞のほか「どうやら」「どうも」などの副詞類の分析が行われてきたと述べ、談話標識の定義は「談話上の目印で、言語運用に関する情報を提示するもの」として、「発話に関する

⁸ 「談話標識」という用語は主に1980年代に使用されたが、2010年代からは「メタ語用(論)的標識(metapragmatic marker)」の用語が使用される傾向にある。

⁹ 日本語文法学会編(2014)『日本語文法事典』

る情報を談話標識によってあらかじめ提供することで、聞き手に、より適切な受容をさせる機能を持つもの」としている。「目印は分かりやすくするために使用するものだが、その他にも機能を持つ」と述べ「会話ではセッション中に表れた情報が短期記憶に収蔵されて行くが、短期記憶に取り込む際に目印があれば整理しやすく、情報の位置づけも理解しやすいなどの利点があるので「伝達上の目印」には重要な役割がある」と述べ、「談話標識の機能」として以下の8つをあげている。

【加藤(2004:227, 228)による談話標識の機能】

- ① 情報と情報のつなぎ方〔論理的な関係を示すもの〕
- ② 提示する情報に関する話者の確信の度合いを示すもの
- ③ 情報の取得に関するメタ情報を示すもの
- ④ 判断のプロセスなど情報の管理状態に関するメタ情報を示すもの
- ⑤ 発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すもの
- ⑥ 相手の発話の受容のあり方に関する情報を示すもの
- ⑦ 発話の事前状況についての話者の認識を示すもの
- ⑧ 会話を物理的に円滑に進める上で必要な機能を持つもの

同じく加藤(2004:220-228)では、談話標識が実態として、「文と文の接続に関わる要素」に限定されるなら、やはり、「談話つなぎ語」のように呼ぶ方が正確であり、また、談話の目印が「談話標識」なのだとすれば意味する範囲は広くなり、接続に関わるマーカーはその一部でしかありえない。」とも述べている。「日本語の場合、接続詞と同様の機能を持つ接続助詞があるので、英語を対象とする研究と同じやり方では解決できない問題が生じてくる」とも述べている。日本語の場合、接続詞と同じ機能を持つものとして、接続助詞がある。下記のように伝える内容に実質的な変わりはない。

- (37) 今日は天気が良い。でも、私は出かけない。(接続詞)
- (38) 今日は天気が良いけど、私は出かけない。(接続助詞)

「これまでの研究では、意味機能はほとんど同じであるはずの助詞が形態論上の理由で、除外されていたが、談話つなぎ語を考える時、助詞などの自立的でない要素も無視するわけにはいかない。」と述べている。

上記の加藤(2004:220-228)で「日本語の場合、接続詞と同様の機能を持つ接続助詞があるので、英語を対象とする研究と同じやり方では解決できない問題が生じてくる」と述べてい

たように、本論文では、日本語の場合、接続詞と同じ機能を持つものとして、接続助詞があり、伝える内容に実質的な変わりはないとの立場をとる。本論文の研究対象である「し」、「たり」、「から」「ので」及び「って」「よ」、「ね」などの接続助詞及び終助詞類も、談話標識としての機能を有するものと考え、これらの機能について具体的な会話例をもとに分析、考察する。

これまで、終助詞の「ね」及び「よ」については、談話標識としての機能について述べた先行研究は見られるが、接続助詞類については、談話標識としての機能を分析した研究は少ない。特に本論文の分析対象である接続助詞類は、上記の談話標識の機能における、⑤発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すもの、及び ⑥相手の発話の受容のあり方に関する情報を示すものとしての機能を持つものと見ている。これらは、各々の章の語用論的機能の中で詳しく考察する。

2.6 社会語用論的基盤

滝浦(2016:77)は社会語用論について「一般語用論の中で社会学と関わりの深い部分とし、社会語用論はとりわけ、社会の中での人の言語的ふるまいを対象とするカテゴリーであり、人と人がどのように関係を構築・維持・変容させてゆくかにかかわる言語的対人配慮、つまりポライトネスの問題がその中心課題として見えてくる」と述べている。本論文も、言語的対人配慮という観点から、ポライトネス(politeness)も分析の軸とする。ポライトネス(politeness)の原理は、リーチ(Leech (1983) *Principles of Pragmatics.*)によって1983年に提唱された。

リーチは「他者との衝突を避ける」ためのコミュニケーションの目的を6つの原則にまとめている。この原理は「相手にとって望ましいことを最大に、望ましくないことを最小に」という内容である。これらはグライスの「協調の原理」を補足するものと捉えられていた。

- ① 気配りの格率・・・他者への負担を最小に、他者への利益を最大に
- ② 寛大さの格率・・・自分への利益を最小に、自己への負担を最大に
- ③ 是認の格率・・・他者への非難を最小に、他者への賞賛を最大に
- ④ 謙遜の格率・・・自分への賞賛を最小に、自分への非難を最大に
- ⑤ 同意の格率・・・意見の不一致を最小に、意見の一致を最大限に
- ⑥ 共感の格率・・・反感を最小に、共感を最大に

次にロビン・レイコフ(Robin.Lakoff (1975) *Language and Women's Place.*)は3つのルールをポライトネスに関係するものとして提案している。

- ① 改まり：距離を保て
- ② 敬意：選択の自由を与えよ
- ③ 親愛：共感を示せ

次に **Brown and Levinson**(1987)では「人と人の言語的振る舞いとらえるための枠組み」を理論化した¹⁰。その理論はゴフマンの「フェイス概念」を参考に「フェイス(face)＝ポライトネスという対人配慮の向けられる対象」を「人間の基本的な欲求」と捉え、人がコミュニケーションの中で自他のフェイスに配慮するさまを体系化したものである。

滝浦(2008)の訳では「ポライトネスとは、会話の場において表現・伝達される、主として相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・保証的な言語的配慮のことである」としている。その中では二つの「フェイス」概念をあげている。

ネガティブ・フェイス＝他人に邪魔されたくない・踏み込まれたくない欲求

ポジティブ・フェイス＝他人に受け入れられたい・よく思われたい欲求

また、ポライトネスが具体的に表現・伝達される手段のことを「ストラテジー(strategy)」と呼び、「ポジティブ・ポライトネスのストラテジー」とその下位ストラテジー15と「ネガティブ・ポライトネスのストラテジー」とその下位ストラテジーを10あげている。また、意図伝達を非明示的に行う「ほのめかし(off record)」として、15の下位ストラテジーを上げている。

以下に、具体的に示す¹¹。まず、「ポジティブ・ポライトネスのストラテジー」では、

- A) 共通基盤を要求せよ¹²
- B) 話し手と聞き手が協調関係にあることを伝達せよ
- C) なんらかの X に対する聞き手の欲求を実現せよ

としているが、滝浦(2008:34)では「ポジティブ・ポライトネスのストラテジー」を「相手との距離を縮め、相手との共感のポライトネス、あるいは連帯のポライトネス」と言えるとして、これらの下位ストラテジーの具体的な例として、同じく滝浦(2008:34)では、「相手を褒める、一致や共感できる点を見出そうとする、相手の小さな変化に気づく、申し出や約束

¹⁰ 滝浦(2008:9-19)を参考にしたもの。

¹¹ 日本語訳は滝浦(2008:34-45)を参考にしたもの。

¹² A)～C)の日本語訳は「言語情報学概論 2017 (加藤重広)」講義資料参考

をすることで、行為の共同性に訴える、また冗談を言うことも人間関係が近く、共通基盤が大きからこそ、可能な表現手段と言える」としている。

次に「ネガティブ・ポライトネスのストラテジー」としては、滝浦(2008:41)では「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくないという自己決定の欲求を顧慮するストラテジー」とし、「相手の領域に踏み込むことや直接名指すことを避け、遠隔的表現と間接的表現によって、相手を遠くに置き、事柄に直接触れないようにする、表現の敬避性を特徴として、「回避」または「敬遠」のストラテジーと言い換えることができる」としている。

- A) 直接的に¹³
- B) 推定や想定を立てない
- C) 聞き手を威圧しない
- D) 聞き手の権利を侵害したくないという話し手の希望を伝達せよ
- E) 聞き手の欲求を矯正せよ

次は「非明示的なストラテジー」である。「オフレコード」とも呼ぶ。滝浦(2008:41)では「事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するストラテジー」としている。この他、「皮肉や比喩、修辞疑問文やトートロジー（同語反復）などがあり、含みのストラテジーと呼ぶことができる」としている。これらも15の下位ストラテジーを持つ。

- A) 会話推意を導入する
- B) 不明瞭あるいは多義的に述べる（様態格率に違反する）

以下に「ブラウン&レヴィンソンのポライトネス（politeness）理論」を図¹⁴に示す。

下記の図は、ある行為 x の相手に対するフェイスリスク (W_x) は、ヨコの人間関係における話し手と聞き手の「社会的距離 (D)」、タテの人間関係における聞き手の話し手に対する「力 (P)」、それから、 x という行為がその文化内でどの程度の負荷になるとみなされているのか「負荷度 (R)」、という三要素が加算的に働いて決まってくると B&L は述べている¹⁵。しかし、これは、 FTA_x の負担をどう考えるかを方程式のように示していると見るべきで、

¹³ A) ~E) の日本語訳は「言語情報学概論 2017 (加藤重広)」講義資料参考

¹⁴ 図3~5は、滝浦(2008:28, 29)による。

¹⁵ 滝浦(2008:30-31)を参考とする。

単純に加算して、計算するものではないと考えられている。本研究でも同じ立場をとる。

【ブラウン&レヴィンソンのポライトネス (politeness)】理論

$$W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

W_x (weightiness): ある行為の x の相手に対するフェイス・リスク

D (distance): 話し手 (speaker) と聞き手 (hearer) の社会的距離

P (power): 聞き手 (hearer) の話し手 (speaker) に対する力

R_x (rating [ranking] of imposition): 特定の文化内における行為 x の負荷度

図 3. 【フェイス・リスク見積もりの公式】 (B&L, pp. 76-78)

また、下記の図 4 は、「対面的コミュニケーションの言語的振る舞いにおける相手への配慮」を示したものである。この図においては、「相手への配慮」が、最大になった時は「言及回避」や「ほのめかし」になる。また、相手への配慮がゼロの場合は、「直言」になる。図 5 は「フェイス・リスクの大きさとストラテジー」の関係を示したものである。この図 4 及び図 5 から「相手のフェイスへの配慮と伝達効率性は相反する」ことが見て取れる。

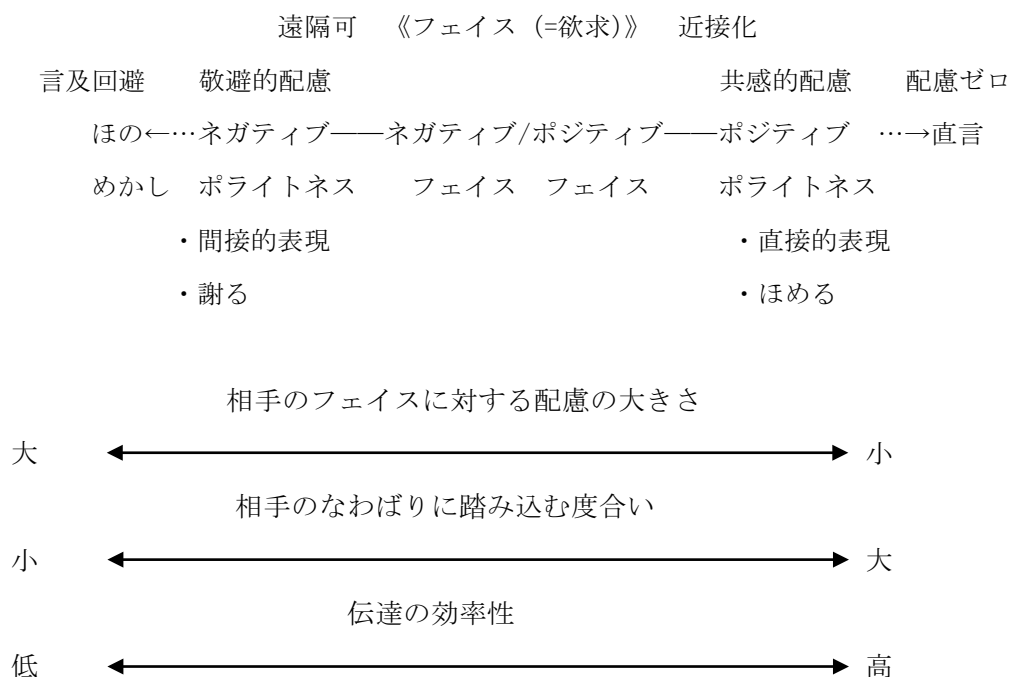


図 4. 【対面的コミュニケーションの言語的ふるまいにおける配慮】

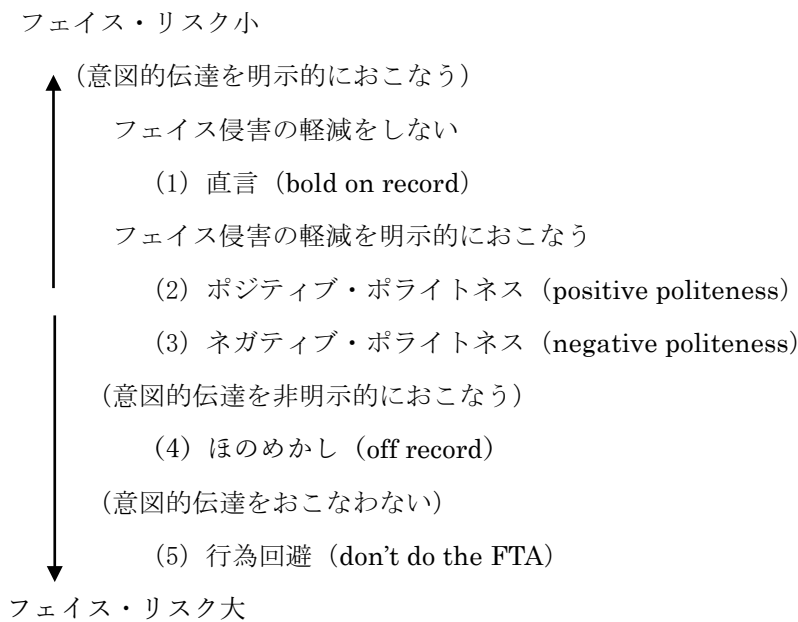


図5. 【フェイス・リスクの大きさとストラテジー】

本研究では主に、上記ブラウン&レヴィンソン(1987)の「ポライトネス理論」を中心に分析を進める。

B&Lの「ポライトネス理論」については、理論に対して取り上げられている批判として、英語を含む欧米語の言語運用には当てはまるが、アジアの言語など他の言語にまでの普遍性を持たないとするものである。例えば、日本語では、当然のこととして行われている「褒められて謙遜する」と、ポライトネス理論の中ではポジティブフェイスへの侵害となってしまう。また、褒められて、それを「ありがとうございます。」と受け入れるとすると、自己のポジティブフェイスへの侵害になることもあり得る。また、日本語では、自分の能力を自慢したり、目上の人への評価を下したりすることは適切ではないとされている。評価は自己評価より他者による評価が優先すると言ってよい。このような点でポライトネス理論と日本語のようなアジアの言語では異なる点があると言える。しかし、問題点もあるが、日本語の「言いさし文」を考えた場合、分析に使用できる概念もある。それは(hedge)表現と呼ばれ、その典型的なものが婉曲化に用いられる語法である。(hedge)はもともと、G.Lakoffが「曖昧化することで、責任を負わずに済むように予防線を張る言い方」を(hedge)と呼んだのが最初である。日本語では文の構成上、文末に助動詞付加や従属節化で間接化し、ネガティブ・ポライトネスを表すことが多い。それらはポライトネスとともに(hedge)の機能を果たしていると考えられる。本研究の「言いさし文」、も、これらの機能を果たしているものと考えポライトネス理論を分析の枠組みとして利用する。

また、近年ポライトネスは様々な研究の広がりを見せ、現在では、非礼にあたる意図的なポライトネス違反としてインポライトネス (impoliteness) を含めた研究へと拡張している。意図的な批判や皮肉、あてこすりなどはインポライトネスであるとしている。Culpeperら (2017) では、インポライトネスのタイプとして以下のものをあげている¹⁶。

- A: 侮辱
- B: 辛辣な非難
- C: 嫌な質問/嫌な前提
- D: 見下し・侮蔑
- E: 強化・強調・強意
- F: 退去要求
- G: 会話の打ち切り・発話の抑制や禁止

また、Culpeper (2017) らは、インポライトネスの上位方策 (superstrategy) として、ポライトネスに対応させて以下のように提案している。

- ① あからさまなインポライトネス: FTA を直接用いる、補償のない、意図的な非礼発話
- ② ポジティブ・インポライトネス: 聴者のポジティブ・ポライトネスを意図的に損なうための方策で、無視・仲間はずれにすること、無関心、不同意、タブー発話の使用など
- ③ ネガティブ・インポライトネス: 聴者のネガティブ・ポライトネスを意図的に損なう方策で、脅しをかける、見下す、からかう、取り合わない、相手の縄張りに侵害など
- ④ 明示的でないインポライトネス: 推意を使って FTA を行う。
- ⑤ ポライトネス抑制としてのインポライトネス: 期待されるポライトネス方策を用いない。

また、ポライトネスのメタ方策 (metastrategy) として、「皮肉を言う、ポライトネスの方策の発話を茶化す、など、ポライトネスとして明らかに不誠実な意図的発話で FTA を行う」ことを挙げている。

本研究では、これらインポライトネスの研究も分析枠として含めることとする。

¹⁶ 日本語訳は「日本語語用論研究 17 (加藤重広)」講義資料参考

第3章 節の接続の考察

3.1 接続助詞の機能と定義

本論文における「し」「たり」「から」「ので」などの分析対象を考える場合、これらは本来どのような意味用法を持っている助詞なのかを知る必要がある。まず、加藤(2006)では以下のように、接続助詞の用法区分をしている。「表4」にその区分を示す。しかし、この区分は先にも述べたように「入門書」として整理された区分であり、本研究における「し」「たり」「から」「ので」などの接続助詞と接続詞との関係も含め、今後更に詳しい分類の検討が必要であると考えられる。

加藤(2006:110-123)では、以下のように接続の種類について述べている。「山田孝雄以来、接続は前の節(=前件)と後ろの節(=後件)をどう結ぶかによって、二分されてきた。一つは前件を条件として、後件に帰結を述べる「条件接続」であり、二つ目は前件に後件が附加されているとみる「列叙接続」である。また、接続は①「二つの命題の論理関係に関わるものであり、前件と後件の論理関係は緊密である」と ②「二つの事態の捉え方に関わるもので、前件も後件も自立性が高く、意味的に依存し合わない関係にある」に分けることができるとし、これはほぼ、「条件」と「列叙」に対応する」と述べている。

表4. 接続助詞の用法区分 加藤(2006:112)

論理関係標示 【条件接続】	仮定帰結関係	ば・と・なら・たら
	原因結果関係	<u>ので</u> ・ <u>から</u>
	譲歩帰結関係	ても・でも
事態関係認識標示 【列叙接続】	単純接続	て・が・けれど
	対照接続	が・けれど・ものの・のに
	並立 ¹⁷ 接続	つつ・ながら・ <u>たり</u> ・ <u>し</u>
	展開接続	ところ

上記分類では、本論文における「から」「ので」「たり」「し」はすべて、接続助詞に分類されている。「から」と「ので」はその中で「論理関係認識標示」の「原因結果関係」を示す接続助詞とし、また「し」と「たり」は「事態関係認識標示」の並立接続を表す接続助詞として分類されている。この「たり」と「し」は先行研究では並立助詞として分類されて

¹⁷ 本研究では「並立接続」を「並列接続」とも表記する。

いる場合もあり、次にその先行研究を概観し、再検討を行う。

3.2 先行研究の再検討

本研究の「し」「たり」については、上記加藤(2006:112)では、接続助詞の並立接続に分類されているが、並立助詞と接続助詞を別立てにしている先行研究、田中(1977:401-427)の分類では「たり」は並列助詞に、「し」は両方に、「から」と「ので」は接続助詞に分類されていることから、この二つの助詞の機能について田中(1977)の先行研究を参考に、概観する。並立助詞と接続助詞の接続の機能は「語句の接続」であるとしている。また、接続する節と節の関係は、対等の関係と従属の関係に分けられるとし、対等の関係で結びついた節は、前件と後件の独立性が強く、前後の入れ替えが可能であるとし、対等の関係の接続は様々な語句について成り立つと述べている。

一方、従属の関係の接続は条件の接続とも呼ばれ、前件は後件に従属し、前後の関係には、修飾関係と同じような現象がみられるとし、前件と後件の間に、限定関係があるため、入れ替えはできない点で、対等の関係と異なると述べている。また、条件の接続は用言性の語句の場合になると述べている。

次に並立助詞の用法として、田中(1977:403-409)では、「対等の関係での接続を担当する助詞-並立助詞(句を列挙する機能をもつ)」と「従属の関係での接続を担当する助詞-接続助詞(後続句を帰結として先行句を導く機能をもつ)」とに分け、並立助詞の用法を以下のようにまとめている。下線は筆者による。本論文における分析対象である「たり」は例示の対象を列挙する並立助詞とし、「し」は事物の累加を示す接続助詞に分類している。下線は筆者による。

1. 語句を単純に列挙する並立助詞・・・「と」「とか」

(39) 中学生と高校生と大学生を対象とする。

2. 例示の対象を列挙する並立助詞・・・「や」「やら」「だの」「たり」

これら、例示の対象を列挙する並立助詞は、いずれも話し言葉的な、柔らかい語感を持ち、学術論文など、硬い文章にはあまり用いられないとしている。書き言葉では接続詞「または」「あるいは」「ないしは」に置き換えられたり「A・B・C等」の形にすることが多いと述べている。

(40) テレビを見たり、新聞を読んだりして暮す。

「～たり～たりする」の形で出てくることが多いが、次のような形でも使用されるとし、以下の例をあげている。

(41) 道に迷ったり、雨に当たったりで疲れ果てた。

(42) 浅かったり、深かったり水深が一定しない。

3. 選択の対象を列挙する並立助詞・・・「か」「なり」「とか」

選択の対象を並べ立てる、代表的な並立助詞は「か」であるとし、「か」は接続詞「あるいは」「または」に当たるが、「か」の方が話しことば的な柔らかい語感を持ち、「または」「あるいは」は、書き言葉向きであると述べている。また、日常会話では「とか」「なり」が使用されることもあるとしている。

(43) 寿司なり、そばなり好きなものを注文しろ。

この「なり」はくだけた言い方に用いられる。

4. 対比の対象を列挙する並立助詞・・・「と」「が」「か」「～の～ないの」

(44) 生きるか死ぬかそれが問題だ。

5. 事物の累加を示す並立助詞・・・「に」「うえに」「し」「て」

単に列挙するだけでなく、積み重ねる、ある事物に次々に累加していくニュアンスを表すものがあるとし、並立助詞「し」及び「て」は用言性の語句の累加に用いられると述べている。接続詞「そして」「また」「かつ」などにあたり、意味的には、活用語の中止法で置き換えることも可能だが、これらに比べ、柔らかい語感を持つとしている。特に「し」は、やや砕けた言い方で、仲間内の会話などに多く使用され、フォーマルな談話や硬い文章にはほとんど現れないが、「て」は論文などの硬い文章は別として、話しことば・書き言葉を通じて広く用いられるとしている。

次に、接続助詞の用法として、同じく田中(1977:409-427)では、接続助詞の用法を以下のようにまとめている。下線は筆者による。本論文での分析対象としている「し」「から」「の」は因果関係を表す接続助詞に分類している。

1. 時間的な関係を表す接続助詞・・・「ながら」「つつ」「て」「と」「たら」
2. 因果関係を表す接続助詞・・・「ので」「から」「ために」「し」「ところが」「ゆえに」「も
ので」

「し」については、やや、特殊なものであるがとして、「本来「体は大きいし、力は強いし、勝つのが当たり前だ。」のように理由や根拠を列挙するのに用いられる並立助詞の「し」から転じて、次のような理由、根拠を提示する「し」がある」とし、以下の例をあげ、

(45) 体が大きいし、勝つのが当たり前だ。

これには、やはり複数の理由・根拠の中の一つを例示して、結果に結びつけるといったニュアンスがあり、並立助詞としての用法の名残りが感じられると述べている。

以下続き、田中（1977:409-427）による分類を記す。

3. 定常的關係を表す接続助詞（確定の接続）
必然的關係（必然的な論理關係を表す接続助詞）・・・「て」
恒常的關係（仮定に極めて近い）・・・「と」「ば」
4. 不確定な關係を表わす接続助詞・・・「たら」「なら」
5. 背反的關係を表わす接続助詞・・・「が」「けれども（けれど・けども・けど）」「のに」

加藤(2006)の先行研究は、先にも述べたように、文法入門書として書かれたものであり、さらに詳しい分析を必要するが、これらの先行研究を参考にして、本研究における並立助詞と接続助詞の定義を述べる。

並立助詞：対等の関係での接続をする。前後の入れ替えがきく。

接続助詞：従属関係での接続をする。後件は前件の帰結となる。

本論文では、並立助詞が接続助詞に転じていったものとみて、現在では大きく接続助詞の分類の中に並立接続を表すものとして、並立助詞を位置付けるのが妥当であるとの立場をとる。これは、複文の箇所でも述べたが、複文と重文をどう捉えるか、従属節の種類と並立

節をどう位置付けるかの問題とも深く関わってくるものと考え。対象である「し」「たり」「から」「ので」は基本的には接続助詞として「から」「ので」は原因結果関係を示し、「し」と「たり」は並立接続を示し、「し」は累加を表す連言関係を示し、「たり」は選択を表す選言関係を示すものとし分析を進める。これらの「連言関係」及び「選言関係」については「第4章」及び「第6章」で述べる。

本論文の分析対象である「たり」や「し」は、並立接続に分類するため、先ず、これからの分析を行う上で、基本的用法である「並立接続」について、他の形式も含め詳しく分析する。

寺村(1991:197-229)では、並立的結合について述べている。寺村の並立表現の研究は道半ばであったが、その他の研究者、森山(1995:127-149)などにより引き続き研究がなされてきている。

寺村(1991:197-229)では、並立的結合における「集合(セット)」と以下で述べられているものが漠然としていて、明確ではないが、以下に寺村の並立的結合について概観する。

寺村(1991:197-229)では、二つ以上の名詞、形容詞、動詞、(名詞+)判定詞を、平等の資格で結びつけて、全体としてその中の一つの構成要素とするのが並立的結合であるとし、並立的結合に使われる助詞は並立助詞であり、並立助詞の中には、名詞だけつなぐ役をするものもあるが、述語も結合できるものもある。述語の並立的な結合として、大きく分け二つのタイプがあるとしている。一つ目のタイプは、前の動詞、形容詞、判定詞が後に続く活用形をとり、それにもう一つの述語詞が続く形であるとし、活用形のうち、並立的に使われるのは、連用形、テ形、タリ形としている。そして、もう一つのタイプは、並立助詞による連結で、名詞だけでなく、述語の並立的連結にも使われるのは、やら、とか、だの、なり、の、にしろ、の並立助詞としている。寺村(1991:197-229)においては「たり」は並立助詞ではなく、活用形として提示されている。

そして、並立助詞の用法の共通点、相違点を説明するための基本的な概念は「セット(集合)」であると述べ、それは、並立接続の成立に必須の意味的条件は「集合(セット)」としてとらえられるメンバーでなければならないと述べている。ト、ヤ、モなどで並立的につながれるN1、N2、N3などは、その談話のなかで、あるセットのメンバーとして捉えられるもの、ある種の等質性をもったものでなければならないとし、これらは述語の並立接続についてもあてはまるのであって、連用形、テ形、タリ形でつながれる動詞、形容詞なども具体的な談話の中で、あるセットのメンバーとして捉えられるものとしての等質性を持っていないければ、自然な並立結合は成立しないと述べ、この等質性と言うのは意味的なもので、形態的類似をこえたものであるとし、以下の例をあげている。

(46)

- a. この店は美味しくて安い。
- b. *この店は古くておいしい。

上記例文の b では、老舗で「古い」という意味があれば「美味しい」とセットになることは可能かもしれないが、そのような条件をつけなければ、やはり不自然になるとしている。

次に先の益岡・田窪(1992)の図において「並列節」には「順接的並列」(並列節が主節と対立することなく単純に並ぶ関係)と「逆接的並列」(並列節と主節が互いに対立する関係にあるもの)があるが、本論文の研究対象と関係する「順接的並列」においては、「総記の並列」と「例示の並列」「累加の並列」に分類し、それらの代表例として、述語の「連用形」「テ形」「たり」、「し」などを挙げている。以下に並列節における「順接的並列」の種類を図にまとめる。下記の図における「累加の並列」の代表例としての「し」については「注」として以下のように述べ、例をあげている。

並列節

順接的並列

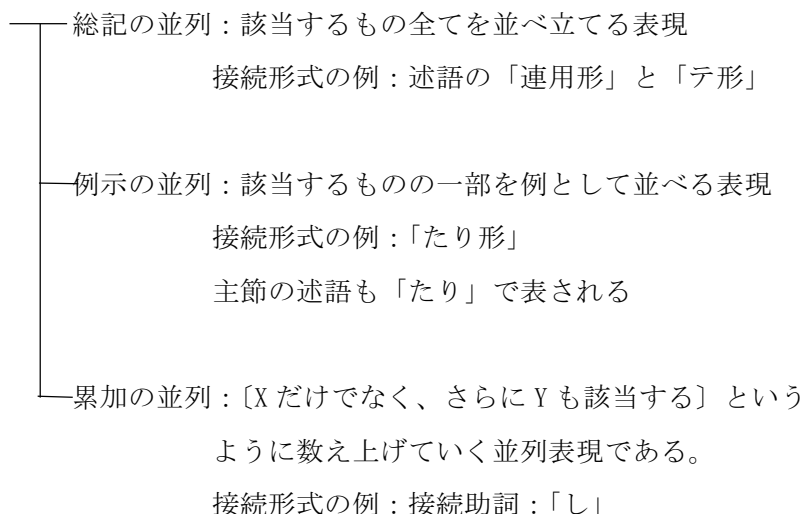


図 6. 順接的並列 益岡・田窪(1992:206-210)

注：接続助詞「し」には、並列表現全体を、主節に対して従属的に結びつける下記の例の用法がある。

(47) 締め切りは迫っているし、体調は悪いし、一体どうしたらいいのだろう。

次に寺村(1991:197-229)と益岡・田窪(1992:206-210)で述べられていた、並列接続の代表例としてあげられていた「連用形」「て形」「たり」「し」の接続について、基本的用法とな

る「並列接続」について、次に詳しく分析する。

3.3 「連用て形」接続と「連用非て形」接続

前節において、各並列接続の代表例としてあげられた「連用て形」「連用非て形」¹⁸「たり」「し」の接続について、ここでは、詳しくみていくこととする。まず、「連用て形」と「連用非て形」の接続について述べ、その後「たり」「し」を含め、それらの異なりについて述べる。

これまで、「て形接続」と「非て形接続」は、同類として扱われている場合が多く、その関係も連続的であると言える。しかし詳しく見ると、違いがある。一般的には「て形」の方が話し言葉的であり、安定性があり、「非て形」は書き言葉的であり、区切りが明確であると言える。

下記の「表5」は「動詞」、「形容詞」、「名詞または形容動詞+だ」のそれぞれの形についてまとめたものである。

表 5. 動詞・形容詞・形容動詞+だ・名詞+だ の形

	動詞	形容詞	形容動詞	名詞+だ
連用て形	書いて	高くて	静かで（連用で形）	学生で（連用で形）
連用非て形	書き	高く	静かで（連用で形）	学生で（連用で形）

3.4 複合形式と文法化

動詞の「非て形」には、複合を形成する機能を有する。「食べ歩き」「立ち読み」のように、複合名詞の前項、後項にも現れることができる。また、「非て形」は「書き終える」のような複合動詞も形成する。日本語では、2つ以上の動詞が複合して複合動詞を形成することがある。前項動詞(V1)+後項動詞(V2)では、前項動詞は連用形になる。下記例の(48)(49)参照。また、「V1-て-V2」の形も、広義の複合動詞に含めることができる。下記の例(50)(51)参照。

(48) 書き終える

¹⁸本研究では、加藤(2003)に基づき、「連用形」の名称を、動詞の場合は「食べて」などを「連用て形(略してて形)」と呼び、「食べ」などを「連用非て形(略して非て形)」と呼ぶことにする。また、形容詞の場合は、「寒くて」などを「連用て形(略してて形)」と呼び、「寒く」などを「連用非て形(略して非て形)」と呼ぶことにする。また「形容動詞」の「連用形」の場合は「静かに」などを「連用に形」「静かで」などを「連用で形」と呼ぶことにする。また「名詞+で」の「断定の助動詞「だ」(コピュラ¹⁸)の連用形)も「連用で形」と呼ぶ。

- (49) 書き始める
- (50) 考えておく
- (51) 食べてみる

上記例(50)(51)においては、接続助詞の「て」は動詞の連用形であり、主要部に付属する要素であり、「考えておく」は本来「考えて+おく」と分けるはずであるが、「て」が直前の動詞ではなく、後ろの「おく」「みる」との単位を形成している。「ておく」「てみる」が、助動詞として機能していると言える。「て」は形態論的には「V1」に付属しているが、機能的には「V2」とまとまって単位をなしている。加藤(2007:142)では、「テンス辞」出現可能な位置の直後に強い統語的な切れ目があるとして、この切れ目を「強境界」と呼び、副助詞などの要素の介在を許す位置には弱い切れ目があるとし、これを「弱境界」と呼んでいる。

- (52) 食べて {も/ は/ すら} おく →て形 (弱境界を持つ) (形態論的境界)
- (53) 食べ {*も/*は/ *すら} おく →非て形 (弱境界を持たない)

これらのことから、「て」の文法化¹⁹が進んでおり、先にも述べたように、接続助詞「て」は本来下記(54)のように前の動詞につくが、(55)のように助動詞相当の機能的単位をなしていると考えられる。ここに形態論的単位と機能的単位のずれが生じていると考えられる。

- (54) 食べて | みる (形態論的境界)
- (55) 食べ | てみる (機能的境界)
- (56) ご飯を食べて、水を飲んだ。(て形)
- (57) ご飯を食べ、水を飲んだ。(非て形)
- (58) ご飯を食べての感想。(て形)
- (59) ? ご飯を食べの感想 (非て形)

また、上記例(56)は「て」をとっても意味的に(57)と違いはなく「て」が意味をつけ足すものではなく、単に形だけで安定性を付け加えているものと考えられる。一方「非て形」は

¹⁹ 加藤(2010:38)では、「意味や機能の実質性が形態に優位に作用すること。」とし「、例えば「ことがある」を一種の「複合助動詞」とすれば、これは文法化である。」と述べている。また、「これは「ことがある」が自ら主節であることを辞めて、機能辞となり、機能辞となることで、(主)節であることを放棄しており、これを「非節化」(decausalization)と呼ぶ」としている。

先にも述べたように「複合名詞」を形成したり、文の中で「連用中止法」で使用されたりはするが「て形」に比べ、応用範囲が狭いと言える。また「て形」は上記例(58)のように、「の」を接続することも可能であり、より「名詞」に近い性質を持つとも考えられる。

「て形」は文法化が進み、単に接続形態としての性質を強めているといえるが、一方「非て形」は、文法化は進んでおらず、統語的制約が「て形」に比べ強いと考えられる。「非て形」は事態の単純列挙を基本とするが、「て形」は基本的には様々な意味機能を持つ。これらは、「て形」自体に「原因・理由」、「継起」などといった特別な意味があるのではなく、並列的に並べられた前後の文の意味関係から、様々な解釈が生じていると思われる。

(て形)

- (60) 手を上げて、横断歩道を渡った。(付帯状況)
- (61) 折り紙を使って、兜を作った。(手段)
- (62) 朝早く大学へ行って、勉強しよう。(継起)
- (63) 子供がたくさんいて、家が明るくなった。(原因・理由)
- (64) おじいさんは山へ行って、おばあさんは川へ行った。(並列)

3.5 「連用で形」の形態と意味解釈

前節では、動詞の連用形についてみたが「て形」の場合、「並列」であるか、「因果関係」であるかはある程度文脈により判断可能であった。しかし、「形容動詞の連用で形」と「名詞 + だ (コピュラ) の連用で形」及び「名詞 + 格助詞」は、意味的に連続的であり、一線を画しにくいとも言える。先ず形を整理し、「形容動詞の活用」「表6」と「「だ」(コピュラ)の活用」「表7」を見る。

表6. 形容動詞の活用

辞書形	丁寧形	連体形	ば形	連用に形	連用で形	否定形	た形
—だ	—です	—な	—ならば	—に	—で	—でない	—だった

表7. コピュラ「だ」の活用

辞書形	丁寧形	連体形	ば形	連用に形	連用で形	否定形	た形
だ	です	の・な	ならば	に	で	でない	だった

上記の表の中での異なりを持つ部分「連体形」で見ると、連体形が「な」になり、「の」

にならない時は、学校文法では「形容動詞」と判断できるとされる例(65)。また「の」が現れるのが「名詞」とする場合は「助詞」という扱いになるとされる例(66)。

しかし、下記の例(67)のように「な」と「の」のいずれも可能である場合もあり、先にも述べた通り連続的であり、その出現による品詞認定判断の方法だけでは難しいと言える。

(65) 有名な作家→形容動詞「有名だ」の連体形 + 名詞「作家」

(66) 無名の作家→名詞「無名」 + 格助詞「の」 + 名詞「作家」

(67) かなり優秀 { の / な } 弟

次に、「連用で形」において、「だ」(コピュラ)の連用形「で」なのか、「格助詞」「で」なのかの認識判断の方法を考える上で、並列関係と因果関係の意味解釈と叙述性の関係を検証し、どのような場合に「連用で形」が叙述性を持つのか、あるいは持たないのかを考察する。

(68) 太郎は学生で、作家だ。→太郎は学生であり、作家だ。【叙述性あり】→並列関係→「だ」(コピュラ)の連用形「で」

(69) 台風で、倒れた。→?台風であり、倒れた。【叙述性なし】→因果関係→格助詞「で」

「だ(コピュラ)」の活用「で」と「格助詞で」の場合、上記例のように叙述性のあるなしで判定できることがわかる。また、上記から、叙述性のあるなしと因果関係は関連していると言えるが、どのような場合に叙述性を持つと言えるのか、下記の判定テストで試みる。

(70) 外は雨で、風も吹いている。→ 外は雨であり、風も吹いている。【叙述性あり】

(70)' 外は雨だ。風も吹いている。→ 自立した二つの文にすることができる。

【「だ」(コピュラ)の連用形「で」】

(71) 「だ(コピュラ)」の連用形「で」である場合

叙述性をもつ → 叙述性がある場合、自立した二つの文にできる。

→ 「だ」(コピュラ)の活用

(72) 鉛筆で絵を描いた。→?鉛筆であり、絵を描いた。【叙述性なし】

(72)' ?鉛筆だ。絵を描いた。→自立した二つの文にすると不自然になる。【格助詞「で」】

(73) 「格助詞「で」」である場合

叙述性をもたない → 叙述性をもたない場合、自立した二つの文にすると不自然である。

→格助詞「で」の使用

上記(71)と(73)のようにまとめることができる。「だ(コピュラ)」の連用形「で」である場合は叙述性を持ち、自立した二つの文にできる。一方、「格助詞「で」」である場合は、叙述性を持たず、自立した二つの文にすると不自然であると考えられる。

3.6 「非て形」「て形」「し」「たり」の接続の異なり

次に「非て形」、「て形」、「し」、「たり」に於ける接続の異なりをみる。

(74) 明日は、勉強をし、買い物に行き、友達と会う。

(75) 明日は勉強をして、買い物に行って、友達と会う。

(76) 明日は勉強したり、買い物に行ったり、友達に会ったりする。

(77) 明日は勉強するし、買い物に行くし、友達に会う。

(74)と(75)は、話し手の記憶の中では順序性があり、出来事を列挙している。しかし、(76)の「～たり～たりする」の場合は、出来事全てを列挙するわけではなく、他にもあるかもしれないが、「例えば例をあげるとすると」という話し手の意識が含まれているものと考えられる。(77)の「し」の場合は、「たり」のように「例を挙げる」のとは異なり、「し」は連言接続²⁰のため「a and b and c ...」で、「a, b, c」で接続したことは、全てが成り立つ。

「そして」でつなぐ重なりを一つの出来事のまとまりとしてとらえている。「たり」の場合は選言接続のため、「a or b or c ...」のように「あるいは」でつなぐ基本的意味を持つため、全てをしなくてもよく、そのうちのどれかをするという意味合いになるものと思われる。

3.7 「非て形」「て形」「し」「たり」のテンス

一般的に統語的解釈では、後方の述語が前の述語のテンスを支配し、テンス分化がある場

²⁰ 加藤(2006:121)では、「事態関係認識標示」は並列関係を表す「連言接続」と選択関係を表す「選言接続」のほか「単純接続」「対照接続」「換言接続」「転換接続」などがあるとしている。「し」の連言接続については4章で、「たり」の選言接続については6章で詳しく述べる。

合は、意味的対立もあるとされる。「非て形」「て形」「たり」はテンス分化を持たないため、文末の述語がテンス決定を支配する。しかし「し」はテンス分化を持っているため、それぞれの節でテンス標示ができる。「し」は「非て形」「て形」「たり」に比べ、自立性が高いと言える。

(非て形) (テンス決定は文末の述語に支配される)

(78) 太郎は昨日、東京へ行き、神戸へ行った。

(79) 太郎は明日、東京へ行き、神戸へ行く。

(て形) (テンス決定は文末の述語に支配される)

(80) 太郎は昨日、東京へ行って、神戸へ行った。

(81) 太郎は明日、東京へ行って、神戸へ行く。

(～し) (テンス分化を持つ)

(82) 太郎は昨日、東京へ行ったし、神戸へ行った。

(83) 太郎は明日、東京へ行くし、神戸へ行く。

(～たり) (テンス決定は文末の述語による)

(84) 太郎は昨日、東京へ行ったり、神戸へ行ったりした。

(85) 太郎は明日、東京へ行ったり、神戸へ行ったりする。

3.8 本章のまとめ

以上から、「て形」は話し言葉的であり、安定性があり、「非て形」は書きことば的であり、区別が明確である。また、「非て形」は複合名詞や複合動詞を形成する。て形も「V1-て-V2」の形で、広義の複合動詞を形成する。「て形」は文法化が進み、この場合、助動詞として機能し、統語的には前項の動詞に付くが、機能的には後項動詞と一つの単位をなしている。形態と機能のずれが生じていると考えられる。また、「て形」は弱境界を持つが、「非て形」は弱境界を持たない。「非て形」、「て形」はテンス分化を持たない。「非て形」は単純列挙を基本とするが、「て形」は単につなぐ機能を持ち、様々な意味解釈を呼び込むと言える。

また、「連用で形」の文における叙述性のあるなしと並列、因果という意味が関係していると考えられるが、どのような場合に叙述性を持つのかは、コピュラ「だ」の活用形「で」である場合である。格助詞「で」は叙述性を持たない場合に使用される。

「て形」、「非て形」、「たり形」のテンスの決定は文末の述語が支配する統語的制約を持つが、「し」の場合、テンス分化を持ち、テンスの統語的制約は解除される。また、「て形」と「非

て形」では、比較すると、「て形」の方が自立性が高く、名詞に近い性質を持ち、文法化が進んでいるが、「非て形」は「て形」に比べ、文法化は進んでいないと考えられる。

「非て形」、「て形」接続は、出来事を述べる場合、順序性を持ち、記憶の順に出来事を挙げていくが、「～たり～たりする」の場合は、選言接続のため、「あるいは」でつながり、「他にもする（した）かもしれないが、例としてあげる」という含みを持つ。一方、「し」の場合、連言接続のため、「たり」と異なり「そして」で重ねていく全てが成り立つ。

第4章 「し」の用法

まず、「し」についての歴史的変遷を先行研究で概観する。次に地理的変異における「し」の使用を見る。そして、現代語における「し」に関する主な先行研究を概観し、本研究における「し」について、その統語的特徴、意味機能について詳しく分析する。

4.1 「し」の歴史的変遷

安田章(1977:333-334)では、院政・鎌倉時代から江戸前期に至る間の助詞の変遷について述べている。ここでは、「格助詞、接続助詞、副助詞、係助詞、終助詞」に区分しその変遷について触れているが、本研究の「し」は接続助詞に分類している。

「子供では有まいし……何をそむき給ふぞ」「さぞ、見たかろうし、見せたし」の例を挙げ、「し」は、江戸時代になって現れたと述べ、現代語では上接語の制約はないが、前期では「なんぢやし」の「ぢやし」があるが、おおむね「まい・う」を承けたとしている。

接続においては「列叙接続」が中心であるが、「条件接続」を示しもするとしている。「し」は形容詞の終止形語尾に由来したものと思われると述べている。形容詞終止形は室町時代に「(し)い」になっていたが、その後も元の形の終止形「し」はしばしば使われ、終止法に立たないときは「今日は日和も好し、互にゆるりとして、此方も嬉しう御座る」のように後行句に対する一種の条件を表す」としている。「御身達は大身人手は多し飼いはよし、すはというとき肝強く歩勝つはお身の馬」のような形容詞の用法に牽かれて、形容詞的活用を持つ「まい」が、まず「し」と結びついたのではないかと思われると述べている。

次に、内尾(1973:100-101)「助詞の変遷」では、「格助詞、副助詞、係助詞、接続助詞、並立助詞、終助詞、間投助詞」の変遷について述べ、本研究の「し」は「接続助詞」の中にも分類はしているが、説明は次の「並立助詞の変遷」の中で触れている。「江戸時代(前期)し、たら、など、やら」とし、「し」は用言の並立、「たり」の動作的表現に対して「し」は状态的、したがって形容詞の暈用の「語尾遊離説」があるとしている。また、近世上方語では「まい・う」以外についた例はあまり見当たらないという。現代、東京語ではすべての活用語に付き、「朝は早いし、夜は遅いし、暇がない。」これは強調・追加というべきものであるとしている。「し」の歴史的変遷については、興味深い点ではあるが、本論文の目的とは異なる為、これ以上は扱わないものとする。

4.2 地理的変異の扱い

本論文における「～し。」の言いさし文の資料は、先に述べた東京都葛飾区の下町に住むとされる高校生をモデルとした日常会話での使用が中心であるが「し」の使用は地理的変異、

方言でもかなりみられる。

以下『日本語方言大辞典』（1989:1038, 1039）小学館、における「し」の使用について述べる。

1. 付いた語の意を強める

- (1) 豊後「どこしに行く」
- (2) 岩手県気仙沼「今し頃」
- (3) 静岡県「何かしやらずにゃーいれん」

2. 軽い感情を添える。「よ」「さ」「ね」の意味で使用

- (1) 茨城県「そうだし」
- (2) 神奈川県中部「無かんべえし」
- (3) 長野県「知らねえし」
- (4) 三重県志摩郡「行かへんし」
- (5) 滋賀県伊賀郡「窯業の起源は1200年前やし」
- (6) 兵庫県加古郡「うちかて、よう読むし」
- (7) 和歌山「そうかいし」
- (8) 兵庫県神戸市（女性語）「遠足に行くねんし」

3. 問いかけや反語を表す

- (1) 山形県「こんなことでええがし」

4. 原因や理由を表す「から、ゆえに」の意味で使用

- (1) 新潟県佐渡「俺も行くし、まっとれちゃ」
- (2) 鹿児島県肝属郡「遅し間に合わん」

以上、「語を強める「し」、「終助詞と似た機能を持つ「し」、「問いかけや反語の「し」、「原因・理由の「し」」など、本研究の「し」との関係が推測できる。また、東京近郊の通勤圏にある地域から、東京に「し」の使用が流入した可能性も考慮され、地理的変異、方言との関係も非常に興味深い点ではあるが、今回、本研究では地理的変異、方言の影響については目的が異なるため、これ以上、扱わないものとする。

4.3 先行研究における「し」の統語と意味

はじめに、国立国語研究所(195:56-59)では「し」の意味用法として以下のようにまとめ

ている。下線は筆者による。

1. 共存事実を列叙し、互いに呼応させて強調の意味を含ませる。

(86) 立っている人も一人もないし、座席の空いているのも一つもないよ。

2. 二つ以上の事実を並べあげて、それらの累加を材料（理由）とする立論（判断）を導く。

(87) ロマンチックで、楽しそうで一私の空想したより素晴らしいところだわ、空気はきれいだし、美味しい牛乳はあるし・・・。

3. 一つの事実をあげて、他を言外に呼応させ、その全体を材料（理由）とする立論（判断）を導く。この場合、理由としてあげる材料が一つで、他を言外に暗示している形のため、婉曲になる。しかも、一つあげたそのことだけで、十分に判断・立論の材料となり得るというニュアンスをも持つ。

(88) 結婚したら、もっと苦しいだろうし、結局お姉さんみたいなのが一番利巧ね。

4. 言いさし（後続すべき立論を控えめに言外に響かせる。終助詞的用法。）

(89) ハンドバックもいいけれど、これでまだ間に合うし・・・。

次に、寺村(1984:67-74)では「し」は辞書には、何ごとかの理由付けをする用法に使われると記載されているが、確かに以下のような使用がみられるとして、(90)の例をあげ、これは理由付けを表すわけではなく、「し」の基本的な性格、機能がそれとなく、理由をいうのに向いていると考えるべきであると述べている。寺村は、それとなく理由を言うのに向いていると述べるにとどまっているが、「それとなく理由を述べる」と言うことは、どのような事なのか、寺村(1984)では、残念ながら、ここでは、それ以上触れていない。

(90) ちょっと、用事がありますし、お先に帰らせてもらいます。

また、森田(1984:176, 177)では「し」の意味用法について、以下のようにまとめている。

「し」の意味・用法

1. 「～し～し」の形で、複数の事実や条件をあげて、強調する。「AかBか」「AなりBなり」と違って、A・Bの一方が成り立つのではなく、両方とも成り立つ点が異なる。また、A・Bの例示ではなく、現実の事実や条件である点も異なる。

ア・食い違う事柄を述べる

(91) 映画は見たいし、時間はないし。

イ・共存する事柄を述べる

(92) 天気はいいし、日曜だし、遊びにでも行くか。

2. 一つの事柄を取り立てて示し、そこから導かれる結果や判断を以下で述べる。

(93) 公衆電話一つないし、とにかく不便なところだよ。

3. 控え目にあるいは考え深げに言いさし、そこから導かれる結果や判断を言外に込める
暗示的な表現

(94) 大学へは行きたいけれど、親父は反対するしなあ。

本研究の「泣いてないし。」のような若者を中心に観察される「～し。」の言いさし使用は国立国語研究所(1951:56-59)の上記例「4」のような「控え目に言う」「し」とは異なるものとする。「泣いてないし。」のような「言いさし文」の使用はこれらの先行研究では扱われていないと言ってよいものと考えられる。これらの「～し。」は本来の用法から、文法制約の変化または、拡張的使用で生じたものと考え、本研究の研究対象とする。

次に白川(2009:825-836)では、「し」に関して、「国語辞典」における接続助詞「し」の説明をあげ、「用言・助動詞について、それより前の句の意味を後の句に結び付け、どのような関係にあるかを示す語」とあるが、少なくとも「し」に関してはこのような考え方に再考が必要であると述べている。また「し」は「し」を挟んだ二つの節を並列的に接続するといった文法的な機能としてではなく、その付加された文を談話の中に関係づけるという談話文法的な機能としてとらえるべきである」と述べている。

また、「し」の機能について、並列的接続の並列のあり方を、主節とそれに先行するし節との意味関係の違いによって①併存用法 ②列挙、統括用法の2種類に分けている²¹。

4.4 本研究における「し」の論点と分析の観点

4.4.1 「し」の接続要素

「接続助詞」「し」の接続要素は、「名詞+だ」、「形容詞」、「形容動詞」、「動詞」の現在形、過去形、またそれぞれの敬体、「です・ます」常体に接続することができる。また、動詞では「意向形」「動詞テ形」「命令形」には接続できない。また、「疑問形」にも接続できない。接続要素を下記の「表8」に示す。

²¹ 白川(2006)の先行研究についての再考は、研究の枠組みの議論を参照のこと。

表 8. 「し」の接続要素

	名詞	名詞＋コピ ユラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

4.4.2 「し」の意味用法

並立を表す接続助詞「し」は、下記例(95)のように「美味しい」、「安い」、「美しい」のすべてが成り立つ。「し」は「a、b、c」すべての要素が成り立ち「a および b および c」とプラス、累加していく性質が基本的な意味であることから、「し」は連言(「a and b」)の関係と捉えることができる。連言関係については後ほど述べる。また、「し」の場合、「美味しい」と「安い」、「きれい」は同時に成り立つ関係である。下記の例(96)では、「し」の場合は、両方同時に成り立つ関係のため、「美味しい」と「まずい」が同時に成り立つことになり、非文になる。

- (95) この店の料理は美味しいし、安いし、美しい。
 (96) *この店の料理は美味しいし、まずいし。
 (97) *高齢の父は元気だし、元気ではないし。

上記例(97)のように肯定・否定の対称性を持つ場合でも「し」では非文になる。「し」の場合は、「元気な時」と、「元気ではない時」が同時に成立することになり矛盾することになる。並立接続を表す接続助詞「し」は先に述べたように「a および b (および c)」と要素をプラス、累加していく関係の「連言関係」であるとも考える。

加藤(2006:121)では、接続詞の分類の中で、並列接続の連言接続(および・並びに・また・かつ、など)を整理している。本論文では、これら接続詞の分類に接続助詞も当てはまるものと考え、この分類から、接続助詞「し」は、連言接続(a および b) 論理関係では(a ∧ b)で表すものとする。本論文では「し」の「～し～し」の形で使用される構造形式を「連言(形式)」と呼び、意味上「a および b (および c)」とプラス、累加していく関係(a and b)を

「連言関係（用法）」と呼ぶ。「し」は「a、b、(c)」が「同時に成立する」特性を持つ。

(98)

「し」の連言用法

1. 「し」の関係は、「a および b (a ∧ b) (a and b)」と要素をすべてプラス累加していく意味的特性を持つ。
2. 「a と b」は、同時に成り立つ。
3. 本論文では「a し b し」の形式を「連言（形式）」と呼ぶ。
4. 本論文では意味的に「a および b」と要素をプラス累加していく関係にある場合を「連言関係（用法）」と呼ぶ²²。

4.5 「並列」と「理由」の区分と基準

接続助詞「し」は、先行研究では「この店は美味しいし、安いし、きれいだ。」のような「並列・列挙」の用法と「もう遅いし、失礼します。」のような「理由」の用法があるとされている。どのような場合に「並列」の意味が生じ、どのような場合に「理由」の意味が生じやすいのか分析する。

(99) 生地が柔らかいし、暖かい。

(100) 生地が柔らかいし、使おう。

上記の例では「並列の意味」になるのか、「理由の意味」になるのか、それを区別する方法はあるのだろうか。

(99)では、

(99)' 生地が柔らかいし、(生地が)暖かい。

「生地が」の部分が「柔らかい」だけでなく、「暖かい」の主語になっている。

また、下記のように、前後の言い換えも可能である。

(99)" 生地が暖かいし、柔らかい。

²² 「し」と同じく「て形」も連言関係を表すと考えられるが、「て形」の場合は（例）昨日は図書館へ行って、映画を見て、食事をした。では「し」より順序性が生じると考えられる。「し」は順序性がない点で「て形」とは異なりが見られる。

(100)では

(100)' 生地が柔らかいし、(私が) (その生地を) 使おう。

「生地が」は(99)と異なり、「柔らかい」のみの主語になっているが、「使おう」の主語は「私が」である。また「使う」が他動詞で「を格」が入っているため、並列にはならない。また、下記のように前後の入れ替えはできない。

(100)" *生地が使おう、柔らかいし。

これらのことから、基本的には(99)は並列用法で(100)は理由用法が生じやすいと考えられる。しかし(99)においても、「生地が柔らかい、(その理由で) 私は暖かい。」のように理由用法でも考えられるため、この区別は絶対的なものではないと考えられる。

4.6 「し」の構造形式と意味の関係

これまで先行研究で述べられてきた「し」の「並列」及び「理由」の意味用法は、本研究では基本的に「並列・列挙」の用法であり、「理由」の用法は前件と後件の内容のつながりによって生じるものとする。しかし、一般的な用法で区別されているように「並列・列挙の用法」と「理由の用法」は果して、明らかに区別すべきものかどうか以下で検証するが、検証するにあたり、まず、「し」の構造形式を整理する。

下記の二つの事柄を並列させ一つの文とすると例(102)のようになる。

(101)

- a この店は安い
- b この店はおいしい。

(102) この店は、安いし、おいしいし。

上記例(102)のように「し」が二つ並ぶ場合、「安いし」が並列の関係を表す。「し」は命題と命題を結び付けており、並列の関係にある場合は、二つの節は入れ替えがきくため、下記の(103)の例のようにすることも可能である。

(103) この店は、おいしいし、安いし。

また、主節との関係が従属的である場合は、従属節の複数の事柄は主節の理由を表すことになる。

(104) この店は、安いし、おいしいし、また来たい。

次に、下記の例のように、本来なら理由を複数持つが、理由を一つだけ述べ、あとは言外に含ませる場合も見られる。

(105) この店は安いし。(おいしいし、・・・し・・・し。)

下記(106)の例のように、理由の潜在的並列ではなく、従属関係になっており、主節が潜在化している場合もある。この場合は例(107)で、示したように従属節と主節の主語が異なる。

(106) この店はおいしいし。(また来たい。)

(107)

a この店はおいしい。

b 私はまた来たい。

上記から、「し」の構造形式は、以下の4つの関係になると考える。

① 並列関係

例のように「し」が二つ並ぶ場合、「頭がいい」が並列の関係を表す。

a 彼女は頭がいい。

b 彼女はおもしろい。

(108) 彼女は頭がいいし、おもしろいし。

② 並列関係 + 主節

〔～し、～し〕の部分は並列の関係であり、〔おもしろいし〕は理由を表す。この〔 〕部分が後ろの主節に従属する関係になる。

(109) 彼女は、〔頭がいいし、おもしろいし〕(私は)好きだ。

③ 従属節し。(潜在的並列)

〔従属節し。〕で打ち止め、後は潜在的に並列が続く場合

(110) 彼女は頭がいいし。(おもしろいし・・・し・・・し。)

④ 従属節し。(潜在的主節)

〔従属節し。〕で打ち止め、後は潜在的に主節構造が続く場合、(112)のように前件と後件の主語が異なる。

(111) 彼女は頭がいいし。(好きだ。)

(112)

a 彼女は頭がいい。

b 私は好きだ。

上記の議論から、「し」の構造形式は次の「表9」のようにまとめられるものとする。
「従属節」を〔Pし、Qし〕と記し、「主節」を〔R〕と記す。これら「し」の構造形式から、並列の関係は〔～し、～し、〕の〔 〕内側部分であり、この部分が後続の外側の主節部分に接続する場合、従属節として主節に続き、理由の用法が生じている。これまでの先行研究では、「並列」と「理由」の用法を区別し扱ってきたものが多く、大堀(2002:127-131, 195, 196)の先行研究でも、「並列」されなければ、「理由」の用法に集約されるとしていたが、構造的には並列と理由の用法は、下記②、④の場合のように重なりが生じても差し支えないものであり、「並列」でなければ「理由」という関係ではなく、両方を兼ねていても差し支えないものとする。

表 9. 「し」の構造形式

構造形式	
① [Pし、Qし。]	: 並列関係
② [Pし、Qし] R。	: 並列関係+主節
③ [Pし。[Qし]]	: 《従属節》+し。【潜在的並列】
④ [Pし。[Qし]] (R)	: 《従属節》+し。【潜在的主節】

4.7 「し」の文と意味の関係

前節では、「し」節が「並列」と「理由」を共に表すことは構造的に可能であると述べたが、文の種類により、並列及び理由の意味はどのように生じるのか分析する。

(113) この店は安いし、おいしいし、きれいだし。

上記例文のそれぞれの節を文にして考えると、下記のようなになる。これらは並列・列挙の用法：平叙文：「(属性・状態)し、(属性・状態)し・・・。」となっており、属性叙述文など同じ種類の文が続くことになる。

(114)

- a この店は安い。
- b この店はおいしい。
- c この店はきれいだ。

しかし、一方、下記のような例を見ると、前件と後件の文の種類が異なることがわかる。

(115) もう遅いし、失礼します。(帰らなければならない・帰れ・帰らなくてもいいですか)

上記の文の前件と後件を文として分けて考えると下記のようなになる。

(116)

- a 時間がもう遅い。
- b 私は失礼する。

この後件（主節）の文は、上記例(113)の属性叙述文とは異なり、何らかの発話意図を持っている文である。上記例の主節では「もう失礼する」と宣言しているとも考えられる。これには、語用論の分野ではあるが、サール(1969) の分類がある。

サール(1969)では、発話内行為の分類として、発話の目的によって、次の5つのタイプに分類している。また、サールは発話と現実世界について、どちらを合わせるかという観点でとらえ、依頼、約束・命令などの行為は「言葉に現実を合わせる」と述べ、例えば「明日は5時に帰宅します。」という約束や「5時に帰ってこい。」という命令は、言葉で言ったとおりになるように現実を合わせ、行動するとみることができるとしている。また、「この店は安いし、おいしい。」などの陳述は逆に、「現実世界を言葉に合わせる」となり、「来年4月をもって、学部名を変更します。」という宣言は両方と見ることができると述べている。なお、先にも述べたように、サールの以下の分類は本来「語用論研究」の分野で扱うものであるが、意味の分野においてもサールの発話内行為の分類は分析に使用できると考え、この節で扱うこととする。サール(1969)による「発話内行為の区分」を「表10」に示す。

表 10. サールによる発話内行為の区分²³

発話内行為の種類	発話目的
断定・断言型 (assertive)	何かについて、それが事実であること、真実であることを話し手に表明させる。
行為拘束型 (commissives)	話し手が将来何かをすることを約束させる。
行為指示型 (directives)	話し手が聞き手に何かをさせる。
感情表現・表明型 (expressive)	命題内容について、感情や考えを表現する。
宣言型 (declaratives)	宣言することにより、新しい事態をもたらす。

²³ 加藤(2016:19)の「サールによる発話内行為の区分」を参考にまとめたもの。

上記サールの分類を例文にして、下記例(117)から(121)を見る。例文の「(×)」については、前件（従属節）がなく、後件（主節）のみ発話した場合である。

(117) もう遅いし、最終電車も 11 時です。【断定・断言型】

(117)' (×) 最終電車は 11 時です。

(118) もう遅いし、10 時までにはいてもいいです。【行為拘束型】

(118)' (×)、10 時までにはいてもいいです。

(119) もう遅いし、帰ってください。 / 帰れ。【行為指示型】

(119)' (×)、帰ってください。 / 帰れ。

(120) もう遅いし、私も非常に疲れました。【感情表現・表明型】

(120)' (×)、私も非常に疲れました。

(121) もう遅いし、失礼します。【宣言型】

(121)' (×)、失礼します。

上記例の場合、前件は事実を述べ、情報提供をしているが、後件は行為の明示であったり、義務的なものであったり、発話内力²⁴を持っている。つまり、並列・列挙の用法のように前件と後件は同じ内容のものではなく、後件は発話内行為²⁵の一種とみることができる。発話内行為の場合、上記のサールの分類をもとに、発話目的による上記例で考察すると、後件が「最終電車は 11 時です」などの「事実を述べる」場合や「失礼します」のような「宣言」の場合は「し」を用いた根拠を表す前件が無くとも、成立することも考えられる。だが一方、後件に「帰れ」や「帰ってください」のような【行為拘束型】や【行為指示型】などの要求性が高い種類の文が来るような場合は、理由根拠となり得る前件が無い後件のみでの発話は、やはり唐突で、奇異な感じを受ける。理由・根拠となり得る文をセットとして提示すれば、発話内力が強いもの場合は、説得力が生じると言えるため、「し」の使用が効果を示すものとする。

(122) もう遅い~~し~~ 失礼します。

(123) ?もう遅い~~し~~、失礼しますし。

²⁴加藤(2004:39)では、発話内力を「聞き手に働きかける力」とし、「illocutionary force」の訳語で「発話内の力」「発話内の(な)力」などともいう。

²⁵加藤(2004:36)では ジョン・L・オースティンの「発話内行為」について「発話が内在的に持つ実質的な機能の面」としている。

また、(122)は前件に「し」を伴わなくても、理由の意味は読み取れる。従って、「し」それ自体に理由を表す機能があるというより、前件と後件の異質なものをつなげる時、理由の意味合いが生じてくるものと考えられる。また、(123)のように、後件に「し」を付け足すと、やはり安定性に欠けるように思われることから、本来同じ性質のものを並列でつなげてきたが、異質なものを組みわせることにより、新しい用法が生まれ、文法機能の拡張や制約の変化が生じ、「理由」の意味合いも生じてきたものと考えられる。

4.8 理由の文が成り立たない場合

前節では、「～し～」における文の種類と意味の関係をみた。後件が、発話内力を持っている文は、前件と後件の文の種類が異なり、理由の意味が生じてくるものと考えた。それでは、前件と後件が同じ事態の描写の場合には、理由の意味はやはり生じにくいのか考察する。

前田(2005:131-144)では、「ある事態の理由や根拠となる事態は、それ自体が完結し、確定している必要がある。ある判断の根拠となる場合には、そこに判断のレベルのモダリティ形式が入ることが必要である。独立性の高い従属節を受け止める「し」はそれが可能であり、このことが理由用法の統語的な基盤であると考えられる」としている。しかし、事態が完結していれば、「し」の文は理由用法として成り立つのか考察する。

- (124) ?土砂崩れがあったし、通行止めになった。
- (125) 土砂崩れがあったから、通行止めになった。
- (126) 土砂崩れがあったので、通行止めになった。
- (127) 土砂崩れもあったし、通行止めになった。
- (128) 土砂崩れがあったし、橋が落ちたし、通行止めになった。
- (129) 土砂崩れがあったし、私は行きたくない。 / 私は行きたくなかった。

上記(124)の例は、落ち着きが悪いが、(125)(126)の例のように「から」「ので」の使用は成り立つ。これらは、「し」の前件と後件が確定した事態の叙述・描写の場合、「し」の文では落ち着きが悪いものと考えられる。堀池(1999:71-90)でも「し」の原因理由の表現について、どのような場合に「し」の文が成り立ちにくいかを分析している。しかし、堀池(1999:71-90)では後件の文の性質に注目し、分析を行っているが、後件の文の性質のみでなく、前件と後件の文の性質を共に考えなければならぬと本研究では考える。本来の「並列」の用法から、原因として主たる理由一つをあげるより、複数の根拠・理由がある場合、例(128)のような場合は「し文」は成立する。これは一つだけの主たる理由「土砂崩れ」が後景化され

たため、文が成り立ちやすいからではないか。このことは例(127)のように「も」を介入し、他の理由を暗示する場合には成立することから、「～し～」は基本的に並立を表し、その理由は一つではなく、複数ある場合には、前件・後件も事態が確定した叙述描写の場合でも理由の意味は成立すると考える。これらは、先の並立文の構造における、並立内部と外における理由の関係からも考察できる。(129)は、後件が発話内力を持っている文であるため、理由の意味が生じる。

4.9 南の分類における「し」の制約

先に挙げた南(1993:74-120)の従属句の分類では、本研究で取り上げる「し」はC類に分類されるため、テンスの分化、対事的モダリティ、丁寧さを節にふくむことができる。下記の例で具体的にみる。

まず、「テンスの分化」を従属節内部で表すのが可能かどうかをみる。

「し」

(130)

- a. 太郎はみんなと遊ぶし、話すし、評判もいい。
- b. 太郎はみんなと遊んだし、話したし、評判も良かった。

「し」はテンスを内部に含むことができ、並列の機能を持つ。「し」は特定の時点で起こったことを表すことができると言える。これらのことから、「し」は自立性が高く、制約が緩く、主節まで言わなくとも、従属節のみで言える範囲が広いことを意味する。また、「し」の前の形態は終止形接続であり、そのため、文を切りやすく、文の作成と接続が容易であると言える。

次に、「丁寧さ」を従属節内部に含むことが可能かどうかをみる。

(131) 太郎はみんなと遊びましたし、話しましたし。

「し」は丁寧さをも節内に含むことができる。「し」は節末に丁寧さが付加されても接続は容易であると言える。使用条件が緩いと言える。

つぎに、「対事的モダリティ」を内部に含むことが可能かどうかをみる。

「し」

(132) 太郎は漢字がよめるかもしれないし、文章も上手かもしれないし。

「し」は内部に対事的モダリティを表す「かもしれない」などを含むことができる

「し」節は命題内容に対する話し手の認識を表すことができるため話し手の心的態度を従属節のみで表すことができると考えられる。

4.10 本章のまとめ

これまで先行研究において述べられてきた「し」における「並列」及び「理由」の意味用法は、本研究では基本的に「並列」の用法であると考えられる。「し」は基本的なその統語構造から「並列」と「理由」の用法の二つに明確に分かれるものではなく、二つが重なり合うこともあり得る。また、「し」の「理由」の意味は「し」そのものにあるのではなく、前件と後件の文の異なりによって生じるものである。発話内行為を持つ異なる文の種類をつなげる時、「し」の文は、理由・根拠を表す効果を示すことができると考える。

従って本研究では、「し」の用法は基本的に「並列・列挙」であり、「理由」の意味合いは前件と後件の持つ文の性質が異なる場合に生じるものとの立場に立つ。また、従属句内に現れる要素で見ると、「し」の従属節は、テンス分化、丁寧形、認識モダリティを内部に含むことが可能であることから、「し」の従属節は自立性が高く、従属節のみで、話し手の認識を表すことも可能である。つまり従属節のみでも、述べられる範囲が広いと言える。また「し」は本来の並列の用法から、「従属節し。」で打ち止めていても、その統語的構造から潜在的にその並列性は続いているとも考えられ、「言いさし文」の用法には、「並列」の場合もあり得ると考える。

また、「並立」を表す接続助詞「し」はその性質から、本研究では「a および b および c」と要素を累加していく性質を持つ「連言関係」と捉えることもできる。

「し」の連言用法

1. 「し」の関係は、「a および b ($a \wedge b$) (a and b)」と要素をすべてプラス累加していく意味的特性を持つ。
2. 「a と b」は、同時に成り立つ。
3. 本論文では「a し b し」の形式を「連言 (形式)」と呼ぶ。
4. 本論文では意味的に「a および b」と要素をプラス累加していく関係にある場合を「連言関係 (用法)」と呼ぶ。

第5章 「し」による言いさし文

本論文における「泣いてないし。」のような言いさし文は、白川(2009)の先行研究では、まだ扱われていなかった新しいタイプの言いさし文であると考えている。ここでもう一度、「し」の言いさし文に関する記述をみる。

白川(2009:127-139)では、「し」に関する「言いさし文」の考察を行っており、接続助詞「し」は会話文で「言いさし」の形で独立文的に頻用されるとし、「形式上は主節を伴っていないので一見したところ不完全に見えるにもかかわらず、意味的には独立した文と等価な完結性を有している」と述べている。また「し」は「し」を挟んだ二つの節を並列的に接続するといった文文法的な機能としてではなく、その付加された文を談話の中に関係づけるという談話文法的な機能としてとらえるべきであると述べている。

また、「し」の機能について、並列的接続の並列のあり方を、主節とそれに先行するシ節との意味関係の違いによって①併存用法 ②列挙、統括用法の2種類に分けている。そして、そのどちらにも「言いさし文」はあるとしている。「言いさし文」としての「シ節」の機能を以下のようにまとめている。

シ節の機能：「Pシ」は文内容Pが成り立つだけでなく、それ以外にも成り立つような文内容Xが並存していることを示す。

白川(2009)の先行研究については、先に述べたが、統語的に未完結とされる「言いさし文」について、先駆的に詳細な分析を行った点が評価できる。しかし、本論文の「泣いてないし。」のような「言いさし文」は、白川(2009)では、取り上げられていないものである。

次に、国立国語研究所(1951:56-59)では「し」の「言いさし」の意味用法として、以下のように述べている。下線は筆者による。

「言いさし（後続すべき立論を控えめに言外に響かせる。終助詞的用法。）」

(89) ハンドバックもいいけれど、これでまだ間に合うし……。 (再掲)

次に、森田(1984:176、177)では「し」の「言いさし」としての意味用法について、以下のようにまとめている。

「控え目にあるいは考え深げに言いさし、そこから導かれる結果や判断を言外に込める暗示的な表現」

(94) 大学へは行きたいけれど、親父は反対するしなあ。 (再掲)

本論文の「泣いてないし。」のような若者を中心に観察される「～し。」の言いさし使用は国立国語研究所(1951)の例(89)及び森田(1984)の説明のような「控え目に言う」「し」とは異なるものと考え、「泣いてないし。」のような使用は本来の用法から、文法制約の変化または、拡張的使用で生じたものと考え、本論文の研究対象とする。

5.1 「し」の「非連言用法」としての拡張的使用

最近「あの店は美味しいし、安いし、また行きたい。」のような並列形式をとらず下記の例のように「し」が並列構造を持たず、単独で使用される用例が観察される。このような「し」の単独使用を「非連言（形式）」と呼び、「連言関係」にない場合を「非連言関係（用法）」と呼ぶ。

(133) 寒いし。

(134) 泣いてないし。

(135) 「し」の非連言用法

1. 「し」が連言形式をとらず、単独で使用される場合を「非連言（形式）」と呼ぶ。
2. 「し」が連言関係にない場合を「非連言関係（用法）」と呼ぶ。

上記例では、「寒い。」「泣いてない。」と「し」がない文でも、同じ意味は成り立つと言える。しかし、話し手は敢えて「し」を付加し、話し手の何らかの伝達態度を示している。また、「し」が連言形式をとらず、言いさして終わっている「非連言形式」になった場合でもその連言性は持続しており、その潜在的連言性を話し手が戦略的に利用しているものとも考えられる。つまり、「し」の場合はもともと「aおよびb」と要素を累加していく性質を持ち、その理由・根拠と成りえる場合は、「a and b and c and・・・」とその根拠となるものが多ければ多いほど、話し手の判断の内容は確固たるものとなる。例え「し」で打ち止め、本来なら理由が一つしかないような場合でも、聞き手の方は「し」で打ち止められたため、「きっと、まだまだ根拠はあるもの」と推論せざるを得ないかもしれない。

5.2 言いさし文における「付加型」と「省略型」

5.2.1 「省略型」非従属化

Evans(2007:366-431)の言う非従属化現象とは、主節の省略の慣習化(規則化)であった。

日本語の言いさし文²⁶で「非従属化」「省略型」とするものは下記の例などをあげることができる。主節は慣習化・固定化されている表現であり、形式に依存している。また Kato(2014:9-29)では、日本語には主節削除型の他に、主節の削除で言いさしたとは考えにくいタイプがあり、それは接続助詞などを付加することで形成される「付加型」としている。本論文では非従属化に相当するものを日本語では「言いさし(文)」と呼ぶ²⁷。下記例(136)では、「わからない」の主節の部分と言わない場合の「私たちが正しいかどうか」だけでも、あとは「わからない」が省略されているとの推測が可能である。

(136) 私たちが正しいかどうかわからない。➡私たちが正しいかどうか。

また、上記例と同じく、日本語の「言いさし文」における「省略型」として、下記の例をあげることができる。下記例で()で示してある主節を言わなくても、()の部分には習慣化・固定化されている表現であり、省略部分は推測できる

(137) 明日、行くかも。(しれない)

(138) 明日、行かなければ。(ならない)

5.2.2 「付加型」非従属化

一方「言いさし文」の「付加型」とはどのようなものか、下記の例でみる。

(139) 飲み物はテーブルの上に置いておきます。

(140) 飲み物はテーブルの上に置いておきますから。

(141) 飲み物はテーブルの上に置いておきますから (ϕ)。

白川(2009:48)では、「言い尽くし」の「お膳立て用法」としてしているものであるが、上記例では(139)の例のように完結してもいいが、例(140)では「から」を後ろに付加した上で発話を終えている。日本語の場合は「から」をつけていうことを決めずに話し始め、それを「つけない」ことも「つける」こともその選択が可能な非従属化であると思われる。これは、

²⁶ 大木(2017:187)の先行研究では、日本語の文を機能的に捉え「一つの発語内目的を担っている語列が文という単位体である」としている。したがって、「言いさし」も発話者の発話意図(目的)が反映されているものと考え、機能的に文と捉え、本研究では「言いさし文」と呼ぶこととする。

²⁷ Evans(2007)の言う非従属化と日本語の「言いさし文」は、前者が構造的規定であるのに対し、後者は生産過程の観点からの規定であり実態としては異なる。また、白川(2009)の「言いさし文」とEvans(2007)の非従属化の段階を対応させると、白川(2009)における「言い尽くし」は一部慣習化しており、「関係づけ」も一部慣習化と言え、「言い残り」については、慣習化なしと考えられるが、さらなる検証を要するものとする。

Evans (2007:366-431) の構造的規定の非従属化とは異なる。「付加型」の場合は、接続助詞を付加した上で発話を切り、あとは何もない例(141)のようになる。これらの「言いさし文」を作ることにより、特別な談話効果を生み出している²⁸。また、付加型は省略型と異なり、主節の復元は聞き手の推論に任せられ、いく通りもの解釈が考えられ、主節は確定できないというのが妥当であると思われる。

本研究の分析対象は下記例の「泣いてないし。」のような最近若い世代を中心に会話の中で多く観察される新しいタイプの日本語の「言いさし文」である。この新しい「言いさし文」の特徴は「接続助詞」を付加せずとも、発話が完結しているにもかかわらず、あえて接続助詞を付加し、統語的には「従属節+接続助詞」の形にしているものと考えられる。本研究ではこれを「付加型」の「言いさし文」と呼ぶ。²⁹

5.2.3 「付加型」言いさし文の談話機能

「付加型」の言いさし文の場合は下記の例「泣いてないし。」から「し」を削除して「泣いてない。」でも、その命題内容に変化はない。話者の言いたいことは言い尽くしている。話者交替においては「言いさし文」の発話のあと、交替が何らかの形で自然に示されている場合も、発話者の発話がそこで終了したと判断し交替が行われたとみて、その判断に含む。下記の例では上から三番目の「ロペ」の発話は「アキラ」が「泣いてないし。」と言いさし文で終わっているにもかかわらず、そのあと、すぐ話者交替が行われている。しかし、統語的には未完結であり、その連言性は潜在的にまだ続いているとも考えられ、返答に躊躇する場合も見られる。それが、下記例(143)での「ロペ」最後の発話「はあ・・・」である。

付加型

(142) 泣いてないし。(Ø)→「泣いてない。」(命題内容は言い尽くされている)

付加型「言いさし文」

【感動大作】〔フジテレビ放送：紙兎ロペ〕

(143)

ロペ1：ああ、へへへ。泣いちゃいました？

²⁸ 白川(2009)では、「理由を表さない「から」とし、「お膳立て用法」(S1という情報を提示する。あなたはそれを参考にして、自分の行動を決めてください。)といったものとしている。

²⁹ 日本語における「言いさし文」の「付加型」及び「省略型」は、明確に区分できるものではなく、連続的であると考える。

アキラ1: はあ? 泣いてねえし。

ロペ2: いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ2: 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

ロペ3: 目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ3: あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

　　だいたいよ。あの演出、あざとっていうか、「はい、みなさん、泣く
　　ところですよ」的な? 俺とかよ、そういう、いかにもっていうのは、
　　逆に冷めるタイプだし。

ロペ4: はあ。

上記例のロペ1の発話「泣いちゃいました?」は「泣いたか?」と確認要求³⁰をしている発話である。その答えとしてアキラ1の「泣いてねえ(ない)」は、否定判断であり、結論を述べていると言える。この場合、「し」を伴わなくとも「泣いてない ϕ 」でも成り立つ。「 ϕ 」は、断言的であると言えるし、推論の必要はない表意³¹のレベルである。しかしあえて「泣いてないし。」で接続助詞「し」を使用することにより、推意の形成は難しくなり、推論が必要となる。話し手は聞き手の質問に「泣いてない」で100%答え、完結しており、それ以上何も付け加える必要はないにも関わらず、「し」をあえて付加³²し、未完結にし、にそこで打ち止め、説明はできるが、あえてしないという「相手の認識の異なりに反論する態度」である。また、上記例(143)の「泣いてないし」の後を省略型とし、「泣いてないし」の後の主節の復元を試みた場合、どのようになるだろうか。

(144)

泣いてないし、a 感動しなかったし、・・・。

b これは涙じゃない。

c 泣いていると言うな。

³⁰ 「確認要求」とは、宮崎(2002:203)「話し手の情報の捉え方が妥当であることの確認を聞き手に求める」ものとし形式としては「肯定疑問」「泣いた(か)?」の「か」が落ちた場合とする。

³¹ 加藤(2004:97)では、explicatureを「表意、明意」とし、implicatureを「推意」としている。
表意：発話によって伝達される明示的なもの、
また、D. スペルベルとD. ウイルソン(1987)が提唱した関連性理論の枠組みでは「命題として形式上不足がないよう整備したものを「表意(explicature)」と呼んだ。
推意：発話で示された命題に可能な限り情報を補ったものと、さらにそこから引き出される(別の)命題を指す

³² Kato(2014:9-29)では、非従属化現象について述べており、「し」節をとりあげ、「し」節に関しては、日常会話では「太郎は頭がいいし。」のように従属節のみで終わる使用の方が主節を伴った複文での使用より多いと述べている。また引用の「って」の従属節で終わる非従属化現象について、新しい「付加的非従属化」を提案している。

上記例のように、様々考えられるが、これが唯一というものの復元はできないと言っているだろう。つまり、主節の復元は解釈上の復元になることから、形式が固定している省略型の「言いさし文」とは異なるものとみられる。上記例ではロペ3の発話は文末助詞の「よ」が付いていることから、話題になっている知識や情報に発話者のみが優先的にアクセスできる状況にある³³ということである。命題内容の真偽や受容に関しては優先的な知識管理を行う以上、責任を負うことになる。それに対して、アキラ3の発話は「いや」「泣いてないし。」ともう一度「相手との認識の異なり」を否定している。この例では、話し手は「し」を付加することにより、聞き手への反論を表し、自分の考えを変えないという妥協しない態度を示しているものと考えられる。これには、打ち止めるように切るか、フェードアウトするように柔らかく終わるかも関係しているものとみられる。国立国語研究所(1951:56-59)では、「し」の用法の中で、「言いさし」を取り上げ、「もう体の方もよくなりましたし・・・」の例をあげ、「後続すべき立論を控えめに言外に響かせる」としている。柔らかく終わる場合は、様々なデータでは表記の仕方を「し(接続助詞)・・・」などとしている。日本語記述文法研究会編(2017:293, 294)では「し」で言い終わる文を取り上げ、「うん。でも、もう遅いし・・・」と表記し、説明として、「し」で言い終わった場合は「それだけが理由というわけではないが」というニュアンスが込められ、語調をよりやわらげた表現になると説明している。

しかし、先にも述べたが、この例の新しい「言いさし文」は「控えめ」にあるいは「やわらげて」述べているものではない。強く話し手の認識を伝えたい場合、話し手の伝達態度を示す機能として「し」を付加していると考えられる。

5.3 「～し。」の語用論的機能

5.3.1 談話標識としての機能

「第2章 枠組み：予備的議論」の中で談話標識に触れたが、「話し手の伝達態度」とは、メタ語用論的標識の談話標識としての機能であり、「し」は談話標識として「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」³⁴を示し、前節の分析から、「相手の認識が誤っているから正しい認識に訂正して欲しい」という「認識要求」を示すことから、「相手の発話の受

³³加藤(2001a:31-48)では、「文末助詞の「よ」と「ね」が談話構成機能をもった談話標識である。」と述べている。また「排他的知識管理」については「話題になっている知識や情報に発話者のみが優先的にアクセスできる状況にあること」と説明している。

³⁴ 接続助詞は「伝達モダリティ」とは異なるが、聞き手に伝えたい態度を示す上で、「伝達モダリティ」に近いと考えられる。

容のあり方に関する情報」を示す機能³⁵も持つと考える。また、知識管理については、話し手が行い、発話内容については、議論の余地なしという判断済みの態度を示す。相手への受容要求³⁶については、結果は考慮しないが効果は示せると思われる。下記例(145)のように、「し」は周囲との同一認識状況でも使用できると言えるが、例(146)のように、反論にも使用でき、文脈により、その伝達態度は異なると言える。(145)の例では「し」を付加することにより、「そんなことは言われなくてもわかっている」という話し手の認識を示しているものと思われる。例(146)では、「し」を付加することにより、相手との「認識の異なり」を示しているものと見られる。

(145)

A: おいしいでしょ？

B: おいしいし。

(146)

A: おいしいでしょ？

B: いや、おいしくないし。

(147)

A: 出かけない？

B: 寒いし。

B': 寒いし。(風が強いし、雨も降っているし・・・だから、出かけたくない。)

また、上記(147)例の場合、結論ではないものに「し」が付いているとも言える。潜在的に複数の理由の存在、例えば「風が強いし、雨も降っているし・・・だから出かけたくない。」などを暗示させている。根拠がまだ続いている可能性があると思われる。

この場合、「し」は必要である。根拠となるものに「し」が付いている方が結論への推論は正確にできると考える。B'の()内の部分は、推論が必要とされる。並列で理由が続いており、主節までも暗示できる。この場合も「し」は「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」談話標識である。話し手(B)は「寒いし。」で言いたい理由はまだ

³⁵ 加藤(2004)では、談話標識の定義は「談話上の目印で、言語運用に関する情報を提示するもの」として、「発話に関する情報を談話標識によってあらかじめ提供することで、聞き手により適切な受容をさせる機能を持つもの」としている。また、談話標識の機能として8つを提示している。詳しくは枠組み予備的議論を参照。

³⁶ 「受容要求」とは、「話し手の認識要求を、相手が受け入れるべきだとする要求」とする。

他にもあるが、一つだけ示し、他の理由を暗示させている。聞き手（A）は（B）の「寒いし。」で打ち止められたあとに、本来の並列の用法から、潜在的に複数の根拠がまだ続いている可能性があると思うかもしれない。この場合も語られない部分は聞き手の推論にあえてまかせ、その効果を聞き手に示そうとする談話機能を持っていると考えられる。また、（B）の「寒いし。」は「寒い」という情報について聞き手（A）は既に入手済みかもしれないが、話し手（B）はそのことに関しては、関心が無く、自分がとにかく「寒い」ということについての知識について優先的に管理しており、自分がそう思っているということを聞き手に提示しているものと考察する。

5.3.2 完結させないやり方

最近観察される言いさし文「まだ、夏だし。」というように、話し手はなぜ、「し」を付加し、「従属節+し。」のようにあえて、統語的には未完結な形にするのだろうか。

「し」は本来、接続助詞であるため、理由根拠を述べる場合、「理由根拠①し、理由根拠②し、理由根拠③し・・・」というように、「し」でつなぐ根拠となるものが多ければ多いほど、その発話内容について聞き手を納得させられるものとなるはずである。しかし、話し手は敢えて列挙せず、「泣いてないし。」のみで打ち止めている。これは、一見すると矛盾があるように思われる。

(148)

ロペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？ 泣いてないし。 （紙兎ロペ³⁷「感動作」）

上記例「泣いてないし。」のような使用について、この会話は高校生の友人同士での会話である。この「し」付加型言いさし文の場合は、フェイスリスクが小さい、親しい関係の場合に使用されている。フェイスリスクが大きい関係では、使用は難しいと言える。

話し手は「従属節し。」で打ち止め「発話内容については変更しない」という態度を示している。このような発話に対する強い態度を示す根拠としては、もともと「し」は「並列・累加」を表す「連言関係」を持つ統語的特徴から、「従属節し。」で終わっていても、話し手の根拠とするものはまだ幾らでも推論可能である。話し手の「明示していないが、実は根拠はまだまだある。」という態度である。しかし、敢えて「し」で打ち止め、後は聞き手に推論させる方略を取っているものと考えられる。「結論変更の可能性もないので「～し～し～

³⁷ 資料『紙兎ロペ』：フジテレビ系列放送、各回約1分30秒の会話、東京都葛飾区に住む高校生をモデルにした友人や家族、近所の住人とのカジュアルな会話を収録。

し」と長く続ける必要はない。」と聞き手に対する主張を強め、その効果を示すことができる。元々持っていた「連言用法」の統語的特徴から、語用論的に機能が拡張したものと考えられる。

また、上記例は話し手が自分がとにかく「泣いてない。」ということを知り手へに提示しているものと思われる。「し」の場合は、「命令形」や「て形」「意志形」「疑問形」など相手と関係する要素には付かないという統語的特徴も持っていることから、相手が発話の内容についてどう考えているかの関心や、相手への説明の態度はなく、これ以上この話題を続ける必要はない、判断済みと言う話し手の態度の表明であると思われる。本論文のデータの中には、「心の中の声（独白）」としての「し」の言いさし文が見られる。「し」には独白性もあると考えられる³⁸。

「～し。」は先に述べたように、相手に働きかける一部の形態要素については、接続できない制約もあるが、独立性が高く、「～し。」従属節単独で話し手の判断³⁹を示すことも可能である。言語化されていない部分は、並列の意味合いだけではなく、「泣いてないから、もう言うな。」と同じように因果関係の推論も可能である。話し手は「し」で打ち止め、あとは聞き手の推論に任せる戦略であり、聞き手の方は、話し手が「～し。」で打ち止めたが、たぶん潜在的に根拠はまだ続いている可能性があり得るから、反論が難しいと判断することも考えられる。却って、その潜在性が強い反論を可能にしているとも言える。話し手が「し」を効果的に使用し、語られない部分は聞き手の推論にあえてまかせ、その反論の効果を知り手に示そうとしており、推論の過程をうまく利用する話し手の戦略ともみられる。

次に、下記の例(149) (150)はCMでの「し」の「言いさし文」の使用例であるが、この「言いさし文」も最近の新しい使用である。これらもやはり、B2の発話「いや、まだ夏だ。」で、相手の「冬という認識」に対して、否定できるが、あえて「し」を付加し「相手との認識の

³⁸ 栗原(2009:1-15)でも、「終助詞化した「し」」とし、最近若年層を中心に使用が観察され、聞き手への働きかけが気薄で、独白性があるとし、データはブログなど書き言葉进行分析している。

³⁹ 「話し手の判断」とは白川(2001)では、「ある事柄の正しさや起こる可能性についての話し手の考えを述べたり、他から聞いた情報を表したりすること」と述べ、「話し手の判断」を表す表現として以下のものをあげている。

1. 断定を表す表現（述語を普通形か丁寧形で言いきる）
例) あの人は田中さんの指導教官だ。
2. 断定を避ける表現（だろう・と思う・まい・と思われる・と言える・と考えられる・のではなだろうか など）
例) 彼は今日授業に来ないと思います。
3. 可能性を表す表現（かもしれない・かねない・恐れがある・とは限らない など）
例) 台風の影響で、電車が遅れるかもしれません。
4. 確信を表す表現（はずだ・にちがいない・に相違ない・にきまっている・はずがない・わけがない など）
例) 田中さんは授業を休むにちがいない。
5. 外観・兆候を表す表現（そうだ）
例) このリンゴはおいしそうだ。
6. 状況からの判断を表す表現（ようだ・みたいだ・らしい）
例) 田中さんは、まだ帰宅していないようだ。
7. 伝聞を表す表現（そうだ・らしい・という・ということだ など）
例) 彼はアメリカの大統領にあつたそうだ。

異なり」に対する「話し手の伝達態度」を示していると考えられる。また、フェードアウトするような終わり方ではなく、「し。」で打ち止めるように切っていることから、「婉曲」の用法とは異なることがわかる。また例(151)は、「し」の言いさし文が、独白で使用されている例である。この例も、文末が下降調で打ち止めるように終わっていることから、新しいタイプの「言いさし文」と考えられる。父と息子の会話であるが、父と息子が話している映像として流れ、息子の発話は独白（心の声）として放映されている。この例から「し」は独白でも使用されていることがわかる。

(149)

日産 e-NOTE CM「まだ夏だし。金魚すくい編」(2018年放映)

A1: (夏祭りの出店で金魚すくいをしながら) あっ、はみだしちゃう！

B1: えっ？どうしたの？

A2: アイスバーンの交差点！(冬のアイスバーンを想像しながら)

B2: いや、まだ夏だし。

(場面変わって)

A3: 早く、冬来ないかな。

B3: いや、まだ夏だし。

(150)

日産 e-NOTE CM「まだ夏だし。プール編」(2018年放映)

A1: (夏休み、スライダープールで滑っている子供を見て) すべってるね。

B1: えっ？どうしたの？

A2: 冬の坂道発進！

B2: いや、まだ夏だし。

(場面変わって)

A3: 早く、冬来ないかな。

B3: いや、まだ夏だし。

(151)

出光石油(株) CM「NEXT IDEMITSU! 父の仕事篇」(2018年放映)

(日本からベトナムに単身赴任している父と息子の絆を描くストーリーCM)

[ベトナムの空港に息子が着く。] ()の中は息子の心の中の声

父： いきなり呼んですまん。こちら、ホアンさん。
息子：(父は、自分勝手だ。)
父： 母さん元気か？ 二人だけで寂しいだろう。
息子：(声、無駄にでかいし。)
父： ここね、春巻きもおいしいんだ。
息子：(話、全然聞かないし。)
父： ちょっと、夕方迄、仕事だから、あと適当にやっててくれ。
息子：(っていうか、何でベトナムなんだよ。)
父： 明日、町の中、歩いてみたらどうだ？(父に電話が来る。)
すまん、すぐに戻るから。
息子：(日本で、いいじゃん。)
(でかい仕事とか、知らないし。)
(製油所とか、関係ないし。)
[日本での過去の家族の映像]
(大事な時、いないし。)
父： ちょっと、出かけようか。
息子：(自分のことばっか、そう思っていた。この日までは・・・。)

5.3.3. 話者交替における優位性の確保

話者交替の場においては、発話権を委譲する「TRP : Transition Relevant Place (適切移行場)」について考えると、「TRP」が強くなるのは、「泣いてない。」の直後であるものとみられる。加藤(2013:161-171)では下記例のように統語的に強い切れ目(=境界)がある箇所にはテンスを介在できるとしている。「し」の前は「泣いてなかった」のようにテンス分化が可能であるため、本来なら、ここで聞き手の話者交替も考えられる。しかし、「泣いてない。」で断言し、発話を終了したとすると、それは「TRP」は強く、切れ目は明確になるが、聞き手は話者交替においても緊張感を強いられることにもなる。「沈黙」や陰悪な雰囲気にもなりかねない。一方、「泣いてないし。」の接続助詞を付加したあとは、構造的には接続助詞が付加されているため、未完結になり「TRP」が弱くなると考えられる。「聞き手にとっては、話者交替における適切移行場が確定しにくい状況であると言える。発話の順番を渡されたと判断していいものか次の返答に躊躇する状況も考えられる。また発話を委譲されたとしても、「し」で話し手の強い意向が示されている場合もあり、発話しにくい状況である。会話におけるターン構成単位 (turn-construction-unit, TCC) には、完全な節や、文などの他にもイントネーション、ストレス、ポーズ、などの音調も関係している。つまり、「泣

いてなし。ㇿ||」のように打ち止めて、音調を下げる言い方も発話の終了を示すとみられる。接続助詞を使用する事により、「切れて」いるように思わせながら、本来持つ「連言形式」のため、聞き手は「切れていない」とも推論でき、「し」を付加し、敢えて「言いさし文」にすることにより、発話を続けることも、そこで発話を閉じることも可能である。話者の文を閉じたくない心理もあるかもしれない。未完結にし、話者交替も含め、会話における主導権に対する優位性の確保など、完結させないやり方が持つ語用論的機能を効果的に利用する話し手の戦略が考えられる。

(152) 泣いてない||し|

↓ ↓

統語的切れ目 強 弱

5.4 本章のまとめ

「し」の統語的特徴としては、基本的に並列を表し、前件と後件の文の種類により、理由の意味も生じてくるものとする。構造的には、並列と理由の用法は重なりが生じても差し支えないものと分析した。また、先行研究においては、「し」が「言いさし」になった場合、並列の意味が消失し、理由の意味だけが残るとされていたが、本研究では「～し。」の後も、「～し。(～し～)」のように、その連言性は、潜在化し残存しており、消失してはいないと考える。従って、「並列」の意味も消失していないものとした。

「～し。」の語用論的機能について、談話標識としては「し」は「発話する情報について話者自身の伝達上の態度」を示し、「相手の認識が誤っている」という「認識要求」を示すことから、「相手の発話の受容のあり方に関する情報」を示す機能も持つとする。また、知識管理については、話し手が行い、発話内容については、議論の余地なしという判断済みの態度を示す。聞き手に対する排他的知識管理の意味が強い。相手への受容要求については、「し」の持つ「独白性」からも、結果は考慮しないが効果は示せると考える。話相手や周りと同じ認識状況でも使用できなことはないが、反論に使用できる。あえて「し」を付加し「言いさし文」にすることにより、そこでまだ発話を続けることも可能であるし、やめることもできる。「し」が持つ、連言用法を利用していると考えられる。反論では、話し手の考えを変更しない強い伝達態度を示している。話者交替の場では、未完結にすることにより、聞き手には、発話が切れているのか切れていないのか適切移行場が確定しにくく、会話の場における主導権、優位性を確保しようとする話し手の戦略が見られる。なお、「し」が「非連

言形式」になった場合、相手との対立関係⁴⁰の有無や文脈によりその談話機能は異なるもの
と考える。

⁴⁰ 「対立関係あり」とは、「文脈状況から、話し相手に対し認識の異なりがあると判断し、それを正す要求（認識要求）があること」とする。「対立関係なし」とは、「文脈状況から、話し相手に認識の異なりがなく、または、認識の異なりを正す要求がないこと」とする。しかし、認識のあり方については確かに対立が見られるが、これらは2項対立ではなく、連続性をなすと思われる。

第6章 「たり」の基本特性：選言性と言いさし文への拡張

「たり」は、列叙接続の事態関係認識を標示する接続助詞で「し」と同じく並立接続を表す接続助詞に分類されている。「たり」も言いさし文での使用が見られる。本来、「たり」は「し」と同じく「～たり～たりする。」「～し～し～。」と並立を表す機能を持つが、最近の使用において「～たりして。」「～たりしますか。」など並列せず、単独での使用も見られる。これらについての語用論的機能を検証する。

またこの章の最後で、「し」と「たり」を、社会語用論的観点から、その対人的機能を分析し、比較する。

6.1 先行研究における「たり」の統語的特徴と意味用法

先行研究では「たり」について、「昨日は音楽を聴いたり、本を読んだりした。」など、並列性をその意味の基本とするものが多い。加藤(2006:112)では、「たり」を「し」などと同じく事態の関係についての認識を表す「接続助詞(並立接続)」として分類している。代表的な先行研究の一つである寺村(1991:197-229)では、述語の並立結合として「連用形」や「て形」と共に「たり」を挙げている。「たり」に関しては、「たり接続」には「対称的なたり接続」と「非対称的なたり接続」があるとしている。そして、そのどちらの型でも、「二つの動詞の初めの方を「V₁たり」と「たり形」にしてつなぐと、後の方も「V₂たり」の形にしてそれを「する」で括って動詞句を形成する」としている。

「対称的なたり接続」とは、「対称的な動作・出来事・状態を述べる」として以下の例をあげている。

(153) 明日は雨が降ったり、止んだりでしょう。

また、「非対称的なたり接続」とは「単に幾つかの行為・動作を述べる」として下記の例をあげている。

(154) 土曜日はテニスをしたり、小説を読んだり、ギターを弾いたりして過ごします。

しかし、寺村(1991:216-217)で特徴的なのは、「～たり～たりする」を複文とは捉えておらず、「複述語」を持つ単文として整理している⁴¹。また下記の例のように非対称的並立にお

⁴¹ 寺村(1991:217)では、「複述語」を持つ単文とは「親父が魚を炭火で焼き、酒の爛をする」の例文で、「主格補語が

ける動作・出来事を表す場合では「V₂」の方も「たり」にしなければ非文になると述べている⁴²。

(155)*土曜日はテニスをしたたり、休みました。

寺村(1991)が道半ばにして、病のため死去し、その研究を引き継ぎ発展させた森山(1995)がある。森山(1995:127-149)では、「～たり～たりする」「～とか～とかする」のような構造を持つものを並列述語構文として分析している。「[ab]する」の[ab]の部分は同資格で並列され、述語としての機能は「する」の部分に統括されると述べ。名詞を接続する時に「の」や「だ」が伴える点、「ガ格主語扱い」が可能な点で、構文的には名詞句の資格を有しているとしているとし、さらに、寺村(1991)の研究をもとに、並列述語構文の形式、意味、用法について整理し、「並立的結合が、連用形による並立結合のように、両方の要素を共に満足する関係」のものを「交差的並列」と呼び、「たり」のように複数場面を結合させる並列関係を「結合的並列」、「とか」のように「あるべき表現内容の候補をあげるものを「候補的並列」として区分し、「並列列挙の仕方」で、「一部列挙」と全部をあげる「全部列挙」に分け、用法を整理している。「～たり～たりする」に関しては「結合的並列」の「一部列挙」と説明している。また、下記例(158)のような例は「同類的なグループから一つの例を出すという例示的な表現方法をとることで、その類的意味を取り上げる」とし、「たりして」にも触れ、冗談の「たりして」として以下の例文をあげ、「ある種の評価の言い方をベースに持つと言えるのかもしれない」としている。

寺村(1991:216-217)では「～たり～たりする」を「複述語」を持つ単文として整理していたが、森山(1995:130-133)においては、「たり」は「内部にガ格の別の主語をとるコトができる」と分析する。つまり一種の「複文」構造として「節的なレベル(事態を表すレベル。いわゆるB段階)までを並列できる」としている。

一部列挙(複数場面があり、その一場面が一部列挙としてとりあげられるもの)

(156) ホテルでは散歩をしたたり、水泳をしたたりしていました。

一つで、それと述語動詞が二つ結びついているが、コトとしては一つであり、したがって「単文」と考えることができる」としている。また、複文の説明では「おやじが魚を炭火で焼き、かみさんが酒の爛をする」では、一つの主格補語にその述語が一つ、もう一つの主格補語にその述語がある。つまり、二つのコトがて形で繋がって一つの文になっているため「複文」であるとしている。

⁴²中俣(2014)によれば、誤用とされる「食べたり、飲む。」の形も、実際の使用例では、1000例のうち、2割近くみられるとのことである。

結合的並列（複数場面の事態や複数主体の事態を結合的に並列する）

(157) あの店のスープはおしかったりまずかったりする。

類的意味の強調

(158) どうしたんだ？こんな階段の途中につたつたりして。

(159) うどんにマヨネースをかけたりして。

6.2 「たり」の統語的特徴

「たり」は事態関係認識標示の「並立」を表す接続助詞に分類されているが、同時並行の動作というより、順序を指定せず、出来事や動作を列挙する表現である。「～たり～たりする」の形式の場合は「～たり～たり」の名詞句相当のものに「する」がついているものと考えることができる。「たり」自体はもともと、「接続助詞 て」+「動詞 あり」→「たり」と結合したもので、もとの「て」の連用形接続の影響を受け、「たり」も連用形接続でであると考えられる⁴³。また、「～たり～たりする」の「する」自体は他動詞としての語彙的意味を喪失している「軽動詞」である。従って「～たり～たりする」全体で動詞句相当と考えることができる。「歩いたり、走ったり」「寒かったり、暑かったり」「複雑だったり、単純だったり」「学生だったり、会社員だったり」と、連用形接続で、各品詞の述語句に使用できる。また、上記先行研究でも述べられていた「～たり～たり」の部分は「遊んだり、食べたりの二日間」「遊んだり、食べたりが楽しかった。」「の」「が」などに続くため、名詞句相当であると考えられる。

本論文では下記の例(165)(166)のように「を」「に」など、他の格助詞も伴えとみる。「たり」が名詞句になるのは「たり」が本来連用形であり、連用形が名詞に転成する「転成名詞」の仕組みを使用している可能性もあるとみるが、今回はこれ以上取り上げない。「たり」は動詞接続の場合「飲んだり」、「書いたり」「撮ったり」のように音便が生じる。「飛んだり」のように撥音便のあとは「だり」となる。「～たり～たり」の部分では「食べたり、食べなかつたりする」のように肯定形や否定形、「休んでいたり、本を読んでいたりした。」のようにアスペクトを標示できるが、テンスの分化はなく、後の「する」でテンスを標示することになる。この点は本研究でも「～たり～たりする」を複文とせず、「～たり～たり」の部分をも句として捉えることとも関係している。

また、会話での使用の場合、並列用法での使用と非並列用法での使用がみられる。

⁴³ 「6.4 歴史的変遷 (1977:51-56)」を参照。

- (160) 食べたり休んだりした。
- (161) *食べたり、休んだ。
- (162) 飲んだり食べたりの三時間。
- (163) 昨日は飲んだり、食べたりだった。
- (164) 太郎は具合が悪くて、飲んだり食べたりが大変だ。
- (165) 休んだり、遅刻したりを認めません。
- (166) 太郎は寝たり起きたりになってしまった。

下記の「表 11」に「たり」の形式をまとめる。

表 11. 「たり」の形式

～たり～たり する (名詞句) + (軽動詞 ⁴⁴)	
(1) 並列形式 (a) ～たり～たり する (b) ～たり～たり。 (c) ～たり～たり が～。 (d) ～たり～たり の～だ。 (e) ～たり～たり だ。 (f) ～たり～たりして。 ～の部分(名詞、形容詞、動詞(テンスの分化はない)を含むことができる	(2) 非並列形式 (a) ～たり (b) ～たり する。 (d) ～たり して。

上記表 11 の形式を、下記(167)～(175)までの例文として示す。

- (167) 日曜日はワインを飲んだり、運動したりする。
- (168) 日曜日はワインを飲んだり、本を読んだり。
- (169) 日曜日はワインを飲んだり、運動したりがいいと思う。
- (170) 日曜日はワインを飲んだり、運動したりの一日だ。
- (171) 踏んだり蹴ったりだ。

⁴⁴ 加藤(2006:32)では、他動詞としての本来の「する」の語彙的意味が後退している「する」などを「軽動詞」としている。

- (172) 日曜日はワインを飲んだり、映画を見たりして。
 (173) 日曜日はワイン飲んだり・・・。
 (174) 日曜日はワインを飲んだりする。
 (175) 日曜日はワインを飲んだりして。

「～たり。」の場合は「～たり～たり する」でセットとしての使用が浸透しており、「～たり。」の言いさし文で終わる場合は、まだ「～たり」や「～たりする」が後に続く場合が想定され、不自然ととらえることもある。従って、「たり。」の言いさし文の場合は「～たり・・・」のような言い残しが想定しやすい。一方、「～たりして。」で終わる場合は「する」が入っているため、言いさしても「～たり。」よりは不自然ではない。実際にこれらの使用も見られる。

6.3 南の分類における「たり」の制約

南(1993:74-120)の分類では、「たり」はB類に相当するため、テンス、対事的モダリティ、丁寧さを内部に含むことができない。最初に下記例(179)で、「～たり～たり」内部においてのテンスの分化をみる。

- (176)
- a. 太郎はみんなと遊んだり、話したりして、評判がいい。
 - b. *太郎はみんなと遊んだたり、話したたりして、評判も良かった。
 - c. 太郎はみんなと遊んだり、話したりして、評判も良かった。

並列の機能を持つ「たり」は内部にテンスを標示することができない。上記例では「する」でテンスを決定しなければならない。

次に、丁寧さを含むことが可能かを下記の例(180)でみる。

- (177)
- b. ?太郎はみんなと遊びましたり、話しましたりしました。

「たり」は内部に丁寧さをふくみにくい。

次に「たり」内部で、対事的モダリティを含むことが可能かを下記の例(181)でみる。

- (178)

c. ? 太郎は行くかもしれなかつたり、行かないかもしれなかつたりする⁴⁵。

「たり」は対事的モダリティを内部に含みにくい。

6.4 歴史的変遷

竹内(1977:51-56)では、「助動詞」として「たり」を挙げ、「たり」を「完了・存続の形式」に分類し、「動詞の動作・作用が本質的に持っている属性-生起し、継続し、結果が存続するなどの諸様態-を言語主体が自分との関係において、どう受け止めるかを表す助動詞」として説明している。「たり」はその中で、「存在の形式」としている。「たり」の成立については「たり」は「て」に「あり」が結合し、「te+ari→tari」と変化して成立したもので「て」の接続上の性質をそのまま受け継ぎ、連用形に接続するとしている。

次に、内尾(1973:99, 100)では「並立助詞の変遷」の中で「たり」について触れ、「たり」については、「鎌倉時代 たり・だり」とし、「たり・だり」は完了の助動詞からの転で、用言の並立に用いるとしている。鎌倉時代から現れ、室町時代に盛んに用い、現代に及ぶと述べている。「重きものを負うたり、抱いたりして」の例を挙げている。

6.5 「たり」の特性

6.5.1 「たり」の意味的特性

「たり」は「～たり～たりする」の形式で、並列を表すとされているが、次のような例をあげることができる。

(179) 高齢の父は、寝たり起きたりしている。

(180) 薬を飲んだり、飲まなかつたりする。

上記例文はいずれも対称性があり⁴⁶、例文(179)においては「寝る」か「起きる」かの関係であり、例文(180)は肯定・否定の対称性を持っているが、薬を「飲む時」と「飲まない時」があるという意味である。これらの例文はいずれも「aあるいはb(a or b)」のいずれかを選択する関係である。上記例から両者は同時には成り立たない関係であると考えられる。「たり」はこれまで、並列を表す意味がその基本とされることが多かったが、上記例を

⁴⁵ (180)の例では「含みにくい」としたが、「太郎は行くかもしれなかつたりして。」であると許容できる範囲と考える。

⁴⁶ 寺村(1991)の「対称的なタリ接続」と「非対称的なタリ接続」を参考とする。

考えると「たり」の特性は「a あるいは b」という所謂、「選言関係」にあると解釈するのが妥当であるとみる⁴⁷。加藤(2006:121)では、接続詞の分類の中で、選択関係を表す「選言接続」(それとも・あるいは・もしくは・または など)を整理している。本論文ではこれら接続詞の分類に接続助詞も当てはまるものとし、「たり」は選言接続(a あるいは b)論理関係では(a v b)で表すものとする。「たり」を選言(「a or b」)関係として捉えると、「たり」の場合は下記の例のように「美味しい」時があれば、あるいは「まずい」時があり、両者には同時には成立しない。

(181) この店の料理は美味しかったり、まずかったりする。

(182) 高齢の父は元気だったり、元気でなかたりする。

(183) 最近は、運動したり、料理を作たりする。

上記例(182)のように肯定・否定の対称性を持つ場合でも「たり」の場合は、同時には成り立たないため成立する。上記の例(186)からも、「たり」は「+」の関係ではなく、ある集合の要素を提出し、複数の事柄の中から、「a あるいは b」と、要素を選び取らせる特性を持つ。「a をすることもあれば、b をすることもあり、(あるいは c をすることもある)」と例をあげ、「a あるいは b (あるいは c)」という意味を持ち、基本的には上記例からも「a と b は同時に成立しない」特性があるものとみる。

本論文では「～たり～たり」の形で使用される構造形式を「選言(形式)」と呼び、意味上「a あるいは b」と選択関係にある場合を「選言関係(用法)」と呼ぶ。以下に、「たり」の選言の特性をまとめる。

(184) 「たり」の選言性

1. 「たり」は集合の中から「a あるいは b、(a v b)、(a or b)」とその要素を提示し、選び取る意味的特性を持つ。
2. 「a と b」は基本的には、同時に成立しない特性を持つ。
3. 本論文では「a たり b たりする」の形式を「選言(形式)」と呼ぶ。

⁴⁷加藤(2006)では、接続詞の分類の中で、並列関係を示す連言接続(および・並びに・また・かつ、など)と、選択関係を示す選言接続(それとも、あるいは・もしくは・または、など)を整理している。本稿では、これら接続詞の分類に接続助詞も当てはまるものと考え、この分類から本稿の接続助詞「し」は連言関係(a および b)「たり」は選言関係(a あるいは b)を表すものと考え、これら二つを比較することにより、「たり」の特性をみる。

6.5.2 選言関係が成り立たない場合

選言関係が全ての場合において、成り立つわけではなく、成り立たない場合がある。以下にその例を示す。選言性が成り立たない場合は下記例(185)の「許可」のように「食べる」と「飲む」は両方とも許されることになる。また例(186)の禁止の場合は「食べる」も「飲む」も許されない場合となり、その両方が成り立たない。つまり「連言性」の否定となる。また例(187)は、例示であり、他の可能性も排除しないため「運動すること」または「音楽を聴くこと」以外も成り立つ可能性があることになる。この場合も「連言否定」の意味になると考えられる。「たり」の選言性について述べているが、「連言性」との関係が示唆されることになる。この点については、今後の課題とする。

1. 「a と b」どちらかではなく、両方成り立つ関係

(185) ここで食べたり飲んだりしてよい。(許可)

2. 「a と b」どちらかではなく、両方成り立たない関係 (連言否定)

(186) ここで、食べたり飲んだりしないでください。(禁止)

3. 「a、b」の他の可能性を排除しない関係 (連言否定)

(187) 昨日は運動したり、音楽を聴いたりした。(例示)

6.6 非選言用法としての拡張的使用

最近、「～たり～たりする」が選言の形式をとらず、「～たり」単独での使用が見られる。分析にあたり、下記例(188)(189)のように「たり」が選言形式をとらず、単独で使用される場合を本研究では「非選言(形式)」と呼び、「選言関係」にない場合を「非選言関係(用法)」と呼ぶ。

(188) 映画見たりしますか。

(189) これ全部食べたりして。

(190) 「たり」の非選言性

1. 「たり」が選言形式をとらず単独で使用される場合を「非選言(形式)」と呼ぶ。

2. 「たり」が選言関係にない場合を「非選言関係(用法)」と呼ぶ。

6.7 話題を限定しない非選言使用の「たり」

下記(192)の例は、若者を中心とした最近の使用で、「たりしますか」をつけて質問するものである。これは「ワインを飲みますか。」の質問と同じ情報内容であるが、あえて、「たりしますか」と「たり」をつけて言い表すものである。(191)の例では、話題を限定している質問になるため、聞き手は質問に対するその答えの範囲を限定して、直接答えなければならないが、「たりしますか」では、話題を限定せず、多くの話題の中から、「たとえば、ワインを飲んだりすることがありますか。」と聞き手に対し柔らかく質問するものである。これは、「a あるいは b」の「たり」の選言的特性から、幾つかの中から、「例えば一例として」取り上げているものと思われる。聞き手は、答えるのに(191)の質問に比べ、限定的ではなく、余裕があり、緊張せずに、楽な気持ちで答えられると考える。聞き手に配慮した対人的機能を持つと言える。

(191) ワインを飲みますか。

(192) ワインを飲んだりしますか。

6.8 「たり」の記述と総括

「～たり～たりする」の「～たり～たり」の部分は「名詞句」相当に、軽動詞「する」がついたものであると考えることができる。「～たり～たり」の部分は「たり」の意味的特性は選言関係である。「a あるいは b」の関係であり、「a と b」は同時には成り立たない特性を持つ。ただし選言性が成り立たない場合があると考える。選言性が成り立たない場合は下記Bの例(185)の「許可」のように「食べる」と「飲む」は両方とも許されることになる。また例(186)の禁止の場合は「食べる」も「飲む」も許されない場合となり、その両方が成り立たない。また例(187)は、例示であり、他の可能性も排除しないため「運動すること」または「音楽を聴くこと」以外も成り立つ可能性があることになる。

A: 選言性が成り立つ場合

1. 「a あるいは b」と「a、b」のどちらかを選択する関係の場合、「たり」は選言関係になる。

B: 選言性が成り立たない場合

1. 両方成り立つ関係

(185) ここで食べたり飲んだりしてもよい。(許可)

2. 両方成り立たない関係⁴⁸

(186) ここで、食べたり飲んだりしないでください。(禁止)

3. 他の可能性を排除しない関係

(187) 昨日は運動したり、音楽を聴いたりした。(例示) (再掲)

また、「たり」が選言形式をとらず、「～たりしますか」「～たりして」のように、「たり」単独で「非選言」形式で使用される場合も「たり」の選言的特性は残存しており、他にも選択肢があるかのように、標示上選言を後退させているものとみられる。この非選言使用の拡張要因としては、「～たり～たり」が、連体修飾、連用修飾ができ、またそこで打ち止めることもでき、その用法の広さから、機能が拡張していったものとも考えられる。

6.9 非選言用法「たり」の社会語用論的機能

6.9.1 「～たりする」の社会語用論的分析

社会語用論的機能として、ブラウン&レヴィンソンの「ポライトネス (politeness)」の観点から分析を行う。(191)の例では聞き手の「踏みこまれたくない」フェイスは侵害され、話し手による聞き手へのフェイスに対する配慮は小さいと思われる。相手の縄張りに踏み込む度合いも大きいとみられる(B & L, pp. 59-71)。しかし、直接明示的な質問であり、情報の伝達効率が高いと考えられる。一方「たりしますか」では、「たり」の非選言での使用は、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとして、「ヘッジ (hedge) 表現」として間接化の機能を有しているとみられる。(Strategy 2: Question, hedge) (B & L, pp.145-158)。相手のネガティブフェイスを大きく侵害せず、話し手のポジティブフェイスも守られる。どちらのフェイスも保たれることになる。特に若年層は相手との距離を考えながら話す傾向もあり、話題を限定しない「たり」の非選言使用は、社会的な距離をとるための間接化の有効な方法であると思われる。「ヘッジ(hedge)」として「たり」を使用し、控えめに抑えて述べる効果があるものと考察する。

さらに、「たりしますか」と非選言にすることにより、標示上選言を後退させ、他にも選択肢があるかのように、これも一つの選択肢だと、聞き手に緊張感を与えないようにする間接化の効果を持つものとする⁴⁹。「たり」の非選言形式での使用は、語用論的適切性(情報伝達効率性)より、対人的適切性(ネガティブポライトネスの効果・間接化)が重要視され、

⁴⁸ 英語では(Don't do A nor B.)にもなり、連言的になる。

⁴⁹ 一方「し」では、連言にならず、「泣いてないし。」のように単独で使用される時は、「たり」とは異なり、後退した部分はその連言的特性から更にプラスされていく関係になり、強い根拠ともなり得る点で「たり」の緩和的效果とは異なると考える。

その結果、その構造的特性を崩した「非選言」での使用が選択されることにより、新たな談話効果を生み出していると考えられる⁵⁰。

6.9.2 関連事象とその拡張用法

森山(1995:140)でも、「冗談のたり」として触れているが、(193)の例のような使用も親しい関係で見られる。

(193) これ、全部食べたりして。

(193)の例は、話し手としては、その行為を実行に移したい気持ちや「あわよくば、実行しよう。」としている場合の発話だと思われるが、周りの状況を見ると、非現実的な場合や可能性が低いと話し手自身が捉えている場合ともみられる。この使用も最近の使用例である。先の分析から、「a あるいは b」の意味から、他にも選択肢があり、確実ではないことを述べる時に「たり」は使用できる。考えられないようなことをあえて実行する場合にも使用できる⁵¹。語用論的機能として、「～たりして。」と仮想的に示し、冗談のマーカースとして機能していると思われる。また、話し手としては、先にも述べたように「あわよくば」の気持ちもあるとみられる。しかし、その行為が今の状況にふさわしくない行為だと推測する場合、「もしかするとそんなことも考えられる」とその行為をあくまでも、可能性が低い行為として述べることにより、行為に対する責任を回避しようとする話し手の姿勢もうかがえる。また、不確実なことについては婉曲化する必要もあり、ポライトネスの観点からは、話し手が責任を負わずに済むように予防線を張る言い方でもあり、「たり」は、緩和的に「ヘッジ(hedges)表現」として使用されていると考察する。普通ヘッジは、ネガティブ・ポライトネスの特徴としてあげられているが、この例はポジティブ・ポライトネスの機能も有していると考えられる。話し手は自分の意見にヘッジを使用し、曖昧にし、聞き手との不一致を避けたいとも考え、安全を図っているものと思われる。(Strategy 6: Avoid disagreement Hedging opinions) (B & L, pp. 116-117)。「たり」は非選言で使用され、主節を後退させることにより、そこに推意が生じ、聞き手の推論が必要となる。話し手は聞き手に返答を求めているわけではない。しかし、聞き手に推論させ、その判断を負わせ、聞き手の本音を引き出す、話し手の戦

⁵⁰ 加藤(2002)では「言語使用者における使用動機のありかた」について述べているが、その中で最近「こちら、Xになります」の使用例について、語用論的適切性よりも、ポライトネス上の適切性が重要視された結果、用法が拡張したと述べている。詳しくは加藤(2002)を参照。

⁵¹ 本多(2007)でも「タリ」の意味として「話し手側の生起の必然性が無い事態を表す」としてまとめている。

略的な発話ともとれる。形式的には「～たりして。」と省略しており、ポライトネスのストラテジーでは、「ほのめかし(off record)のストラテジー」(5.5 Off record, Strategy 15: Be incomplete, use ellipsis) (B & L, pp. 227)としての手段とも考えられる。しかし、内容的には冗談として、それを戯画的に聞き手に提示し、聞き手の共感を得ようとしている。「他者に受け入れられたい」という近接化の話し手の欲求であり、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして使用していると思われる。(Strategy 8: Joke) (B & L, pp. 124)。しかし、一見、話し手のポジティブ・フェイスを守り、聞き手のフェイスも侵害していないように見えるが、表面的には話し手も聞き手もお互いのフェイスを失っていないように思えても、聞き手の本音を引き出したいという話し手の意図から、隠れたリスクを聞き手が負うことにもなる危険性もある。

さらに、話し手と聞き手の関係はフェイスリスクが小さい親しい関係のときには、「～たりして。」は使用可能であるが、フェイスリスクが大きい関係の場合は、使用が難しいともみられる。話し手の発話が聞き手や周りにとって、時には「ずうずうしい」とか「失礼」といった印象を与えてしまう。その場合はインポライト(impolite)となってしまう危険性も伴う。この「聞き手の本音を引き出す」「～たりして。」の使用は、先の、「話題を限定しない」「～たりしますか。」を更に拡張させたものとも考えられる。「非選言形式」から「～たりして。」と「言いさし」形式を使用することにより、本来の構造的特性を更に潜在化させ、その構造を変化させることにより、新たな談話効果を生み出しているとみられる。しかし、この点については更なる検証が必要であると考えられる。

6.10 「し」と「たり」の対人的機能

6.10.1 「し」とポライトネス

本研究における「～し。」は先行研究における所謂「連言使用」ではなく「し」を連言させず、単独で使用するものである。また、先行研究での「婉曲的な用法」とは異なり、話し手の強い意向を示しているものであるとする。それでは、本研究の対象「し」と「たり」とポライトネスの関係はどのようなものになるのか、「し」と「たり」を比較し、考察する。

(148)

ロ ペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？泣いてねえし。 (再掲)

(150)

A： 出かけない？

B : 寒いし。

B' : 寒いし。(風が強いし、雨も降っているし・・・だから、出かけたくないって言ってるのだ。) (再掲)

「～し。」は非並列使用であり「言いさし文」である。「言いさし文」の持つ談話効果としては、本来なら発話意図を婉曲に述べ、明示的に述べない回避効果を持つ。発話意図をそのまま述べず、それをほのめかし、フェイスリスクを軽減するために使用される場合である。ポライトネスのストラテジーでは、ネガティブ・ポライトネスと行為回避の間に位置するの「ほのめかし(off record)のストラテジー」に分類される。「ほのめかし(off record)」のストラテジーとは滝浦(2008)の訳では「事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するもの」としている。

しかし、本研究の非並列使用「泣いてないし。」や「寒いし。」は婉曲にほのめかしているわけではなく、話し手の意向を明示的に聞き手に述べているものである。つまり、「し」には、「ほのめかし(off record)のストラテジー」として使用される場合と、明示的に使用され、話し手の意向の強さを示す直言の「し」の使用があると考えられる。直言で使用される最近観察される新しい「言いさし文」の場合は、相手との関係は親しい関係やフェイスリスクが小さい関係での使用である。しかし、これらの関係においても、その「言いさし」が、却って、聞き手のフェイスを侵害する場合もある。フェイスリスクが大きい関係では使用は難しく、もちろん意図的に使用される場合は「インポライトネス(impoliteness)」となってしまうため、使用は制限される。話し手が反論で「～し。」を使用する時、「aそしてbそして・・・」と元の連言関係を表す形式から、あえて、単独で打ち止め、潜在的根拠を暗示させ、「し」を付加し「話し手の意向の強さ」や、聞き手に対して「同意できない意向」などを示そうとしているものと考えられる

6.10.2 「たり」とポライトネス

一方、「たり」は、「6.9」で、ポライトネスの観点から「たり」の非選言使用での分析を行ったが、「し」と「たり」を比較する上で、再度「たり」のポライトネスの機能を振り返ることにする。

若者を中心とした最近の使用で、「ワイン、飲んだりしますか。」のように、あえて「たりしますか」をつけて質問する場合、話題を限定した直接的な質問にならないように、聞き手に配慮した対人機能を持っているとの分析を行った。「たりしますか」をつけた場合は、多くの話題の中から、「たとえば、ワインを飲んだりすることがありますか。」となり、これは、

「a あるいは b」の「たり」の選言的特性から「例えば、例として」と、取り上げているものと思われる。聞き手はそれにより、返答時に余裕が持てるものと思われる。

また「これ全部食べたりして。」の非選言形式の使用は、これも、選言用法から、他にも選択肢があり、確実ではないことを仮想的に述べ、冗談のマーカ―として機能しているとの分析を行った。「非選言形式」での「たり」はポライトネスの観点からは緩和的に (hedge) として使用されており、間接化の効果を持ち、話し手が責任を負わずに済むように予防線を張る言い方でもある。「～たりしますか。」の場合、ヘッジ(hedge)は、ネガティブ・ポライトネスとして使用されている。一方、「～たりして。」の場合は、内容的には冗談として、聞き手の共感を得ようとしている。「他者に受け入れられたい」という近接化の話し手の欲求であり、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして使用されている。話し手は自分の意見にヘッジ(hedge)を使用し、曖昧にし、聞き手との不一致を避けたいとも思い、安全を図っているものと考えられる

6.11 本章のまとめ

「し」と「たり」は元々、並列を表す接続助詞であったが、運用の中で、その用法が非並列単独使用へと拡張していったと考えられる。今回の考察から、その拡張的使用にいくつかの段階が見られる。今回の分析で明らかになった点として、「し」も「たり」も「連言」用法、「選言」用法から、単独「非連言」用法、「非選言」用法になっても、その並列性は残存していることが分かった。

(194) 「し」の用法の拡張

(1)～し～し～。【連言形式】⇒(2)～し(～し～し)【非連言形式】⇒(3)～し。【非連言】
(潜在的並列) (潜在的並列)
(潜在的非並列)
(婉曲・ほのめかし) (話し手の強い意向を示す)

(195) 「たり」の用法の拡張

(1)～たり～たりする【並列】⇒(2)～たりしますか【非並列】⇒(3)～たりして。【非並列】
(聞き手配慮・話題限定を避ける) (冗談)(責任回避)

「し」では、「泣いてないし。」のように「連言」にならず、単独で使用される場合は、「たり」とは異なり、後退した部分はその連言的特性から更にプラスされていく関係にな

り、強い根拠ともなり得る点で「たり」の緩和的効果とは異なるものとみられる。聞き手との関係を見ると、「し」の場合は、かなり親しい関係での使用が考えられる。フェイスリスクが大きい場合、この「し」の使用は、難しいと思われる。一方「たりしますか」は「ネガティブ・ポライトネス」の「ヘッジ (hedge)」として、使用され、間接化の機能を持つものとする。また、「冗談」で仮想的に使用する「たりして」は、対人的に「近接化」を欲し、「ポジティブ・ポライトネ」の「ヘッジ(hedge)」として使用されているとする。今回、同じ「並立」を表す接続助詞に分類されている「し」と「たり」であるが、単独使用の場合、その語用論的機能の異なりの一部が明らかになったと考える。以下に「し」と「たり」の非並列形式による、「言いさし文」と「ポライトネス」の関係を「表12」にまとめる。

表 12. 非並列を表す「し」と「たり」のポライトネスの関係

	【言いさし文（非連言用法）】～し	（非選言用法）～たりしますか	【言いさし（非選言用法）】～たりして。
聞き手の関係	親しい	親しくない	親しい
フェイスリスクへの配慮	小	大	大
形式が持つポライトネス戦略	言いさし ほのめかし (off record)	(丁寧語) 質問	言いさし ほのめかし (off record)
ポライトネス戦略	直言	ネガティブ・ポライトネス (hedge) (緩和) (間接化)	ポジティブ・ポライトネス (hedge) (近接化)
談話機能	非明示的 「～し」(婉曲) 明示的 「～し。」(反論)	話題を限定しない 聞き手配慮	非明示的 (冗談) 責任回避

伝達効率性	非明示的 (小) 明示的 (大)	非明示的 (小)	非明示的 (小)
相手の縄張りに踏み込む度合い	非明示的 (小) 明示的 (大)	小	小

第7章 因果関係から言いさしへ文の語用論的分化

「から」は、条件接続で、論理関係を標示し、因果関係を表す接続助詞に分類されている。最初に、「から」本来の意味・用法について先行研究を概観する。次に「から」の接続要素を調べ、白川(2009:40-51)の先行研究に於ける「理由を表さない」「から」について詳しくみる。この理由を表さない「から」に「言いさし文」がよく見られるためである。「言いさし文」としての「から」の語用論的機能について考察する。最後に「し」と比較し、どのような点が「言いさし文」における「から」と「し」の異なりなのか。また、最近の若い世代では、これまで「から。」で終えていた言いさし文に「し。」を使用しているのではないかと推測されるが、この点も分析を試みたいと考える。

次に、「ので」は「から」と同じく、条件接続で、論理関係を標示し、原因結果を表す接続助詞である。「ので」は、もとは、名詞化辞(nominalizer)「の」+格助詞「で」が複合した複合辞とみることができ、「準体助詞(名詞化辞)「の」に、コピュラ「だ」の連用形「で」がついたとするものもある。本研究では「接続助詞」として、以下を述べる。

これまでの先行研究では「ので」と「から」を比較したものも多いが、本研究でも、まず、同じ論理関係・原因結果を表わす「から」と「ので」と比較しながら、「ので」の意味用法、接続要素、「ので」と言いさし文「ので」の語用論的機能について分析する。

7.1 「から」の意味用法と接続要素

森田(1980:110-112)では、「から」について、用言や終止形つまり、一つの文に相当する表現について、後件に述べる事柄の理由であることを示す」とし、「「から」は後続句で述べる事柄が生ずるきっかけ、理由、根拠などを先行句で主観的に捉え叙述する条件形式であるとしている。

次に、国立国語研究所(1984:28-40)では、接続助詞「から」について、原因・理由を表し、表現者が、前件を後件の原因・理由として、指定して結び付ける言い方であり、比較対象として対で分析されることが多い「ので」に比べ、条件としての独立性が概して強い。またこの用法において、「～は～からだ」の形で結果・帰結を先に述べて、原因・理由を後で説明する言い方もあるとしている。

次に、加藤(2006:110-115)「接続助詞の用法区分」では、「から」は論理関係標示(条件接続:前件を条件として、後件に帰結を述べる接続)であり、「原因結果関係」を表す接続助詞として分類されている。

そして、南(1993:74-120)の分類では「から」はC類に分類されている。テンス、アスペクト、対事的モダリティを内部に含むことが可能である。

- (196) 太郎も行くだろうから、伝えておくね。
 (197) 太郎は行くまいから、伝えなくてもいい。

後件が命令や禁止の場合は「ので」より「から」の方が自然であると言える。

- (198) 危ないから、やめろ。
 (199) 危ないから、やめなさい。
 (200) あぶないから、やめてください。

「から」には、原因・理由を強調する、次のような用法もある。この場合は「ので」では置き換えられない。

- (201) 風邪をひいたのは、クーラーをつけたままにしたからだ。
 (202)* 風邪を引いたのは、クーラーをつけたままにしたのでだ。

「から」には、「からと言って」「からには」などの表現があるがこの場合「ので」では、言い換えられない。

- (203) 食べないからと言って、嫌いなわけではない。
 (204)* 食べないのでと言って、嫌いなわけではない。
 (205) 行くからには、よほどの決心をしているのだろう。
 (206)* 行くのでには、よほどの決心をしているのだろう。

最初に「から」の接続要素を、下記「表 13」にまとめる。

表 13. 「から」の接続要素

	名詞	名詞＋コピー ニラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
から	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

上記表から、聞き手への働きかけを表す、「命令形」、「意向形」、「疑問形」などに「から」が接続しないことは、接続要素の面からは、前件「から節」では、聞き手への働きかけの機能は少なく主観的と言える。「～から」の部分で、話し手の主観的理由を述べるのに「から」は適していると言える。しかし「～から」の後件には「依頼・命令・推量・意志・質問」などの表現が来ることが多いことは後ほど述べる白川(2009:37-68)の先行研究からも明らかである。

7.2 理由を表さない「から」

白川(2009:40-68)では、「から」には理由を表さない「から」があるとし、理由を表さない「から」は談話的な機能によって3つに分類されるとしている。

(1) 条件提示用法 (S_2 に示された内容を実行する場合の条件を S_1 で提示する)

(207) 主人「こっちも本気で教えるからよ。」

繁 「はい」

主人「最低二年はつとめろよな」

繁 「はい、勿論」

(2) お膳立て用法 (S_1 は S_2 を聞き手が実行するための前提情報として提示される)

(208) これから、英語の文章を読みますから、注意して聞いてください。

(3) 段取り用法 ($(S_1 \rightarrow S_2)$ という筋書きを聞き手に提示するもの)

(209) 式場での参殿や起立、着席などの指示は全て式の世話役の典儀がやってくれますから、参列者はそれに従います。

そして、理由を表さない「カラ」の共通特徴として、次のようにまとめている。

- ① S_2 には、必ず、命令・禁止・依頼・勧誘など、聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現がくる。
- ② S_1 には聞き手に S_2 を実行させることを可能にする情報、もしくは促進する情報がくる。この理由を表さない「から」は「言いさし文」の形で現れるのが群を抜いて多としている。「理由」を表すか表さないかは S_1 が「どうして」という問いの答えになりうるかどうかという判断基準にあるとしている。なお、「段取り用法」には「言いさし」の例が見られなかった。

7.3 「から」と言いさし文

「から」が「言いさし文」として使用されているデータを見る。以下の会話の例では、老人が「から」の言いさし文を使用し、高校生は同じ言いさし文に殆ど「し」を使用しているデータである⁵²。「から」の言いさし文は多く見られるとあってよいが、どのような談話効果を持って使用されているのか分析する。

(210)

【ハッピーバレンタイン】『紙兎ロペ』（フジテレビ放送）

老人1： ああ、もうここでいいです。

ロペ1： えっ？中まで持って行ってもいいですよ。

老人2： いや、いや、ほんと、君らと会えて助かりました。どうもありがとう。

アキラ1： 全然、方向一緒だし。ついで。

ロペ2： はい、じゃ、これ。（老人に買い物袋を渡す）

アキラ2： じゃあな。じいさん。

老人3： あっ、ちょっと待って。

アキラ3： うん？

老人4： はい、これ。

アキラ4： いや、いいし。

老人5： いいから。(①)ちょっとしたお礼だから。(②)はい。

アキラ5： えっ？チョコ？いや、いつもだったら、うれしいけど。

ロペ3： 2月14日ですからね。(③)

アキラ6： タイミングが・・・。

ロペ4： そうですね。

アキラ7： いや、ありがとう。来月3月14日、クッキー持ってくるから。(④)

老人6： いや、そんな若い人が余計な気をつかなくていいですから。(⑤)

アキラ8： いや、気つか、ルールだし。

ロペ5： そうっすね。

上記データにおいて、まず、白川(2009:40-68)の「理由」を表しているかどうかを S_1 が「どうして」という質問の答えになるかどうかで下記を見ると、①④⑤の「から」は理由

⁵² 「から」と「し」の比較は、「8.6」でみる。

を表していないと言える。①の「老人5の発話」で見ると「どうして？」の質問に対し、答は「いいから。」になってしまい、理由を表してはいない。同様に④の「アキラ7の発話」で見ると「どうして？」の質問に答は、「来月3月14日、クッキー持ってくるから。」は理由を表してはいない。⑤の「老人6」の発話を見ると「どうして？」の質問に対して答は「若い人が余計な気を使わなくていいですから」で、これも理由を表してはいないとみられる。次に、理由を表していない「言いさし文」から「から」を削除してみるとどのようなかを見る。

①の「老人5」の発話では「いいから。」から「から」を削除すると「いい」となり、④「アキラ7」の発話では「来月3月14日、クッキー持ってくる。」となり⑤「老人6」の発話では「いや、そんな若い人が余計な気をつかわなくていいです。」となり、「から」を削除しても、内容は100%言い尽くされているとあってよい。また、言うべき後件を言わずに終わっているのでもない。なぜなら、この後、すぐ話者交代も行われているからである。従って、この「から」はなくても良いが、話し手があえて、「から」を付加することにより、話し手のなんらかの心的態度を表す標識として機能していると考えられる。

先行研究では「から」は主観的に前件と後件を結びつける接続助詞であるとしていた。「から」は自己主張の強いマーカであると言える。老人がここで使用している「から」は「から」の後に表出されていない話し手の「私の気持ちをわかってほしい」「私の気持ちを汲んで下さい」という話し手の心的態度が「から」によって示されているとも考えられる。先に述べた白川(2009)の「理由を表さない「カラ」の共通特徴」として、「S₂には、必ず、命令・禁止・依頼・勧誘など、聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現がくる」、そして、「S₁には聞き手にS₂を実行させることを可能にする情報、もしくは促進する情報がくる。また、この理由を表さない「から」は「言いさし文」の形で現れるのが群を抜いて多い」としている。これらのことから、「言いさし文」の形はとっていても、「から」は話し手の心情をそのまま直接、聞き手に伝える談話効果を持つものと考えられる。

7.4 「から」の談話標識としての機能

談話標識としての「から」は、談話管理は話し手が行う。「聞き手への受容要求」が強い。話し手が、これが確固たる理由・根拠と考えるものを聞き手に強く主張することにより、話し手に何らかの行動要求を促す。周りとの同一認識上で使用しにくい。「から」は話者の感情を主観的に、直接的に表現する談話標識であると考えられる。

まず、下記のような同一認識上では「から」は、使用が不自然である。

(211)

A : これいいね。

B : ?うん、いいから。

(212)

A : これまずいいね。

B : いや、おいしいから。

(213) ちょっと、そこまで出かけてきますから。(あとは、よろしくお願いします。)

(214) 冷蔵庫に果物が入っていますから。(食べてください。)

上記例(213)(214)では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。この場合、「から」は「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すマーカー」として機能していると言える。「から」はまた、「話者が排他的に管理する準備があることを示す命題に付くマーカー」であると言える。従って「から」は「談話管理は話し手が行う」と考えられる。

7.5 「し」との比較

7.5.1 「から」と「し」の統語的特徴と先行研究

先の3章1節における加藤(2006:110-115)「接続助詞の用法区分」では、「から」は論理関係標示(条件接続)であり、「原因結果関係」を表す接続助詞として分類されている。

一方「し」は「事態関係認識標示」(列叙接続)であり、「並立接続」を表す。「し」と「から」は出現位置が似ており、「し」を「から」に置き換えられることも多いことから、この二つの接続助詞について比較分析を行う。

まず、「から」と「し」が接続の上でどのような違いがあるかを「表14」で示す。「から」は南(1993:74-120)の従属句の分類では、「し」と同じように「C類」に分類される。「から」と「し」は接続する要素のみでは、同じ接続に見えるが、その異なりについて考える。

表 14. 「から」と「し」の接続要素

	名詞	名詞＋コピ ユラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○
から	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

聞き手への働きかけを表す、「命令形」、「意向形」、「疑問形」などに「から」が接続しないことは、先にも述べたが、接続要素の面からは、前件「から節」では「し節」と同じように、聞き手への働きかけの機能は少なく主観的と言えるため、「～から」の部分で、話し手の主観的理由を述べるのに「から」は適していると言える。しかし「し」は、事態認識標示であり前件と後件の事実を結びつけているだけで、「から」と比較すると、意味的には強く依存し合わない関係だと言える。意味的には「から」の因果関係のような強い結びつきはない点が「し」と「から」の異なりと言える。以下の例で詳しく見る。

(215)

【ふぐ】『紙兎ロペ』（フジテレビ放送）

アキラ先輩： 天然、高くねえ？

魚 屋： そりゃ、おめえ、あれだよ。天然の方がおいしいに決まってるからだよ。

アキラ先輩： いや、同じ魚だし。

魚 屋： いや、おめえ……。 (紙兎ロペ「ふぐ」)

(215)'

アキラ先輩： 天然、高くねえ？

魚 屋： そりゃ、おめえ、あれだよ。天然の方がおいしいに決まってるからだよ。

アキラ先輩： いや、同じ魚だから。

魚 屋： いや、おめえ……。

上記例では「し」を使用して打ち止めているが、「し」の場合は並列の関係で、後にまだ根拠となるものが続く可能性もあることから、魚屋はその後の返答に窮しているように見える。一方「から」は「～だから。」で根拠の提示は限定されている。

次に、下記(216)の例を下記のように「～のは～からだ」の強調構文にしてみると、「し」では成立しない。つまり、「理由」を確定し強調する場合は、「から」の方が適していると考えられる。この点は「し」と「から」の違いと言えると考える。

(216)

- ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。
アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

(217) 目が赤いのは、昨日、寝てないからだ。

(218)* 目が赤いのは、昨日、寝てないしだ。

下記の例のように、理由を強調する構文「～のは～からだ。」は「～から」を使用できるが「し」は使用できない。また「から」は「だ」をつけて「～からだ」と文を完結することができるが、一方「し」の方は、「～しだ」で終わることはできない。「し」は「し」の前に「からだ」を内部に含めることはできるが、そのあと「し」をつけてもそれは、「従属節し」である。

(219)

(から)

- a. 今日地下鉄が混んでいるのは、野球チームの優勝パレードがあるからです。
b. 今日地下鉄が混んでいるのは、野球チームの優勝パレードがあるからだ。

(220)

(し)

- a. *今日地下鉄が混んでいるのは、野球チームの優勝パレードがあるしです。
b. *今日地下鉄が混んでいるのは、野球チームの優勝パレードがあるしだ。
c. 今日地下鉄が混んでいるのは野球チームの優勝パレードがあるからだし。

(221)

- a. 野球チームだからだ。
b. 野球チームだから。

c. 野球チームだし⁵³。

これらのことから、確定的に、理由・根拠を断定する場合、「から」は適しているが、「し」は同じように使用できないという制約がみられる。「から」はもともと、条件接続で論理関係標示の接続助詞であることも関係している。先にも述べたように「し」は前件と後件の事実を繋ぐ接続助詞である。また、「から」は「だ」をつけて「からだ。」のように、文を完結することが可能であるが、「し」はその内部に「だ」を含むことはできるが「しだ。」で終わることはできない。これは「～から。」の言いさし文が、上記例(223)のように、文が完結した「からだ。」から「だ」を消去した「言いさし」とも考えられる一方、「し」は「だ」で文の完結はできないため、「し」節内に含まれる要素に「し」を付加していると考えられる。この点は更なる検証を必要とする。

7.5.2 「から」と「し」の語用論的機能

白川(2009)の研究では「から」の後件には、聞き手への何らかの行為を要求する表現がくるとしているが、比較してみると以下のようなになる。

(222) 大事なことだから、良く聞け。(命令)

(223)? 大事なことだし、良く聞け

「から」の場合、前件だけでも後件は「し」の場合より推論しやすい。後件が「要求」などを表す場合下記の例でみる。

(224) 大事な事だから。

(225) 大事な事だし。

「し」の場合も並列の用法から、後件には並列や、発話内力を持っている文が来ることも可能ではある。しかし「から」の場合の方が、確定的な理由を挙げ、その理由から後件で何らかの行為要求をする場合に適していると言える。「から」の場合は後件に「忘れないでください。」など「行為要求文」が類推しやすいと言える。

下記例(148)も「し」の場合、行為要求の文も推論可能ではあるが、「から」を使用する方例(148)'が後件に「もう言うな」などの禁止や命令などの行為要求の文が類推しやすい。

⁵³ 「から」の場合も「～だから」は可能である。

「し」の場合、話し手が相手の認識に対して異なる判断を示すことは考えられるが、「から」のような明確な行為要求は類推しづらい。

(148)

ロペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？ 泣いてないし。(?) (紙兎ロペ「感動大作」) (再掲)

(148)'

ロペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？ 泣いてないから。

次に下記の例で冒頭で表出する「し」を「から」に変えてみると「から」でも置きかえられる。これは、先行文脈が無く、聞き手への働きかけと言うより宣言するような場合で話し手の考えを独断的に述べる場合は「し」と「から」は適していると言える。

(226)

牧野： じゃ、俺、あっち、行っとくし。

畑中： おれ、ここでいいっすか。

(226)'

牧野： じゃ、俺、あっち、行っとくから。

畑中： おれ、ここでいいっすか。

また、下記のような例の場合「し」も「から」も使用できる。「し」の場合、複数の理由も潜在的に考えられる。「から」の場合、複数の理由ではなく、「雨が降っている」という確定的な根拠が後件の行為要求と結び付いていると言える。「し」と「から」の異なりは、「し」はまだ根拠が続いている可能性もあるため、聞き手はその判断に迷うかもしれないが、「から」は確定的なため、「行かない」という判断が聞き手にとって理解しやすいと言える。

(227)

A： 買い物に行かない？

B：a 今日は、雨が降っているし。(寒いし、風も冷たいし・・・出かけたくない。)

B：b 今日は雨が降っているから。

「から」の場合、「し」と同じく、知識管理は話し手が行う。「から」は「聞き手への受容要求」が強い。話し手が、これが確固たる理由・根拠と考えるものを聞き手に強く主張することにより、話し手に何らかの行動要求を促す。また、下記のような同一認識上では「から」は使用が不自然である。

(228)

A : これいいね。

B : ? うん、いいから。

うん、いいし。

(229)

A : これまずいいね。

B : いや、おいしいから。

いや、おいしいし。

(230) ちょっと、そこまで出かけてきますから。(あとはよろしくお願いします。)

(231) ちょっと、そこまで出かけてきますし・・・。

(232) 冷蔵庫に果物が入っていますから。(食べてください。)

(233) 冷蔵庫に果物が入っていますし・・・。

上記例(230)(232)では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。この場合、「から」は「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」マーカー」として機能していると言える。「から」はまた、「話者が排他的に管理する準備があることを示す命題に付くマーカー」であると言える。従って「から」は「知識管理は話し手が行う」と考えられる。これらの点については「し」と同じであるが、「し」と「から」の語用論的機能の異なりは、上記例(230)(232)を見ると、「から」の場合は後件がなくとも、話し手の意向が類推されやすい。しかし「し」の場合は、「から」と同じようには類推できない。「し」は本来、並列の用法であり、最近の打ち止めるような用法とは異なる場合、後件を婉曲に控えめに言外に響かせる用法も見られる。しかし「から」の表出していない後件は「よろしくお願いします。」「食べてください。」など、話し手の明確な要求が残っていると考えられる。

また、下記例では、高校生の言いさし文の発話が「し」を使用し(①②⑧)、老人の言いさし文が「から」を使用している(③④⑦)のが非常に興味深いデータである。

(212)

老人： いや、いや、ほんと、君らと会えて助かりました。どうもありがとう。

アキラ： 全然、方向一緒だし。①ついで。

ロペ： はい、じゃ、これ。(老人に買い物袋を渡す)

アキラ： じゃあな。じいさん。

老人： あっ、ちょっと待って。

アキラ： うん？

老人： はい、これ。

アキラ： いや、いいし。②

老人： いいから。③ちょっとしたお礼だから。④はい。

アキラ： えっ？チョコ？いや、いつもだったら、うれしいけど。

ロペ： 2月14日ですからね。⑤

アキラ： タイミングが・・・。

ロペ： そうですね。

アキラ： いや、ありがとう。来月3月14日、クッキー持ってくるから。⑥

老人： いや、そんな若い人が余計な気をつかなくていいですから。⑦

アキラ： いや、気つか、ルールだし。⑧

ロペ： そうっすね。

(再掲)

ただ、⑤は高校生の発話で「から」を使用しているが⑤は「ですから」と丁寧形に接続している。この発話者は「し」を使用している高校生(先輩)とは、また別の後輩の高校生である。この高校生の発話においては、「敬体」で先輩と話す特徴を持つ。

このデータから、「から」使用の言いさし文が若い世代で「し」に変わってきているのではないかと考えられる。つまり、若い世代では「から」は後件に強く話し手の意向を残すため、「し」の使用の方を選択し、突き放し、相手への受容は考慮しない伝達態度を示す「し」の使用を選好しているのではないかと考えられる。第5章の例(151)で述べたように「し」の言いさし文は、「独白」で使用されている。その「独白性」からも、「し」と「から」の異なりがわかる。「ドライ」な感じは「から」より「し」の方が効果を持つと言える。

前述したように、加藤(2006)の接続助詞の分類で「から」は条件接続で、前件を条件として後件に帰結を述べ、前件と後件の論理関係は緊密である。つまり、「から」は二つの命題

の論理関係に関わるものである。「から」は論理関係標示の中で「原因・結果」関係を示す。一方「し」は前件に後件が付加されていると見る列叙接続であり、前件も後件も自立性が高く、意味的に依存し合わない関係となる。また「し」は「から」とは異なり、論理関係ではなく、二つの事態の捉え方に関わるものと言える。また「し」は事態関係認識標示の中の「並立接続」を表す接続助詞に分類されている。接続要素で「から」と「し」を比較すると、聞き手への働きかけに関係する、命令形、意志形、疑問形などが両者とも接続できなかったが、「～から」の後件には「依頼・命令・推量・意志・質問」などの表現が来ることが多いことは、先行研究からも明らかである。

- (234) 皿が汚れている { ? し ・ ○ から } 取り替えてください。(行為をする人→相手)
(235) テレビの音がうるさい { ? し ・ ○ から } 音を小さくしろ。(行為をする人→相手)
(236) もう時間が遅いです { ○ し ・ ○ から }、そろそろ失礼します。(行為をする人→話者)
(237) 皿が汚れている { ○ し ・ ○ から } 取り替えるとするか。(行為をする人→話者)
(238) テレビの音がうるさい { ○ し ・ ○ から } 音を小さくするね。(行為をする人→話者)

上記の例からも、「から」の場合は、条件接続で、前件が後件の理由となり、後件はその帰結となる論理関係を示す接続であるため、前件と後件の結びつきが強い。話し手は、確固たる理由の前件をあげ、後件には相手への依頼・要求などが来やすいと言える。一方「し」は先にも述べたが、前件と後件は、話し手が認識した事実であり、それらを繋ぐ接続関係である。話し手の一方的な認識を示す場合「し」は成立するが、上記例の「から」のように相手への、依頼、命令を示すものになると「から」に比べ自然ではない。「から」は相手への受容要求が強いと思われる。受容したかどうか、その結果まで関心があると考えるが、一方「し」は相手との認識の異なりを示すことができるが、受容要求については、結果までは考慮しないが、効果は示せるものと思われる。つまり「し」は「から」ほど受容要求は強くないため、後件に相手への依頼、命令が来ると「から」に比べ自然ではないと。上記例(210)の「から」の言いさし文を、若い世代は「し」を使用していると考えられるのは、これらのことも関係するのではないかとと思われる。「から」では結びつきが強く、「言いさし文」にしても表出していない後件に帰結の部分の可能性が残り、その部分を暗示させる効果まで「から」の言いさし文が持っているのではないかとと思われる。「から」は、原因・帰結としての「前件」「後件」の結びつきが強く、後件には行為要求文などの可能性も考えられるため、聞き手への受容要求も強く、「し」のように言い放って、後は考慮しない、ドライな感じが「から」では、表せないのではないかと考える。「し」は若い世代にとって、「から」の言いさし文とは異なった、話し手の敢えて突き放すドライな態度を示す効果を持つと考える。し

かし、これには、通時的な分析と数量的な分析、また使用動機の面から更なる検証を要するため、今後の課題とする。

7.6 「ので」の意味用法と接続要素

安田章(1977:331, 332)では、「接続助詞」の中で「ので」について述べている。

「ので」の歴史的変遷について「ノデの前段階、デ「ものを申すぞくたびれた」(『大文典』)がある。この「デ」は、連体形に直接していた格助詞「デ」が、準体助詞「ノ」を介して接続助詞に発展したとしている。

「ノデ」は、「元禄頃になって現れる」とし、「しかし、江戸時代前期では、未だ格助詞の段階に止まっていたのであろう、「ノデ」の出現以後も「デ・ノデ」も共存することも少なくないとしている。さらに、中期以後接続助詞への胎動が感ぜられるとして「～と思へば。」を「思うので」と対訳している例をあげている。また、「後期でも用例は多くなく、その発達は明治時代以後のことに属すると思われるが、その背景には、「から、ところ」などの干渉があったかもしれない」としている。

次に田中章夫(1977:412, 413)では、「ので」を因果関係を表す接続助詞に分類し、原因・理由を導く代表的なものとして「ので」と「から」をあげている。

(239) 雨が降ったので苔が大変綺麗です。

(240) 時間がないから急げ。

「ので」と「から」の違いについては、「ので」の後には、どちらかという、客観的な描写など、平叙文的なものがきやすく、「から」の後には、命令、禁止、質問等、相手への働きかけの強い主観的な表現がきやすいとし、「ので」の方が柔らかい語感を持ち、「から」の方が原因・理由を強く主張する響きを持っているとしている。

次に、森田(1980:110-112)では、「から」の項に、関連語として「ので」をあげている。「ので」は「のだ」の中止法に由来するため、はっきりとした断定を行う条件形式であるとし、話し手の主観以前にすでに存在する因果関係で、その全体を一つの事態として客観的に把握し叙述する形式でもあると述べている。また「ので」は確実な因果関係を客観的に捉え、叙述する条件形式であるから、不確かなことや、話し手の心の状態は表れにくいとしている。

次に、南(1993:74-120)の従属句の分類では、「ので」はB類に分類され、「から」はC類に分類されている。「ので」節には、テンス、アスペクトは内部に入ることが可能であるが、「~だろう」「~まい」などは入らない。しかし「~かもしれない」「~にちがいない」や判断を表すモダリティは入ることができる。

- (241)* 太郎も行くだろうので、楽しくなります。
- (242) 太郎も行くかもしれないので、伝えておきます。
- (243) 太郎も行くにちがいないので、伝えておきます。
- (244) 太郎も行くべきなので、伝えておきます。

「ので」の後ろに命令形がくる場合は自然ではない。しかし後件が「~てください」などになると「ので」でも許容できる。後件が命令形の場合は「から」を用いると自然になる。

- (245) ?危ないので、やめろ。
- (246) 危ないので、やめてください。
- (247) 危ないから、やめろ。

「ので」は話し言葉で「んで」になることがある。

- (248) 私も行くんで、待っていてください。

次に、田中(1977:412-413)でも触れているが、下記のような説明的な性格の強い「ので」の例は「から」に置き換えられない。

- (249) 立場が違うというので、発言を控えているのかもしれない。
- (250) ?立場が違うというから、発言を控えているのかもしれない。

次に「ので」の接続要素を見るが、「から」の接続とどのような違いがあるかを下記「表15」でみる。

表 15. 「ので」と「から」の接続要素

	名詞	名詞＋コピ ユラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ ⁵⁴	高い	静かだ ⁵⁵	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
ので	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	○
から	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

接続する要素でみると下記において、「ので」は「意向形」「て形」「命令形」「疑問形」など、聞き手への関係には使用できない。「から」との比較の場合、「終止形接続」と「連体形接続」の違いがあるが、あとは「名詞に直接接続しない」「意向形」「命令形」「て形」「疑問形」に接続できない点は「から」と同じである。しかし「～から節」の後には「働きかけ」の「命令・禁止」などが来ることが多く、「～ので」の後件には特に丁寧な「依頼」などの表現がくることが多い。

7.6.1 「ので」と言いさし文

「ので」は言いさし文にした場合、「から」のように使用できるだろうか。実際は「ので」で終わることも可能であるが、「から」のように頻繁には出てこない。これはどのような理由によるのか分析する。下記の実例の例では「から」を使用している。「から」の部分「ので」で言い換えると全て言い換えが効くのかを確認する。

下記から「から」の代わりに使用して自然な場合と、自然ではない場合がある。「ので」は敬体に接続は可能だし、話し言葉では「んで」になることもあるが、先の例(210)では「から」を使用した「言いさし文」であるが、実際には「ので」の使用は一度も見られない。全て「から」を使用している。

(251) ① いいから。→?いいので。

⁵⁴ 「学生だ」は「学生なので」と活用した場合は、接続することができる。

⁵⁵ 「静かだ」は「静かなので」と活用した場合は、接続することができる。

(252) ③ 2月14日ですからね。→2月14日ですのでね。

(253) ⑤ いや、若い人がそんな気を使わなくてもいいですから。

→ ? いや、若い人がそんな気を使わなくてもいいですので。

まず、上記例で「から」を「ので」に変えると不自然な場合をみる。①は「いいから」は「いや」を入れて相手の発話内容を否定する内容である。この場合、「から」は主張を強く打ち出すときに適切であるが、「ので」を使用すると「否定」の意味が弱まると考えられる。尾谷(2015:183-203)では、接続助詞「ので」から、接続詞「なので」への使用について取り上げているが、その中で、「だから」も取り上げ、両者の異なりについては、「「だから」は理由をゴり押しする感じがする」「「ですから」は畏まりすぎるか気取りすぎる」と述べる先行研究をあげている。またポライトネスの観点からは「なので」は対人関係を円滑にするための言語表現として機能していることを主張している。これらは接続詞としての機能について述べているが、接続助詞「から」、「ので」との関係も深いと思われるため、ここで取り上げる。これらのことから「ので」は「から」に比べて丁寧な文体や内容に現れるとみられる。この場合の「いいので」はやはり自然ではない。また、「いいから」は、あまり丁寧な発話には取れない。目上から目下への発話とか、ある程度親しい関係である場合の発話であると思われる。この例でも近所の顔なじみの「老人」と「高校生」の会話である。「ので」は「から」に比べて丁寧な印象を与えることもあり、この場合「いい」と「ので」は組み合わせとしてもそぐわないものである。「いいから」は「いいから、いいから。」のように慣用的な使用になっているとも言ってよい。この場合も「いいので、いいので。」もやはりおかしい。

また、③、⑤の例は、前接に「です」が来ている。③の場合は「ので」でも言えるとも思うが、「2月14日なので」の方が自然である。友達や知り合いに対してこの場合の「ですので。」は丁寧すぎる感がある。⑤の場合、「ので節」は敬体につくことは可能である。「ですので」や「ますので」となることもあるが、中俣(2014:196)では、「ので」の文法コロケーションを調べているが、それによると「ですので」の出現数は高くないことを示している。

「ので」は「ますので」が動詞の総出現数の約20%をしめているが、「ですので」の出現数は高くないとしている。しかし、「ので」の後ろに「ね」の助詞が後接した場合は「ですのでね」となり、「ですので」のまま終わるよりは自然な感じになる。この辺は個人差も考えられる。「ですので。」で後件が表出していない場合は特に「ので」で終わるのは、まだ後件を言わなければ(聞かなければ)何か情報が欠落している感じを受ける。ここに「ので節」の特徴があると考えられる。次に「ので」が「言いさし文」になりにくい理由を考察する。

7.6.2 「ので」が言いさし文になりにくい理由

「ので」は「から」に比べ、言いさし文に使用されているデータは少ないと言ってよい。「言いさし文」の形で「ので」で終わる文が少ないその理由を考えると、統語的に前件と後件の独立性が「ので」の場合は弱いといえる。「ので」節は従属度が高い。南(1993:74)の分類では、B類に分類されている。前件と後件のはっきりとした切れ目が「ので」の場合は見えない。一方「から」はC類に分類され、節の独立性が「ので」に比べ、高いとされている。本来、独立した二つの節を話し手の主観で結びつけているものが「から」であり、前件と後件の間には明確な切れ目があるとみられる。また、「から」の場合は、下記(256)の例を下記(255)のように「～のは～からだ」の強調構文にしてみると、その切れ目がはっきりする。この場合例(256)のように「ので」では成立しない。これは、理由と結果の関係を明確に示す場合に用いられ、明確な切れ目もある。つまり、「から」は後件が表出されていなくても、前件だけで、伝えたい内容を伝えることは可能であると考えられる。

南(1993:74-120)の分類でいうとやはり独立性が強い節が、「言いさし文」になりやすいものとする。A類の「ながら」や「つつ」は「言いさし文」では出てきづらい。

次に、「ので」は「から」と比較するとより説明的であると思われる。どちらかという、後件に重きがあり、その説明を前件で述べるのが「ので」の表現である。説明を要する場合、全体を一つの事柄として捉え、主節の原因・理由または根拠として、前件を述べるのである。「ので」は前件と後件で一つの事柄を表すものであり、句の切れ目が弱い。従って、前件のみで終わるとなると、「ので」の説明的な機能を果たさないまま、途中で終わることになり、このことから「言いさし文」には、「ので」は表出しづらいと考える。

「～のは～からだ」の強調構文の場合、下記例のように「ので」は使用できない。

(254)

ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえから。

(255) 目が赤いのは、昨日、寝てないからだ。

(256) *目が赤いのは、昨日、寝てないのでだ。

7.6.3 「し」との比較

最初に、「ので」と「し」を比較する上で、それぞれの接続要素を下記の「表 16」で確認する。

表 16. 「ので」と「し」の接続要素

	名詞	名詞＋コピュラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意志形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
ので	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	○
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

「ので」と「し」の接続要素をみると、「し」は「名詞だ＋し」になるが、「ので」の場合は「名詞なので」になり、終止形接続と連体形接続の異なりがある。また、先にも「ので」の統語的特徴で述べたように南(1993:74-120)の分類では、「ので」はB類に分類され、「し」はC類に分類されている。従って、「し」は「ので」より、従属節の独立性が高いと言える。

7.7 「ので」の語用論的機能

談話標識としての「ので」の機能は、発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示し、談話管理は話し手が行う。「聞き手への受容要求」は「から」に比べるとそれほど強くない。話し手の理由・根拠と考えるものを聞き手に丁寧に柔らかく説明する機能を持つ。周りとの同一認識上で使用しにくい。「から」と「ので」の二つは同じ接続助詞であり、論理関係標示接続である。

下記(259)のような同一認識上では「ので」は使用が不自然であるが、反対の認識を示す場合は使用できる。

(257)

A : これいいね。

B : ? うん、いいので。

(258)

A : これまずいいね。

B : いや、おいしいので。

(259) ちょっと、そこまで出かけてきますので。

(260) 冷蔵庫に果物が入っていますので。(食べてください。)

他の節でも触れているが、上記例(259)(260)では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。この場合、「ので」は「話者が排他的に管理する準備があることを示す命題に付くマーカー」であると言える。従って「ので」は「知識管理は話し手が行う」と考えられる。

「ので」はまた、下記のような丁寧な依頼文や謝罪などに多く使用されるといってよい。これら「ので」が使用されている場合は製品についての注意文や、謝罪に関するものなどが多くある。内容的には「～しないでくれ」など直接呼びかけた方が効果が大きいと思われるものである。しかし、「ので」を敢えて使用し、「ので」が持つ説明的な機能を利用し、「～しないでくれ」という主張を弱めているものとみられる。客に直接強く訴えるのは、売主側としてはなるべく控えるべきであると認識し、「ので」の持つ丁寧さを利用し、婉曲に間接的に、しかし、より効果的に聞き手に示している。つまり、「ので」は話し手の主張を間接的に婉曲に聞き手に述べようとする「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」マーカーとして機能しているものとする。「から」は、話し手の感情を主観的に強く訴える場合に適しているが、「から」では伝えられない緩和、間接化の効果を「ので」は持っているものとみる⁵⁶。

(261) この電池を他のものに変えますと危険性を伴いますので、くれぐれもご注意ください。

7.7.1 「ので」と「し」の語用論的機能の比較

「ので」と「し」の「語用論的機能」においては、下記(264)のような同一認識上では「し」は使用できないことはないが、「ので」は「使用が不自然であるが、(265)のように、反対の認識を示す場合は使用できる。

(262)

A : これいいね。

⁵⁶ 「ので」の間接化については、ポライトネス理論の「ネガティブ・ポライトネスストラテジー」の「hedge」として使用されているものとする。

B : ? うん、いいので。

うん、いいし。

(263)

A : これまずいね。

B : いや、おいしいので。

いや、おいしいし。

(264) ちょっと、そこまで出かけてきますので。(よろしくお願ひします。)

ちょっと、そこまで出かけてきますし。

(265) 冷蔵庫に果物が入っていますので。(食べてください。)

冷蔵庫に果物が入っていますし。

上記例(264)(265)では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。この場合、「ので」は「話者が排他的に知識管理する準備があることを示す命題に付くマーカー」であると言える。従って「ので」は「知識管理は話し手が行う」と考えられる。この「ので」を「し」に言い換えた場合、「から」の時と同じように、後件は「ので」の方が類推しやすいと言える。これは、論理関係標示の「ので」のため、前件と後件の因果関係は強固であり、類推しやすいものと考えられる。

また、下記の例で冒頭で表出する「し」を「ので」に変えてみると「ので」でも置きかえられる。これは、先行文脈が無く、聞き手への働きかけと言うより宣言するような場合で話し手の考えを独断的に述べる場合は「し」と同じように「ので」も適していると言える。しかし、この例では使用は可能ではあるが、友達同士の会話であり、牧野は畑中の先輩のため、畑中は牧野に対して、「ネオ敬語⁵⁷」「っす」を使用しており、「ので」は後輩の畑中への使用としては、丁寧すぎるように思われる。

【パチンコ】「紙兎ロペ」

【鹿のキャラクター畑中のツノにゴム紐をかけ、アキラ先輩はそのゴム紐を遠くへ引っ張って行って、パチンコの要領で畑中自体を飛ばそうとしている】

(266)

⁵⁷ 詳しくは呉(2015:151-182)を参照。

牧野： じゃ、俺、あっち、行つとくし。

畑中： おれ、ここでいいっすか。

(266)'

牧野： じゃ、俺、あっち、行つとくので。

畑中： おれ、ここでいいっすか。

【どちらにしようかな】「紙兎ロペ」

(飲料水の自動販売機に向かって)

(267)

アキラ先輩： どれにしようかな。天の神様の言う通り。野球するなら～。

ロ ペ： アッハッハ (笑)、いや、先輩、それそなんでした？

アキラ先輩： えっ？

ロ ペ： どちらにしようかな？天の神様の言う通り。なのなのな。鉄砲撃ってバンバンバン、みたいな・・・。

アキラ先輩： なのなのなって？

ロ ペ： えっ？こんなんでしたって。

アキラ先輩： えっ？ ちげえし。①

なあ、牧野？

牧 野： ああ、俺も、野球するなら～。

ロ ペ： えっ？マジっすか？

アキラ先輩・牧野： (一緒に) 野球するなら～ (中略) (最後に) あっぷっぷ。

アキラ先輩： えっ？ あっぷっぷ？

三 人： (笑い)

アキラ先輩： じゃ、もう、俺は俺のやつでやるし。②

アキラ先輩： どれにしようかな～ (中略) (最後に) ダメ。

ロ ペ： 先輩、ちよいたししてるんじゃないですか。

上記例①②を「ので」で言い換えてみると、下記のようになる。

(268)

アキラ先輩： えっ？ ちげえし①。

アキラ先輩： ?えっ？ 違うので①。

(269)

アキラ先輩： じゃ、もう、俺は俺のやつでやるし②。

アキラ先輩： ?じゃ、もう、俺は俺のやつでやるので②。

①は、明らかにおかしい。「し」での相手の認識を否定する態度が「ので」では、伝わりにくい。「し」は強く否定し、言い放つような話し手の態度を示すことができる。

しかも「ので」の場合は、表出していない後件が丁寧なものであるような印象さえ与える。つまり、「ので」のあとに、説明する後件がまだ続くような機能を「ので」は持っていると考えられる。これは「ので」の言いさし文がもともと少ないこととも関係していると考えられる。

7.8 本章のまとめ

統語的特徴の上では「から」は接続助詞の論理関係標示（条件接続）に分類され、「原因結果関係」を表し、「し」は事態関係認識標示（列叙接続）であり、「並列接続」を表す接続助詞である。接続要素の面から、「から」と「し」は南の分類でも同じC類に分類されていることからほとんど同じである。「から」は「～のは～からだ」の強調構文で言えることから、理由を確定して強調する場合には「から」が適している。「から」で確定的な理由をあげ、その理由から、後件で何らかの行為要求をする場合に適している。また、「～からだ。」「～だし。」の形式を見ると、「から」での「言いさし文」は「～からだ」から「だ」を省略したものとも考えられ、「し」の「言いさし文」は「～だ」に「し」を付加した「～だし」とも考えられるが、この点は更なる検証を要する。

談話標識としての「から」の機能は、発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示し、知識管理は話し手が行い、聞き手への受容要求が強い。「から」は確固たる根拠を示し、聞き手への行為要求を促す場合に使用できる。周りとの同一認識状況では使用しにくい。この二つは同じ接続助詞であるが、「から」は論理関係標示接続であり、「し」は事態関係認識標示接続である。この違いから、「から」は、前件で確実な根拠・理由となり得るものをあげ、後件への行動を促す機能を持つ。一方「し」は論理関係ではなく、話し手が認識したまとまりとなる事実をつなぐものである。「言いさし」になってもこれらは二つの違いになって表れているものとする。若い世代で「し」の「言いさし文」が選好されるのは、後件に強い意向を残す「から」の因果関係及び受容要求の強さではなく、事実関係をつなぐ「し」で「独白」にも使用されることから、突き放したような、ドライさを示す効果を持つためと考えられる。この点は、さらなる検証を要する。

次に、「ので」は「から」と同じく条件接続で論理関係を標示し、原因結果を表す接続助詞である。「ので」と「から」の違いについては、「ので」の後には、どちらかという、客

観的な描写など、平叙文的なものがきやすく、「から」の後には、命令、禁止、質問等、相手への働きかけの強い主観的な表現がきやすいとし、「ので」の方が柔らかい語感を持ち、「から」の方が原因・理由を強く主張する響きを持っているとしている。また、南(1993:74-120)の分類では、「ので」はB類に分類され、「から」はC類に分類されている。「ので」節には、テンス、アスペクトは内部に入ることが可能であるが、「～だろう」「～まい」などは入らない。しかし「～かもしれない」「～にちがいない」や判断を表すモダリティは入ることができる。また、接続要素では「から」は終止形接続であるが、「ので」は連体形接続の異なりがある。また「から」は「からだ」の形で終われるが「ので」は「のでだ」の形では終われない違いを持つ。

次に、語用論的機能として談話標識の「ので」の機能は、先ず、「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」を示し、知識管理は話し手が行う。聞き手への受容要求は「から」に比べるとそれほど強くない。話し手の理由・根拠と考えるものを聞き手に丁寧に柔らかく説明する機能を持つ。周りとの同一認識上で使用しにくい。

また「し」と「ので」を比較すると、「し」は、南の分類ではC類で、「し」は従属句の独立性の高さから言いさし文になりやすいが「ので」はB類でもあるため、従属句の独立性を考えると「から」「し」に比べ「言いさし文」としての使用は少ない。「ので」は前件と後件の結びつきが強い。前件と後件で、一つの因果関係を示していることの違いも「ので」の言いさし文としての少なさを示していると考えられる。

最後に、「ので」の語用論的機能として、「ので」は話し手の主張を間接的に婉曲に聞き手に述べようとする「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すマーカー」として機能していると分析した。

第8章 引用形式の言いさし化

「って」については、「し」と同じように言いさし文での使用が見られる。「って」の言いさし文では辞書記述においては「終助詞的用法」としているものが多い。本研究では、「って」は、確かに出現位置が終助詞と似ているが、「～ってね。」「～ってさ。」など「って」の後に「終助詞」をつけることも可能であるため、「終助詞」とは異なる機能を持つものと考えられる。「って」の基本は引用の用法であると考え、先行研究も概観し、「って」の統語的特徴と「言いさし文」での使用を分析し、最後に「し」との機能の比較を行う。

8.1 先行研究における「って」

「って」について、最初に、その出自を、辞書記述を含め、先行研究での記述を概観する。『大辞林』(第三版:1686)では、「とて」「(格助詞)と+(接続助詞)て」の転」として、「くだけた話言葉に用いられる」としている。『岩波国語辞典』(第七版新版:981,982)では「とて」の転用が崩れた形で固定化したものと記している。「って」の出自について、田中(1977:380,381)では、格助詞「と」の項目で、動作作用の内容を導く「と」として、「と違って」のくずれた形として「って」を挙げている。その例としては「僕は鈴木って言います」をあげ、この種の「と」「って」からは、「えっ?合格だって?」のような終助詞的な用法も生じてくると述べている。この動作・作用の内容や引用を示す「と」からは伝聞を示す「との」、例示に使われる「といった」などの慣用句も生じているとしている。

次に、内尾(1972:76)では、助詞の変遷について述べ、格助詞「と」の用法のうち、引用の「と」とそれから転用した「と言って」、「と違って」は、古くから現代に至るまであまり変化はないとしている。

次に、『新明解国語辞典』(第七版:1004)では「って」について、引用を示す格助詞「と」の変化「て」の強調表現と記し、「という」、「というのは」の圧縮表現と述べ、さらに、接続助詞的な用法では「とって」の圧縮表現、終助詞的に用いられるとして「～ということだ」の変化としている。これらの先行研究から、「って」は「とて」あるいは「と言って」のくだけた形と見ることはできるのではないかと考えるが、本論文は通時的な分析を目的とてはしていないため、これ以上「って」の出自及び歴史的変遷については深入りしないこととする。

次に、国立国語研究所による『現代語の助詞・助動詞』⁵⁸では、「って」について「格助詞」「係助詞」「終助詞」の3種類に分けその用法を述べている。各辞書記述においても「って」

⁵⁸ 国立国語研究所(1951:72-75)

は「格助詞」「接続助詞」「係助詞」「終助詞」などに分けている。しかし、「って」を終助詞とみるかどうかについては、議論すべき点がある。以下に「って」について「終助詞」の用法として扱っている国立国語研究所の先行研究と3種の辞書の記述をみる。

国立国語研究所(1951:72-75)の先行研究では、終助詞「って」の用法として

(1) 他人の話を紹介する

(270) よく似合うって、お母様が・・・。

(2) 人の言葉をオウム返しにくり返して反論する

(271) お前を助けたこの私を食べるんだって。

また、『明鏡国語辞典』(第2版:1148, 1149)では終助詞「って」の用法として

(1) 他人の話を引用紹介する。「～ということだ」

(272) 彼女も見たいって。

(2) (上昇のイントネーションを伴って) 他から聞いたことを相手に確認する意を表す。

(273) 結婚するんですって?

(3) (下降のイントネーションを伴って) 主張を強く伝える意味を表す。

(274) 大丈夫だって、きっと合格するって。

次に『三省堂国語辞典』(第七版:981, 982)では、終助詞「って」の用法として

(1) 反語を表す

(275) これが許せるかって。(=許せないぞ)

(2) なかなかわからない人に言う言葉「～というのに」

(276) 早くしろって。

次に『岩波国語辞典』(第七版新版:981, 982)では 終助詞のようにも使うとして、

(277) いいって、いいって。(=とも)

(278) 「お前にそんなことができるか?」「できますって。」

また、「連語」として

「と言って」の転として

(279) 是非とも見せろってきかないのよ。

次に、引用構文の「従属節って。」については岩男(2003:146-162)の研究がある。岩男は引用文の元話者が誰であるのかという条件に着目し、発話「従属節って。」を4つの用法に分類⁵⁹している。それらが、「引用表現」としての性質を保持しているかどうかを検証し、保持していないものは文末形式相当として定着しつつあるものとしている。岩男(2003:146-162)は「知識未定着用法」「押し付け用法」「表出用法⁶⁰」「伝聞用法」の4種に用法を分け、「伝聞用法」では「元話者」が「第三者」か「不特定」かによってさらに二つに分けている。この中で、引用構文の性質を保持しているのが「知識未定着用法」と「元話者が特定の第三者の伝聞用法」で、「押し付け用法」と「元話者が不特定の伝聞用法」はそれぞれ、「押し付ける」ため、「伝聞」するための文末形式として成立しつつあるとしてる。下記の「表 17」にその例を示しておく。

表 17. 岩男(2003)の「ッテ。」の用法のまとめ

知識未定着用法	元話者が特定の第三者の伝聞用法	押し付け用法	元話者が不特定の伝聞用法
引用文の発話が直前の聞き手のものである場合の用法 聞き手の態度に対する「非難」など	第三者の発話を聞き手に伝える発話 第三者からの情報を聞き手に取り継ぐ	話し手自身の発話を相手に押し付ける 自分の発話に「 <u>って</u> 」をつけ引用の形式にし、当該の発話は話し手の独りよがりの意見ではないことを表す	元話者が不特定の情報に引用のマーカ―「 <u>ッテ</u> 」をつけ、以前外部から得た情報を聞き手に明示 単に引用文の情報を聞き手に伝える
引用表現の性質の保持の有無	引用表現の性質の保持の有無	引用表現の性質の保持の有無	引用表現の性質の保持の有無
引用表現の性質を保持 引用構文の言いさ	引用表現の性質を保持 引用構文の言いさし	文末形式相当「押し付ける」ための形式として成立しつつある	文末形式相当「伝聞」するための形式として成立しつつある

⁵⁹ 詳しくは岩男(2003:146-162)を参照のこと。

⁶⁰ 岩男(2003)では、この用法について、判断を保留するとしているため、本稿でも同じように扱う。

し（文脈依存・省略・言外の意味の助けが必要）	（文脈依存・省略・言外の意味の助けが必要）	「って」形式を取り除いても「命題内容」は保持できる	「って」形式を取り除いても「命題内容」は保持できる
------------------------	-----------------------	---------------------------	---------------------------

次に、岩男(2003:146-162)が示す具体的例をみる。

【知識未定着用法】

(280) 山下：「俺はもうすぐクビになるらしいよ」

仲：「らしいよって？」

【元話者が特定の第三者】

(281) お母さんが、雨降るから傘持って行きなさいって。

【押し付け用法】

(282) まあ、黙って見てろって。

【元話者が不特定の第三者】

(283)

星野：「今年の風邪はしつこいってよ」

月元：「それ、毎年言っていない？」

これらの先行研究を次節で検討する。

8.2 先行研究の批判的検討

本研究では、「って」を「終助詞」または「終助詞的」としての用法とするのは、疑問である。なぜなら、上記の例に「私を食べるんだってね」「結婚するんですってね」「これが許せるかってさ」など、「って」の後に終助詞を付加することが可能であり、本論文では、「って」の言いさし文と「終助詞」とは異なる機能を持つものとみる。また、本論文では、「って」を、格助詞「と」から変遷したものと考えるが、「って」(の形式)あるいは「って」(の表現)と呼ぶ。

次に岩男(2003:146-162)の先行研究については、引用文の元話者が誰であるのかという条件に着目し、発話「従属節って。」を分類している点は参考になる。それらが、「引用表現」としての性質を保持しているかどうかを検証し、保持していないものは文末形式相当とし

で定着しつつあるものとしている。しかし、詳しく内容を見るといくつかの疑問点が生じてくる。まず、引用構文としての性質を残しており、引用構文の「言いさし」であるとする「知識未定着用法」と「元話者が特定の第三者の引用」は主節が省略されているとしている。そこで、岩男が述べるように主節の復元を試みてみると、「元話者が特定の第三者」は「お母さんが傘持っていけって（言っていた）⁶¹」と復元可能であるが、「知識未定着用法」の方は「らしいよ（？）（～って言っても）（～って何ですか）など」主節がいく通りか考えられ、復元は可能と言えるのだろうか。さらに、岩男(2003:146-162)が、引用構文としての性質を失い、文末形式相当になっているのが「押し付け用法」と「元話者が不特定の第三者の引用」であるとしている。「元話者が不特定の第三者の引用」の場合は「主節」の復元が「今年の風邪はしつこいって（一般的に言われている）」との復元が可能であるとも考える。したがって、本研究ではこれも引用の性質を留めているものとし、「引用」の用法に含めるものとする。そして、岩男が「知識未定着用法」として引用の性質が残っていたものは本研究では元話者の既知の発話を繰り返すことにより、話し手が元話者の発話を受容できない、納得できない態度を示すものとして扱う。岩男(2003:146-162)では、これらの用法において、語用論的解釈が生じる点には触れているが、それらの詳しい語用論的機能については目的が異なるとして分析していない。また、なぜ、「従属節って。」が単独で主節と同じように機能できるのかという点についても触れていない。

本研究では、なぜ、「従属節って」が単独で主節と同じように機能できるのか、及び「従属節って。」の語用論的機能について検証する。

8.3 引用辞の分析と考察

本研究研究対象の「～って。」の表現については、上記岩男(2003:146-162)の先行研究の意味用法も参考に、次の二つに大きくまとめることができる。岩男(2003:146-162)において、下記の例の①②の用法「知識未定着用法」と「押し付け用法」を本研究では「未受容非難」の「って」と名付ける。「伝聞用法」については、「伝え聞いたものを引用して述べる」ことであるとし、「引用」の「って」とする。本研究では「引用」の用法とは、「元話者の発話があること、既知の発話の引用であること。」、「未受容非難」の用法とは、基本的には、「話者自身の新しい発話であり、元話者の既知の発話の引用ではなく、話者の受容できない心的態度を示すもの」とする。「引用」の用法で岩男(2003:146-162)では、「知識未定着用法」としていたものは本研究では「引用」としたが「繰り返しの引用」として、他の引用とは区別する。この用法は下記のデータの①であるが、元話者の発話を繰り返す特徴を持っており、そ

⁶¹ () 内は、本論文著者が記入。

れに「って」を付加しているものである。これは、話者が元話者に対して、疑問や納得できない態度を示しているものとみて、未受容非難の用法に含める。これは引用の中でも、区別して考える必要があるものと思われる。以下のデータで「って」を分析する。①の発話「なのなのって？」は、岩男(2003)では「知識未定着用法」となっているが、元話者の既知の発話であることから、本研究では「繰り返しの引用・未受容非難①」の用法とする。次に②の発話「えっ？、こんなんでしたって。」は岩男(2003)では、「押しつけ用法」としていたが、元話者の発話がなく本研究では「未受容非難②」の用法とする。のちに岩男(2003:146-162)との先行研究との異なりを「表 18」にまとめる。

(284)

【どちらにしようかな】(紙兎ロペ)

ロ ペ：どちらにしようかな？天の神様の言う通り。なのなのな。鉄砲撃ってバンバンバン、みたいな・・・。

アキラ先輩：なのなのなって？①

ロ ペ：えっ？こんなんでしたって。②

アキラ先輩：えっ？ ちげえし。③(違うし)
なあ、牧野？

次に本研究における「～って」の用法について、前節で述べたものをまとめると以下のようになる。

(285)

1. 引用(～と言う)第三者伝聞→「彼が行く」

(1) 彼が行くって。元話者あり・既知の発話→引用

2. 繰り返しの引用・未受容非難①(相手の発話を受容できない話し手の意向を示す)

(2) なのなのなって。(元話者あり・既知の発話)

3. 未受容非難②(一度相手に伝えた情報を相手を受容していないことを非難する用法)

(3) これが許せるかって。(反語)押し付け→「これが許せるか」(発話話者自身)

(4) 泣いてないって。(否定)押し付け→「泣いてない」(発話話者自身)

(5) やめろって。(命令)押し付け→「やめろ」(発話話者自身)

(6) 大丈夫だって。きっと合格するって。(主張)押し付け→「きっと合格する」

(発話話者自身)

本研究の「引用」と「未受容非難」の用法を整理し直すと、「引用」は「伝え聞いたものを引用して述べるもの」であり、「って」のいわゆる「伝聞」の用法も「伝え聞いたものを引用して述べる」と捉えることができるため、引用の中に含まれるものとする。しかし、「未受容非難」の方は二つに分けることとする。「未受容非難①」の用法とは、基本的に「相手の発話を受容できない話し手の心的態度を相手の発話を繰り返すことにより示す」次に、未受容非難②の用法とは、「一度相手に伝えた情報を相手を受容していないことを非難する用法」とし、元話者の既知の発話ではない話者自身の発話である。また、上記2の「未受容非難②」の用法においては、「反語」「否定」「命令」「主張」などの意味合いが生じてくるものとする。これらの例では「って」形式を取り除いた「これが許せるか」「泣いてない」「やめろ」「きっと合格する」で命題内容を表すことができる。つまり、この「って」は「命題内容」に話し手の伝達態度を付加したものであるとみる。話し手は「って」を付加させることにより、話し手の「受容できない」態度を伝えているものと思われる。また、「って」の付加については、主節の復元が可能なものは、非従属化の省略型とみることができるが、日本語の「言いさし文」の場合、付加型も考えられるため、主節の復元ができないものは付加型と判断する一つの要因に成り得ると考える。下記「表 18」に岩男(2003)の先行研究と本研究とをまとめる。

表 18. 岩男(2003)の先行研究と本研究の「って」の用法の分類

岩男の 先行研究	知識未定着 用法	元話者が 特定の第三者 の伝聞用法	元話者が不特定 の第三者の伝聞 用法	押し付け用法
既知の発話の 引用	あり	あり	あり	なし
主節の復元	?	○	○	×
本研究の 「って」の用法	繰り返しの 引用・未受容 非難①	引用	引用	未受容非難②
「って」の付加 型	付加あり	付加なし	付加なし	付加あり

次に、下記の例で複文構造として、主節を含めて考えると例(286)は、話し手が入手した間接的な知識である。一方、下記例(286)' (286)'' も「言っている」を含めると第3者が述べた事実を間接的に述べているにすぎない。下記(288)' の例文のように、「って」は基本的には引用の「と」のくだけた言い方であり、全体を復元すると引用節を伴う(286)'' のような複文形式の文であるが、「言っている」の部分言わずに(286)は、従属節のみで言い終えている。複文形式の「～って言っている」から「言っている」の部分を省略し、「従属節って。」のみで終えるようになるのは「と (って)」が引用のマーカであり、従属節の独立性の高さからも容易だと言える。意味的重要性は前件の部分であり、「～言っている」は省略されたとしても意味は十分に伝わる。謂わば「～言っている」の部分は情報内容がなく、空情報といってよいような定形表現である。従って、「従属節って。」のみで終わる「非従属化」が生じ、従属節は独立し、主節と同じような働きをすることになる⁶²と考えられる。これらことから「従属節って。」で終わることは、(287)の過程をみると、明らかに容易であると思われる。

(286) 彼が行くって。

(286)' 彼が行くと (言っている)。

(286)'' 彼が行くって (言っている)。

(287)

彼が行くって言っている→彼が行くって (言っている) →彼が行くって (∅)

(288) 彼が来いって。

(289) 彼が来ようって。

(290) 彼が来るかって。

(291) 彼が来ますって。

(292) 彼が来るよって。

「引用」の「と」は、南 ((1993:74-120)の「従属句の分類」ではD類に分類される。

「って」は、「と」のくだけた表現であり、上記の例(288)～(292)のように「テンス分化」はもちろんのこと、「命令形」、「意志形」、「疑問形」「丁寧形」など全ての要素を節内に含むことができ、(292)の例のように終助詞も含むことができる。終助詞の多くは聞き手に対し

⁶² 加藤(2013)では「非節化 (declausalization)」を提案している。主節が機能辞となることで(主)節を放棄することを「非節化」と呼び、文全体では従属節が主節に格上げされ (=主節化)、複文であったものが単文となる事を指す。

て用いられるものであるため、聞き手への関わりが想定できる。また、D類の従属節は独立性が高く非従属化し「言いさし文」になる条件が整っているものとみられる。

次に、「って」の語用論的機能について分析する。

(293) A：今日は出かける？
B：今日は、寒いって。

(294) おい、はやくしろって。

例文(293) Bの「従属節って。」の場合は、元々「引用」の「と」のくだけた言い方でもあり、「～と伝えているのだ」「～ともう一度言っているのだ」と言う内容を述べており、相手が受容していない知識、分かっているなければいけないことが分かっているから、もう一度言うという話し手の態度を示しているものと思われる。言い換えると、「先行文脈を保持していない、踏まえていない」とする態度で、感情的に相手を非難する態度である。

従って、「従属節って。」は「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度を示す」談話標識としての機能を持つものであるとみることができる。また、「って」は先に述べた通り、「命令形」に接続することができる。「命令形」は話し手が優先的に命題内容にアクセスでき、知識管理⁶³を行える状況で使用されるものであり、従って「知識管理については、話し手が行っている」と考える。さらに、「従属節って。」は「命令形」につくことから、相手に対する「受容要求の態度」が強い。「相手に強く教える」、時には「私の言うことを受け入れて行動すべきだ」と命令する態度も示している。「従属節って。」については、「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示す」談話機能だけではなく、相手との認識の違いを表明しているため、「相手の発話の受容のあり方に関する情報を示す」機能を重ね持つものと考えられる。

また、下記例(295)は、言語的文脈が⁶⁴ある場合である。「だから」を「従属節って。」の前に伴うことも多い。

⁶³ 「知識管理」及び「排他的知識管理」とは加藤(2001)では「話題になっている知識や情報に発話者のみが優先的にアクセスできる状況にある」としている。

⁶⁴ 加藤(2004:11)では、「日常のやり取りで、前後の発話は、言語形式になっている文脈であり、これを言語的文脈と呼ぶ」としている。

- (295) A : 出かけようか。
B : 寒いでしょ。外
A : 楽しいから、行こうよ。
B : だから、寒い(嫌だ) って。

下記例(298)は、言語的文脈が無い場合である。この場合は世界知識と状況的文脈のみで判断していると言える。ここにおける世界知識とは、加藤(2004:14)で言う「会話のやり取りが始まる前からすでに頭の中に入っており、自分の身の周りの世界に関する知識」を指す。また、同じくここで言う「状況文脈」とは加藤(2004:15)で言う「発話の状況が関わっており、だれがどこでどういう場面で言ったのかといった、現場に居合わせれば、直接観察できる要素」とする。

- (296) (寝床にいる弟に兄が)

兄: おい、起きろって。(もう、毎朝起きる時間である)

また、「従属節って。」は下記の例のように周囲との同一認識状況では使用しにくいと言える。相手と認識が異なる場合は使用できる。

- (297) A : これ、おいしいね。
B : ?うん、おいしいって。

- (298) A : これ、おいしいね。
B : いや、まずいって。

8.4 「し」と「って」の比較

最初に、「し」と「って」の接続要素について異なりを下記「表 19」で見る。「し」は南(1993:74-120)の分類ではC類であるが、「って」は引用の「と」のくだけた表現でD類であるため、すべての要素が内部に入ることが可能になる。「って」の言いさし文を考えた場合「って」で終わることも容易であるとみられる。この他に、先にも触れたように「って」は「静かだよって。」のように「終助詞」も含むことができる。

表 19. 「し」と「って」の接続要素

	名詞	名詞＋コピ ユラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意志形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○
って	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

次に、会話データの中で、談話冒頭に出現する「従属節し。」で以下のような例もある。

(266)

牧野： じゃ、俺、あっち、行っとくし。

畑中： おれ、ここでいいっすか。 [フジテレビ放送：(紙兎ロペ「パチンコ」)]

(再掲)

(299)

(a)： じゃ、俺、あっち、行っとくし。

(b)： ?じゃ、俺、あっち、行っとくって。

上記例(266)のように談話の冒頭に出てくる場合、先行文脈が無い場合である。この状況の場合は(299)(a)のように「従属節し。」では言えるが、(299)(b)のように「従属節って。」に置き換えると意味的におかしくなる。これは、基本的には「従属節って。」が「先行文脈を踏まえて、それを理解するか、またはしていないこと」に対して話し手が述べる「発話の態度を示す機能」を持つからであると考えられる。「従属節って。」は基本的に「一度述べられた情報について、もう一度言う。」と言う態度を示す。聞き手にとっては、既知か未知の情報かはわからないが、話し手にとっては既知の情報である。話し手と聞き手双方の認識に相違がみられコミュニケーションが不調の場合に使用される。一方「従属節し。」は先行文脈が無い場合でも、「自分の判断を述べる」のに使用するものであり、聞き手に対して、話し手が新しいと考える情報を示すことができると考える。

(300)

- (a) : いや、ごちゃごちゃ言ってるのは、お前だけだし。
(b) : いや、ごちゃごちゃ言ってるのは、お前だけだって。

(301)

- (a) : いや、毎年言ってるけど、蚊は、刺されるだし。
(b) : いや、毎年言ってるけど、蚊は、刺されるだって。

(302)

- (a) : 英語だと「モスキートバイト」ですし。
(b) : 英語だと「モスキートバイト」ですって⁶⁵。

上記の例(300)(301)(302)(a)では下線部分に「従属節し。」が使用されている。この「し」を(b)の「って」に置き換えることも可能である。話し手は相手に関わりを持つ「従属節って。」を使用することも可能であるが、それを使用せず、「従属節し。」を使用している。「従属節し。」の場合は「相手と認識が異なるため認識を改めろ」と認識要求を行っているが、相手に対する「受容要求」において「し」の持つ「独白性」からも、その結果までは関心が無く、「自分の考え」をただ主張する態度であり、相手と議論するまでもないとの突き放した態度を示すために、「従属節し。」が使用されているものと思われる。一方、「従属節って。」では「受容要求」が強いため、「説明する」などの状況が加わることも考えられ、却って反論を導きやすいとも言える。(302)(a)の「丁寧形+し」「ですし。」と「丁寧形+って」に置き換えた(302)(b)の「ですって。」の場合、後輩が先輩に対しての発話であり、丁寧形に「って」が付いた「ですって。」の方が「受容に対しての要求性」が強いため、この場合は「従属節って。」を使用せず、「従属節し。」を使用していると考えられる。このような場合、「し」も「って」も従属節のみでの使用の方が、下記の例のように、後件を伴うことを想定した場合より、聞き手には配慮された表現になるものと思われる。この点についてはポライトネスとも関係してくるものと思われる。

(300)'

- (a) : いや、ごちゃごちゃ言ってるのは、お前だけだし。(他には誰もいない。)
(b) : いや、ごちゃごちゃ言ってるのは、お前だけだって。(前から言っている。)

⁶⁵ 用例出典「夏会議」参照

8.5 本章のまとめ

本研究の対象である「って」の用法については「引用」と「未受容非難①②」の用法があり、言語的文脈がある場合と無い場合がある。「従属節って。」は、本来、後件の「～って（言っている）。」の複文であるが、（ ）内の部分が言わば、空情報に近いものであるため、省略が容易であり、「従属節って。」は、従属節が主節化したものとも考えられる。また、「従属節って。」は聞き手の未受容の態度から、談話標識の機能としては「～と私はもう一度言っているのだ」と相手に非難の態度を表明し、相手に強く教える、命令の態度も示せると考える。

「し」と「って」の比較では、二つはもともと品詞の上でも異なる種類であったが、命題の後に出現するなどの共通性を持っており、長い運用の蓄積の中で同じような談話機能を持つようになったと考えられるが、この点は更なる検証を要する。

談話標識としての「従属節って。」の機能は先ず、「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」を示し、未受容非難の用法からも「相手の発話のあり方に関する情報を示す」ものである。また、知識管理については話し手が行う。発話内容については判断済みの態度を示し、相手が先行文脈を理解していないと、相手への受容要求を示し、聞き手や周りとの同一認識状況では使用しにくく、反論や非難に使用できる点では「し」と似ているが、「って」の場合は「受容要求」が強いが、「し」は、その独白性からも、相手に対する「受容要求」においてその結果までは関心が無く、「自分の考え」をただ主張する態度であり、相手と議論するまでもないとの突き放した態度を示す場合に使用されている点で「って」との異なりが見られる。

第9章 「し」による言いさし文と終助詞の対立

9.1 終助詞の区分と機能

何をして終助詞とするかは、難しい問題である。なぜなら、使用者において、その性別、地域差、世代差、個人差などがあり、その体系化は難しいと言ってよいと考える。

先行研究においては、佐治(1957:31)では、終助詞を第一類「聞き手めあて」と第二類「判断めあて」に分類している。以下にその分類を示す。

第一類

聞き手めあて

よ・な・ 話しかけ問いかける気持ち。

よ・や・え・い・ 呼び掛け・押し付ける気持ち。

さ・ 突っ放し放り出す気持ち。

第二類

判断めあて

- ・ 確かだという態度（聞き手に対する働きかけを含む）

わ・ 聞き手を押しのける。

とも・ 聞き手を受け入れる。

ぞ・ぜ・ 聞き手に押し付ける。

- ・ 不確かだという態度（聞き手に対する働きかけを含まない）

か・ 一般に不確か

次に、加藤(2006:124-126)では、「終助詞は「文末詞(SFP:sentence-final particle)」と呼ばれることもあるが」として、「日本語の品詞分類では、活用しない辞である助詞に含め終助詞として扱う」としている。そして、標準語の終助詞として以下の「表 20」のものをあげ、その機能を分類している。

表 20. 標準語の終助詞・機能分類

禁止	疑問	伝達態度
ナ	カ	ヨ・ネ・トモ・サ・ゼ・ワ・ゾ・ナ・ケ・ヤ

「よ」や「ね」については、伝達態度を表し、口語体で用いられるとしている。

下記「表 21」における終助詞どうしを組み合わせる際には、組み合わせの順序に制約があるとして以下のようにまとめている。この順序に逆行する組み合わせはないとしてい

る。

表 21. 終助詞・組み合わせ順序

1類	2類	3類
わ		な
か	よ	ね
とも		さ
な		ぜ

上記表では、組み合わせの順序で言うと、「わよ」「わね」「かね」「ともよ」「ともさ」はあるが、「ねよ」「さわ」などはなく、「わぜ」「よさ」「よぜ」のように、この順序でも存在しない組み合わせがあるとしている。なお、「ぜ」は他の助詞と組み合わせることがないとしている。

次に、田中(1997:427-453)では、歴史的な文法論の中で、終助詞と間投助詞の説明を以下のように紹介している。

「終助詞と間投助詞の区別を初めて立てたのは、山田孝雄であった」とし、山田文法では終助詞を「上接語への接続に一定の法則があり、陳述に関係して命令・希望・感動などの意味を表しつつ文を終始させる助詞」と定義し、間投助詞については、「終助詞が文末に限られるのに対して、使われる場所が比較的自由に換えられること、これを除いても文の成立に影響を及ぼさないこと」、橋本文法では「言い切りの文節につき、そこで、文が終止する助詞を終助詞」とし、間投助詞は「文節の終わりに付く助詞、すなわち、続く文節にも、切れる文節にも付き得る助詞と定義されている」としている。

同じく田中(1997:427-453)では、終助詞について、以下のようにまとめている。

文末のみに用いられる（文中には現れない）もの・・・終助詞

句末に用いられる（文中にも文末にも現れる）もの・・・間投助詞

文末にのみ用いられる終助詞（それが文末に付くことによって文表現を決定する助詞）として以下のものを挙げている。

- (303) 明日行きますか。(質問)
- (304) 急いで行きな。(命令)
- (305) 食べるな。(禁止)
- (306) いい天気ですなあ。(詠嘆)

また、次の例を挙げ、「の」はイントネーションの助けを借りて、初めて特定の文表現を成立させるものとしている。

文末イントネーションを伴うことによって、文表現の成立に参加するもの。

- (307) 学校に行くの。(平叙文) 文末下降調
- (308) 学校に行くの？(質問文) 文末上昇調
- (309) 学校に行くの！(命令文) 文末を強く発音

間投助詞については、フレーズやクローズの切れ目に自由に現れて、話し手の打ち解けた、親しみの情を文全体に盛り込んでいくものや、「や」のように呼びかけに用いられるものがある。

- (310) 今日ね、僕のさ、誕生日なんだよ。
- (311) 花子や、肩をたたいておくれ。

次に、上記の他にとして、本来は接続助詞等、本来は他の助詞であったもので、次第に終助詞、間投助詞になってきた類、あるいは助動詞、形式名詞など他の品詞に由来するものもあるとして、以下の例をあげている。

- (312) はい、これが良いと思いますけど。
- (313) もう、帰ろつと。
- (314) お母さんてば、聞いているの。
- (315) そこでだ、我々もだ、参加しなければならない。
- (316) だって、これじゃ、恥ずかしいもん。

この章における「よ」には、上記のように、終助詞と間投助詞があるとされてきた。学校文法では文末の位置に使用される助詞を「終助詞」、文節の切れ目に使用できる助詞を間投助詞とした。間投助詞が方言とも深く関係しているが、現代の標準語では「よ、ね、さ、な」が間投助詞としてあげられる。しかしこれらは、「終助詞」と同じく、文末にも使用できる。そのため、本論文では、終助詞であるとも判断し、両者を「終助詞」とみなすこととする⁶⁶。

⁶⁶ 加藤(2006:124)に、「間投助詞はおかずに、終助詞の一部に「文節末に現れる」間投用法がある」としている。本論文も同じ立場をとる。

現代の終助詞の「よ」は「し」と出現位置が似ており、節末に付く点でも「し」との共通性もあるが、辞書記述や幾つかの先行研究では「し」の言いさし文を「終助詞的用法」とするものもある。本研究では「～しよ。」とも使用することができることから終助詞「よ」と「し」の機能は異なるものと考え、この似ているとされる機能を調べることにより、「し」と「よ」の異なりがわかるものと考え「よ」を分析の対象とする。また、最後に「し」との比較を試みる。

9.2 「よ」の特徴の分析

終助詞の「よ」は「し」との共通性もあるがどのような異なりがみられるのか、まず「よ」自体の統語的特徴について分析を行う。

下記の「はあ？ 泣いてないし。」の「し」の位置に入れ替わる関係にある機能を持った要素を考える時、「よ・ね・さ・ぞ・わ・ぜ」などの終助詞があることがわかる。

この中で、「よ」、「ね」、「さ」は間投用法としても使用されているが、同じ間投用法においても違いがある。先に述べたように、地域差、男女差も、年齢差もあり、「よ」の場合は、下記例にあるように「ね」と「さ」と比較すると粗野な感じも与えるが、地域差も関係しており、その「粗野」という判断も難しいと言える。

(317) 俺よ、今度よ、東京へよ、行くし。

(318) 俺ね、今度ね、東京へね、行くし。

(319) 俺さ、今度さ、東京へさ、行くし。

(148)

ロペ : ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ : はあ？ 泣いてないし。 (紙兎ロペ「感動大作」) (再掲)

上記例の「アキラ」の発話「はあ？泣いてないし。」の「し」の部分に他の助詞が入るか単純に入れ替えてみると、以下のようにはできる。

(320)

a はあ？泣いてないし。

b はあ？泣いてないよ。

c はあ？泣いてないね。

d はあ？泣いてないさ。

- e はあ？泣いてないぞ。
- f はあ？泣いてないわ。
- g はあ？泣いてないぜ。
- h はあ？泣いてないしよ。
- i はあ？泣いてないしね。
- j はあ？泣いてないしさ。

しかし、これらは、単純な範列関係ではない。全てには触れないが、例えば、「よ」については、加藤(2006:125, 126)を参考にすると「よ」は「発話内容について、発話者が議論を請け負うことを表示し、結果的に強い主張を表したり、強い要求を表したりする。」次の章で扱う「ね」は「発話内容を発話者が独占的に請け負わないことを表示し、考えに変更の余地があることを意味する。その結果、同じ考えであることを確認したり、最終的な断定とせずに述べたりするとき用いる」「わ」は「女性が一般に用いる文末詞であり、「ぞ」はぞんざいなニュアンスを持ち、聞き手に対して明確な反応を要求する機能を持つ」としている。

さらに、これらは伝達モダリティの範疇に位置付けられている。モダリティの観点から益岡(1991:92-107)では「よ」と「ね」の分析を行っている。益岡(1991)では、話し手自身を持っている知識のあり方が聞き手の持っている知識のあり方と一致する方向にあるのか、対立する方向にあるのかという観点から終助詞「ね」と「よ」の分析をおこない、具体的には「ね」が「話し手の意向と聞き手の意向が調和する判断「一致型の判断」を示し、「よ」は両者の意向が対立する判断、「対立型の判断」としている。

次に、白川(1993:7-14)では、「働きかけ（命令系と依頼系の文）において「よ」がある場合とない場合でどのような意味の違いが生じるか」および「問いかけの文（「～か」で終わる文）において「よ」をつけると非文になるのはなぜか」という観点から分析をおこなっている。前者の場合、下記の例をあげ、「よ」がつかない(321)の場合より「よ」が付いた(322)の場合、懇願と言ってよいほどの強い依頼の気持ちが現れているとし、依頼のメッセージを相手に向けて発信するだけでなく、着信まで見届けようとする態度があるとしている。そして「よ」を使う動機には「自分の命令・依頼を相手が受け入れるかどうかは別問題として、ともかくも自分の発話を相手に確実に聞かせることによって自分の相手に対する希望を認識させることである」としている。以上のことから言い換えた助詞類は単純な範列関係ではないことがわかる。

(321) ながいきしてくださいぢ

(322) ながいきしてくださいよ。

終助詞の中でも特に「し」と同じように節末でも使用できる「よ⁶⁷」の持つ機能の特徴を分析する。

次に、「よ」は「し」と同じく節末で使用できることなど類似しているが、接続の上でどのような要素と結びつくのか「表 22」に示す。

表 22. 「よ」の接続要素

	名詞	名詞＋コピ ユラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意志形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読なまい
よ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

上記から、次のように「意志形」「命令形」「て形」「疑問形」「敬体」のような、聞き手に対して使用されるものには「よ」は使用できる。

(323) 早く言うかよ⁶⁸。

「よ」には、先に述べたように間投用法の「よ」もあるが、この「よ」の場合、方言の使用との関係もあり発話者の地域的属性に制約があると言える。また、「よ」は直接名詞に接続できる。

(324) 俺よ、今度よ、かなりよ、試験がよ、良くないと思うよ。

(325) 学生よ。

宮崎他(2002: 261-288)では、終助詞について、その基本的性質について述べ、分類を行

⁶⁷ 「ね」「さ」なども節末で使用できる。例) それは大きな問題だつてよ/ ね/ さ。

⁶⁸ 「早く言うかよ」は、話し手が「早くなど言わない」の修辭疑問の場合と、相手に対して、「そんな早い言い方をするのか」または「自分が考えたより、先行して早く言った」という場合と両方の意味で使用される場合には、使用可能であると考えられる。

っている。終助詞「よ」に付いては、「「よ」はその文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表し、基本的には聞き手に対して用いられ、聞き手が文の内容を認識すべきだと、話し手が考えていることが表される。」としている。また、「よ」については、独話での使用の可否については、用いられないとしている。これらのことから「よ」は基本的に話し手と聞き手の関係の中で、聞き手に対して用いられるのが「よ」の機能の特徴と思われる。

次に「し」と出現位置が似ている「よ」との談話標識としての機能について考える。加藤(2001:31-48)では終助詞の「ね」と「よ」の談話標識としての分析を行い、その中で、益岡(1991:92-107)の先行研究の分析について触れている。「対立型」と判断される「よ」について、「確かに、「違うよ」「おかしいよ」「そうじゃないよ」と聞き手の考えを否定する発話では「よ」が使われることが多く、「対立型」の判断は一見、妥当なように思われるが、しかし、これらは「ね」を用いることも可能である、従って、「対立型」であることが、「よ」の出現を自動的に予告するような関係にはなっていない。「対立型」の判断マーカであれば「よ」は聞き手に「同意する」ようなケースでは使用できないはずであるが、「よ」は「同意」に使用できる」として、下記の例をあげている。

(326) あなたのおっしゃるとおりですよ。私の理解不足でした。

(327) 君の言っていることは正しいよ。

そして、「よ」に関して、「「よ」は話題になっている命題内容について、排他的に知識管理する準備があることを示す談話標識だとみることができる」と述べている。

(328)

A : 買い物に行かない？

B : 今日は、寒いよ。

上記例(328)(B)の発話「今日は寒いよ。」の「よ」は「話し手(B)が「今日は寒い」という情報を、聞き手(A)より独占的に管理している状態を示している。その後、もし聞き手(A)から、「どのくらい寒いのか」などの説明を求められた場合、話し手(B)は、聞き手が納得するまで、説明を続けるという態度を示しているものとみられる。しかし、誘いに対する答え「行く」か「行かない」か、としてはまだ成立していないものとする。

(329)

A : これ、いいね。

B : うん、いいよ。

(330)

A : これまずいね。

B : いや、おいしいよ。

上記の例から、「よ」は話し手と聞き手の認識が同じ場合(329)の例でも、異なる場合(330)の例でも、使用できる。

(331) ちょっと、そこまで出かけてきますよ。

(332) 冷蔵庫の中に、果物が入っていますよ。

上記例では、話し手が自分の行動予定を告知する場合や、話し手のみが持っている情報を告知する場合である。たいていの場合、これらの例は聞き手が踏み込みにくい情報である。

「よ」は「話し手の発話に関する態度を示すマーカ―」として機能していると言える。「よ」は「話者が排他的に管理する準備があることを示す命題に付くマーカ―」である。従って「よ」は「知識管理は話し手が行う」ものであると判断する。

談話標識としての「よ」の機能をまとめると、先ず「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度」を示し、知識管理は話し手が行う。聞き手への受容要求を持つが、聞き手や周りとの同一認識状況で使用できると思われる。従って、議論の余地もあり、説明する態度や聞き手と話す態度を残しているものと思われる。

9.3 「し」と「よ」の機能比較

最初に、「よ」と「し」が同じく節末で使用できることなど類似しているが、接続の上でどのような異なりが見られるのか、下記「表 23」で「し」と「よ」を比較し、さらに詳しく分析する。

表 23. 「し」と「よ」の接続要素

	名詞	名詞＋コピュラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○
よ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

上記から、次のように「意向形」「命令形」「て形」「疑問形」のような、聞き手に対して使用されるものには「よ」は使用できるが「し」は接続できない。これらのことから、「よ」が、基本的には「聞き手」に対して用いられる点で、独白にも使用されている「し」との異なりがみられる。

次に、「よ」には、先に述べた間投用法の「よ」もあるが、

(333) 俺よ、今度よ、かなりよ、試験がよ、良くないと思うよ。

(334)* 俺し、今度し、かなりし、試験がし、良くないと思うし。

上記(333)の文末につく終助詞「よ」だけは(334)の例のように「し」に言い換えられるが、間投用法と考えられる「よ」は「し」では置き換えられない。しかしこの「よ」の場合、方言の使用との関係もあり発話者の地域的属性に制約があると言える。

「よ」は直接名詞に接続できるが、「し」は「だ」を伴わなければならない。

(335) 学生よ。

(336)* 学生し。

(337) 学生だよ。

(338) 学生だし。

「し」と「よ」は文末で使用できる点で、出現位置が似ていると言えるが、「よ」が聞き手に対して使用される「命令形」「疑問形」などに接続できる点で「し」との異なりが見ら

れた。次に「よ」と「し」の語用論的機能の比較について考える。

(143)

ロ ペ： あれ？先輩だめでした？

アキラ： いや、まあ、あれじゃねえ。

ロ ペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？泣いてねえし。

ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

ロ ペ： 目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

だいたいよ。あの演出、あざとって言うか、「はい、みなさん、泣くところですよ」的な？

俺とかよ、そういう、いかにもって言うのは、逆に冷めるタイプだし。

ロ ペ： はあ・・・。

(紙兎ロペ「感動大作」) (再掲)

(339)

ロ ペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？泣いてねえし。

アキラ： はあ？泣いてねえよ。

(340)

ロ ペ： 目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえよ。

(341)

ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

アキラ： ?昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえよ。

上記(339)と(340)の例の場合、「し」の使用を「よ」で置き換えることも可能である。この「よ」の使用の場合は、相手の発話内容についての否定の態度を示し、否定する発話内容

については優先的に話し手が管理できるため「よ」を使用していると考えられる。

さらに、相手への受容要求にも「し」より関心があると言える。「し」は独白にも使用される点で「よ」との異なりがみられる。相手からの説明の必要性があれば、「よ」は納得いくまで相手に説明する責任もある。しかし、例(341)の場合は、「おれ、ほら、あまり寝てねえよ。」と「し」から「よ」に置き換えると、文の意味はおかしい。これは、話し手が発話内容について、優先的に管理できるのが「よ」であり、「ほら、(さっき言ったけど)～」⁶⁹などの意味で相手が既にこの知識にアクセスできていると考えられる場合、「よ」を使用すると意味は奇妙になる。「し」の場合も知識管理は優先的であるが、自分と相手との関係には考慮せず、ただ自分の判断を述べているため「し」は使用できるものと思われる。

また、会話資料の中に、下記のような「しよ」の例もみられる。

(342)

アキラ先輩： 負けたの？

ロペ： いや、言っていないですか？

アキラ先輩： その、言っていないとか最悪。勝ちましたって言ってるみたいなもんだしよ。

(紙兎ロペ「録画」)

上記発話の 部分において、

(343) 勝ちましたって言ってるみたいなもんだしよ。は成り立つが、

(344)*勝ちましたって言ってるみたいなもんだよし。は成り立たない。

この理由としては、先の分析から、(343)は「し」で、話し手の結論を一方向的に述べ、「よ」で聞き手に対して発話内容の受容要求をしている。しかし(344)の方は接続の上からもおかしい文になるが、「よ」で聞き手に対する受容要求をしておきながら、受容要求には考慮しない「し」をつけると発話内容に対する整合性が保てないからだと考える。

9.4 「ね」の特徴の分析

「ね」は終助詞であり、「し」は接続助詞であるが、言いさし文の「し」については、先行研究や辞書記述において「終助詞的用法」とされる場合が多い。命題の後に現れるなど出現位置も「ね」と似ているが「～しね。」ともとも言えることから、終助詞の「ね」と「し」は本研究では機能が異なるものとするが、「ね」を調べることにより、「し」や他の「言いさ

⁶⁹ 「ほら、見てよ。」のような使用は可能である。これは「注意を向ける時使用する「ほら」」であり、用法が異なる。

し文」を作る助詞類の機能についてより詳しい検証ができると考え「ね」を研究の対象とする。また、前章で考察した「よ」も「ね」とよく比較の研究対象となっている。「よ」の語用論的機能」の節では「よ」と「ね」を比較し、最後に「ね」と「し」の機能を比較することにより、これらの機能の異なりを検証する。

終助詞の「ね」は「し」と出現位置が似ており、節末に付く点でも「し」との共通性もあるが「～しね。」の使用は可能である。まず、どのような統語的特徴が見られるのか分析を行う。下記の「はあ？ 泣いてないし。」の「し」の位置に入れ替わる関係にある機能を持った要素を考える時、「よ・ね・さ・ぞ・わ・ぜ」などの終助詞があることがわかる。

(148)

ロペ : ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ : はあ？ 泣いてないし。 (紙兎ロペ「感動大作」) (再掲)

上記例のアキラの発話「はあ？ 泣いてないし。」の「し」の部分をも他の助詞で単純に入れ替えを行うと以下のようにはできる。

(345)

- a はあ？泣いてないし。
- b はあ？泣いてないよ。
- c はあ？泣いてないね。
- d はあ？泣いてないさ。
- e はあ？泣いてないぞ。
- f はあ？泣いてないわ。
- g はあ？泣いてないぜ。
- h はあ？泣いてないしよ。
- i はあ？泣いてないしね。
- j はあ？泣いてないしさ。

これらは、「よ」の章でも述べたが、入れ替えて並べてはいるが、単純な範列関係ではない。これらは伝達モダリティの範疇に位置付けられている。先に述べたように、モダリティの観点から益岡(1991:92-107)では「よ」と「ね」の分析を行っている。益岡(1991:92-107)では、話し手自身が持っている知識のあり方が聞き手の持っている知識のあり方と一致する方向にあるのか、対立する方向にあるのかという観点から終助詞「ね」と「よ」の分析をおこない、具体的には「ね」が「話し手の意向と聞き手の意向が調和する判断」「一致型の判

断」を示し、「よ」は両者の意向が対立する判断、「対立型の判断」としている。

次に、「ね」と「し」が同じく節末で使用できることなどは類似しているが、接続の上でどのような特徴が見られるのか、分析する。下記の「表 24」は「ね」の接続要素を示したものである。

表 24. 「ね」の接続要素

	名詞	名詞＋コピュラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みます	読むか	読まない
ね	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

上記から、次のように「意向形」「て形」「疑問形」のような、聞き手に対して使用されるものには「ね」は使用できる。これらのことから、「ね」が、基本的には「聞き手」に対して用いられると考えられる。宮崎他(2002:261-288)では、独話の可否について「ね」は使用されないとしている。「ね」は基本的に聞き手に対して、用いられるが、「命令形」にだけはつかない。また、下記例のように「ね」には、間投用法の「ね」もある。

(346) 私ね、今度ね、かなりね、試験がね、良くないと思うね。

「ね」は直接名詞に接続できる。

(347) 学生ね。

金水(1998:118-121)では、「ね」の意味を「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」と規定している。また、宮崎他(2002:277-280)では、終助詞について、その基本的性質について述べ、分類を行っている。終助詞「ね」に付いては、「「ね」は、文の内容を、何とか一致させながら、聞き手に示すときに用いられる。聞き手の知識や意向との一致を問う用法や、話し手自身の記憶や結論との一致を示す用法などがある」としている。これらの

ことから「ね」は基本的に話し手と聞き手の関係の中で、聞き手に対して用いられるのが「ね」の機能の特徴と言える。

次に、「ね」の語用論的機能-談話標識としての機能についてみる。「ね」を考える上で、先行研究ではよく対の研究対象となるのが、前章で述べた「よ」である。「よ」と「ね」は非常によく似ている終助詞であるが、よく見ていくとその機能は異なるとみられる。

「ね」と「よ」について、先行研究では「ね」は「確認」、「よ」は「念押し」などと言われてきたものを、前章でも触れたように、加藤(2001:31-48)では、終助詞の「ね」と「よ」の談話標識としての分析を行い、その中で、益岡(1991:92-107)の先行研究の分析について述べている。「一致型」と判断される「ね」について、話し手と聞き手が異なる判断や意向を持っている場合には使えなくなるはずであるが、これらの発話では「ね」が使われることが多く、「一致型」の判断は一見、妥当なように思われるが、しかし、これらは「ね」を用いることも可能である、従って、「一致型」であることが、「ね」の出現を自動的に予告するような関係にはなっていない。また「一致型」の判断マーカであれば「ね」は聞き手に「対立する」ようなケースでは使用できないはずであるが、「ね」は「対立」に使用できる」として、下記の例をあげている。

(348) いや、だめですね。私としては認められませんね。

そして「よ」と「ね」について以下のように、談話構成機能の面からまとめている。

(349) 「よ」は話題になっている命題内容について、発話者が排他的な知識管理を行う準備があることを示すという、談話構成機能を持った談話標識である

(350) 「ね」は、話題になっている命題内容について、発話者が排他的な知識管理を行う意思がないことを示すという、談話構成機能を持った談話標識である。

「ね」が命令形につかない点については、加藤(2001:46)では、命令形とは、論理的に発話者が排他的・独占的に命題内容にアクセスしているものであり、優先的独断的に命題内容を聞き手に要求する行為であるとしている。したがって、排他的知識管理を放棄することは矛盾し「ね」は命令形につくことができないとしている。

(351)

A : 買い物に行かない？

B : 今日は、寒いね。

(B) の発話「今日は寒いね。」の「ね」は「話し手 (B) が「今日は寒い」という情報を、聞き手 (A) は、もう、外を見て雨が降っているのを共通の知識としてもっている」とみて、「排他的知識管理」は別に行う必要がないと判断したものと思われる。しかし、誘いに対する答え「行く」か「行かない」か、としてはまだ成立していないものと思われる。

(352)

A : これ、いいね。

B : うん、いいね。

(353)

A : これまずいね。

B : いや、おいしいね。

上記の例から、「ね」は話し手と聞き手の認識が同じ場合 (352) の例でも、異なる場合 (353) の例でも、使用できるものと考えられる。

(354) ちょっと、そこまで出かけてきますね。

加藤 (2001:31-48) 「また、上記例では、「ね」を用いているが、「出かけてきます」という命題内容は、話者の行動に関する意志の表示であり、排他的知識管理が適当であるように見える。「ね」を使用するのは、自分の行う予定の動作でありながら、聞き手にも不同意の発言を行う余地を与えるためである。つまり、「ちょっと、出かけてきますね」と言われた方が、聞き手の意向を示しやすい状況を作り出している。聞き手にも話題に関する情報・知識へのアクセスの余地を残しておくということである」としている。この場合、「ね」は「話し手の発話に関する態度を示すマーカー」として機能している。また、「ね」は「話者が排他的な知識管理を放棄することを示す命題に付くマーカー」である。

9.5 「し」と「ね」の機能比較

終助詞の「ね」は「し」と出現位置が似ており、節末に付く点でも「し」との共通性もあるがどのような異なりがみられるのか統語的特徴も踏まえ分析を行う。

最初に、「ね」と「し」が同じく節末で使用できることなど類似しているが、接続の上でどのような異なりが見られるのか、さらに詳しく分析する。下記の「表 25」は「ね」と「し」

の接続要素を比較したものである。

表 25. 「し」と「ね」の接続要素

	名詞	名詞＋コピュラ	形容詞	形容動詞	動詞辞書形	動詞意向形	動詞テ形	動詞命令形	敬体	疑問形	否定形
	学生	学生だ	高い	静かだ	読む	読もう	読んで	読め	読みますか	読むか	読まない
し	×	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○
ね	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

上記から、次のように「意向形」「て形」「疑問形」のような、聞き手に対して使用されるものには「ね」は使用できるが「し」は接続できない。「ね」は「命令形」に接続できなかった。これらのことから、「ね」が、基本的には「聞き手」に対して用いられる点で、独白にも使用できる「し」との異なりがみられる。「し」は本研究のデータにおいて、独白で使用されている。

「ね」には、間投用法の「ね」もあるが、

(355) 私ね、今度ね、かなりね、試験がね、良くないと思うね。

(356)* 私し、今度し、かなりし、試験がし、良くないと思うし。

上記(355)の文末につく終助詞「ね」だけは(356)の例のように「し」に言い換えられるが、間投用法と考えられる「ね」は「し」では置き換えられない。

また、「ね」は直接名詞に接続できるが、「し」は「だ」を伴わなければならない。

(357) 学生ね。

(358)* 学生し。

(359) 学生だね。

(360) 学生だし。

つまり、上記例(360)は、「学生だし。」は従属節である。

次に、「し」と出現位置が似ている「ね」との語用論的機能の比較について検証する。

(143)

ロ ペ： あれ？先輩だめでした？

アキラ： いや、まあ、あれじゃねえ。

ロ ペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？泣いてねえし。

ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

ロ ペ： 目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

だいたいよ。あの演出、あざとっていうか、「はい、みなさん、泣くところですよ」的な？

俺とかよ、そういう、いかにもっていうのは、逆に冷めるタイプだし。

ロ ペ： はあ・・・。

(紙兎ロペ「感動大作」)(再掲)

(361)

ロ ペ： ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ： はあ？泣いてねえし。

アキラ： はあ？泣いてねえね。

(362)

ロ ペ： 目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

アキラ： あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえね。

(363)

ロ ペ： いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ： 昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

アキラ： ?昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえね。

上記(361)と(362)の例の場合、「し」の使用を「ね」で置き換えることはできる。この「ね」の使用の場合は、相手の発話内容、相手の認識について強い否定の態度を示している。

例(363)の場合は、「?おれ、ほら、あまり寝てない(ねえ) ね。」と「し」から「ね」に置き換えると、できないことはないが、かなり不自然である。これは、話し手が相手の発話内容について、強い反論を表すとしていたが、「ほら、(さっき言ったけど)～」などの意味で相手が既にこの知識にアクセスできていると思われる場合、聞き手との知識を一致させる必要性は既になく、強い拒絶にならないためだと考えられる。「し」の場合は知識管理は優先的であるが、自分と相手との関係には考慮せず、ただ自分の判断を述べているため「し」は使用できるものと思われる。「ね」の場合、知識管理は話し手が行う場合と聞き手が行っている場合があるものと思われる。

次に、以下の例のように「し」を「よ」に変えることはできるが、「ね」に変えるとやはり、自然ではない。「泣いてないし。」の場合、話し手にとって、聞き手の認識が間違っていることに対する強い反論を示しているものとみられ、「よ」も「排他的知識管理を行う」ため、同じようにつくことはできるが、「ね」では「排他的知識管理を放棄」してしまうため、矛盾することになるからだと考える。しかし、「泣いてないね。」でも自然である状況も有り得る。これは上昇「ね↑」のイントネーションを伴い、発話される場合である。この場合、反論の意を聞き手に示すために、反論内容の自己確認も終え、相手に示すような場合である。あえて、排他的的知識管理を放棄し、聞き手への同意要求までも含まれると思われる。

(364) 泣いてないし。

(365) 泣いてないよ。

(366) ?泣いてないね。

また、下記のような「しね」の例もある。

(367)

アキラ先輩： 負けたの？

ロ ペ： いや、言っていないんすか？

アキラ先輩： その、言っていないとか最悪。勝ちましたって言ってるみたいなもんだしね。

(紙兎ロペ「録画」)

上記発話の 部分において、

(368) 勝ちましたって言ってるみたいなもんだしね。は成り立つが、

(369)* 勝ちましたって言ってるみたいなもんだねし。は成り立たない。

この理由としては、先の分析から、(368)は「し」で、話し手の結論を一方的に述べ、「ね」で聞き手に対して発話内容の一致要求をしている。

しかし(369)の方は接続の上からもおかしい文になるが、「ね」で聞き手に対する内容一致要求をしておきながら、受容要求には考慮しない「し」をつけると発話内容に対する整合性が保てないからだと考える。「ね」は加藤(2001:31-48)の言う「排他的に知識管理できる状態を放棄する」談話標識としての機能を持っており、「君の言っていることにも反論の余地があるよ」としながら、そのあと「し」で相手に反論を示す強い態度を示す「し」をつけるのはやはり矛盾するため、「～ねし」は成り立たないとみる。

次に、上記では「～しね」の使用について分析を行ったが、「よ」との使用「～しよね」はなぜ、下記例のように成り立たないのだろうか。9章の「9.1 終助詞」の箇所でも述べたが、加藤(2006:126)「助詞どうしの組み合わせ」について、もう一度確認すると、その組み合わせの順序からは、「わよ」「わね」があるが、「わぜ」はなく「よね」、「よな」もあるが、「よさ」「よぜ」はない。「飲めよ」「飲むなよ」など命令、禁止に「よ」はつくが、「ね」の方は「*飲めね」「*飲むなね」はできない。「わよね」はできるが「*ねよわ」はない。この組み合わせでは「よね」は順序に対応している。

次に、「よ」と「ね」の異なりについて考えなければならない。「よ」も「ね」も終助詞であるが、間投助詞としての間投用法もある。両者を比較すると「よ」は先にも述べたように、間投助詞としては粗野な印象があり、「ね」と比較するとその間投用法には制限があると言っている。つまり、間投助詞ではない文末に出現する終助詞が中心的な機能になる。一方「ね」は、間投用法としても一般的に広く使用されており、終助詞、間投用法の両方で使用されていると見られる。「よ」と「ね」は対照的に分析されることも多いが、加藤(2001:46, 47)で述べているように「よね」は「よ」に「ね」がついた複合形態と見る。形式的には複合しているが、それぞれの機能が取り込まれているものとする。「～しよね」が成り立たない場合を考えると、下記例(370)(371)のように「し」が付かない場合は「よ」と「ね」は同じように使用できる。例(372)のように「～よね」も使用できる。

(370) 泣いてないよ。

(371) 泣いてないね。

(372) 泣いてないよね。

しかし例(373)のように「し」が付いた「～しよね」では使用できない。

(373) *泣いてないしよね。

これは先ず、「文の完結性」と関係があるのかもしれないとすると、下記例(374)は「し」をつけることにより、「言いさし文」になり、統語的には、未完結の文になる。

(374) 泣いてないしよ。

未完結の文に「よね」は基本的にはつかないと言えるのではないかと仮定する。しかし例(375)をみると、同じ接続助詞「から」で終わる言いさし文には「よね」はつくことができる。

(375) 泣いてないからよね。

(376) 泣いてないからだよね。

「～から」の「言いさし文」は「だ」をつけ、「～からだ」と「だ」で文を完結させることができる。つまり、「からだ」から「だ」が消去された「言いさし文」が「から。」であると考えると「文の完結性」は関係していると言えるかもしれない。しかし、次に、同じ「から」の言いさし文でも、下記の例(377)は不自然である。

(377) *あちらのテーブルに飲み物を置いておきますからよね。

(378) *あちらのテーブルに飲み物を置いておきますからだよね。

「から」の「言いさし文」の例(375)と(377)の異なりは、例(377)、は「初出」の内容である。主節は、復元しようとしても復元は特定できないものであると言える。理由を表す「から」ではない。一方、例(375)の場合は「理由」を表す「から」であり、「泣いてないという理由(から)」に「よね」の複合形態がついている。この場合の「理由」は既出と考えられる。また、「泣いてないよ。」では「よ」は加藤(2001:31-48)の言う「排他的に知識管理する」「よ」である。「他の人がどう思おうと、私は「泣いてない」が理由である」という態度である。しかし、それに「ね」がつくと「私はそう思うが、あなたの意見もあるから、あなたはそれについてどう思うか反論もできる」という「独占的に知識管理できる状態を放棄する」「ね」である。では、「泣いてないしよね。」の場合が成り立たないのは、「言いさし文」という形式だけではなく、「から」の例文(377)と同じように主節の復元は特定できないという条件が挙げられるのではないだろうか。つまり。この「し」も同じく「理由」を

表してはいないと考える。また、「し」で「変更しないという自分の考え」を強く述べ、相手に受容を要求はしているがそれは考慮しないほど、突き放した態度である。それに重ねるように「排他的知識管理をする」「よ」がついて、さらに態度を強めているにもかかわらず、「ね」で「排他的知識管理を放棄する」のは矛盾が起こるため「～しよね」は使用できないと考える。

以上のことから、やはり、「よ」と「ね」は単純な範列関係で捉えられないことがわかった。またこの分析は、「付加型」「言いさし文」の根拠の一つになり得るものとも考える。「付加型」の場合、主節の復元は特定できない解釈上の復元になる。また、「付加型」の場合は、主節の形式が特定されないだけでなく、解釈上の復元であるから当然ではあるが、確定はできない場合である。このような接続助詞「付加型」「言いさし文」の場合は「よね」も接続できないと考える。

9.6 本章のまとめ

統語的特徴の上で、「し」と「よ」の異なりは、接続要素でみられる。「し」は「命令形」、「て形」、「意志形」、「疑問形」などに接続できないが「よ」は全てに接続できる。これらの要素は聞き手に対して使用されるものであり、「よ」は聞き手に対して用いられる点で「し」との違いが見られる。また、出現位置も節末につくという点では似ているが、さらに詳しく見ると「～しよ。」の使用例も見られることから、「し」と「よ」は出現位置が同じではない。

これらのことから、「し」と「よ」の違いは大きいと言える。「よ」はもともと終助詞であり、「聞き手との関係」において用いられるが、「し」は「聞き手」がいたとしても、「し」が持つ独白性からも、話し手は、発話内容について聞き手の受容の必要性は考慮せず、変更の可能性がない結論を聞き手に表明する態度である点で「よ」と異なると考えられる。

次に、統語的特徴の上で、「し」と「ね」の異なりは、接続要素でみられる。「し」は「命令形」、「て形」、「意志形」、「疑問形」などに接続できないが「ね」は「命令形」以外に接続できる。これらの要素は聞き手に対して使用されるものであり、「ね」は基本的に聞き手に対して用いられる点で、独白にも使用できる「し」との違いがあることがわかる。また、出現位置も節末につくという点では似ているが、さらに詳しく見ると「～しね。」の使用例も見られることから、「し」と「ね」は出現位置が同じではない。

次に、談話標識としての「ね」の機能は、先ず「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度」を示し、知識管理は話し手が行う場合と聞き手が行う場合がある。聞き手への意向一致要求を持つが、聞き手や周りとの同一認識状況で使用できる。これらのことから「し」と「ね」を詳しく見るとその違いは大きいことがわかった。「ね」はもともと終助詞であり、「聞き手との関係」において用いられるが、「し」は「聞き手」がいたとしても、その独白

性からも、話し手は、発話内容について聞き手との一致の必要性は考慮せず、変更の可能性がない結論を聞き手に表明する態度である点で「ね」とは異なる。また、「～ねし」と「～しよね」の使用がなり立たないのは、「ね」「し」「よ」が複合しても、それぞれの助詞が持つ伝達態度を表す機能を取り入れられ、矛盾する場合も起こり得るためであるとした。

第10章 結論と今後の課題

10.1 結論

第一部で述べたように、日本語の書き言葉の規範は論理的に完結している文であろう。しかし、日本語の話し言葉、日常会話においては完結しない文が多く見られる。本研究の「言いさし文」のように「従属節」に接続助詞がついて終わるもの、終助詞がついて終わるものなど、くだけた会話では、「言いさし文」の使用の傾向が見られる。

なぜ、このような傾向があるのか。これは先行研究で引用した加藤(2014:495-520)の指摘があげられる。日本語は英語などの言語と異なり、右方付加の言語のため、話し手は話し始める前に言語構造形式を決定せずに、話し始めることが可能であり、従属節の節末で止めるか、そのあと主節まで続けるか、その自由度が高い。それが「言いさし文」が多用される大きな要因になっている。また、この構造的特徴は、「断言」など文を閉じることで生じる「緊張」や「責任」を回避したい話し手の意向とも合致している。これらのことから、断言を無意識に避けようとする場合は、「し」のような接続助詞を多用して文をつなぐことが多くなると考えられる。

ここまでの議論をまとめると、本論文の成果として、最近観察される「新しい言いさし文」が持つ様々な談話機能が明らかになった。「～し。」については「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」を示し、「相手の認識が誤っている」という「認識要求」を示すことから、「相手の発話の受容のあり方に関する情報」を示す機能も持ち、「話し手の強い意向」「対立的態度」「不愉快さ」などを示す談話標識として機能していることが分析から得られた。さらに、「し」は本研究のデータにおいて独白でも用いられることから、聞き手への関心より、自分の意向を一方向的に述べることに重点が置かれているとの結果を得た。

次に、「し」と「たり」については、もともと並列を表す接続助詞であったが、並列せず、あえて非並列構造で使用し、それらを運用していく中で、派生的な談話効果が生じてきたものと考えられる。「し」と「たり」は並列用法の場合、それぞれ「連言関係」、「選言関係」としての用法が見られ、単独使用の場合は「非連言関係」「非選言関係」となり、これらの単独用法においてもその連言性、選言性は潜在的に残存しており、その談話機能に影響を及ぼしていることがわかった。

また、社会語用論的観点からは、主にポライトネスとの関係では、「～たり～たり」と複数あるにもかかわらず、単独で使用することにより、対人配慮の上で間接化及び近接化のネガティブ・ポライトネス、ポジティブ・ポライトネス、両方を実現しているとの結果が得られた。これらの対人的機能を持つことも日本語の話し言葉における「言いさし文」の多用要因だと考えられる。

また、「し」と同じく接続助詞で因果関係を表す「から」と「ので」を分析した。「から」は「言いさし文」での使用が多く見られるが「ので」は「言いさし文」での使用が少ない。特に「から」使用の「言いさし文」が、若い世代では「し」に変わってきているとの仮説のもとに分析を行った。「から」は論理関係標示で因果関係を表し、理由を強調して示すことが可能である。一方、「し」は事態関係標示で、前件と後件は意味的に依存し合わない関係であり、前件、後件の独立性が高いと言える。また、受容要求の強い「から」とは異なり、独白性をもつ「し」は「受容要求」の結果までを考慮しない突き放した態度を示すことができる。このような「し」であるからこそ、ドライな態度を表すことができると考え、若い世代の言いさし文に選好されるのではないかと分析した。

次に、「って」は本研究では「引用」の用法と「未受容非難①②」の用法を持つとした。「って」は「し」より、相手への強い「受容要求」を持つと言える。「従属節って。」の場合は、元々「引用」の「と」のくだけた言い方でもあり、「～と伝えているのだ」「～ともう一度言っているのだ」という内容を述べており、相手が受容していない知識、分かっていなければいけないことが分かっていないから、もう一度言うという話し手の態度を示している分析結果が得られた。言い換えると、「先行文脈を保持していない、踏まえていない」とする態度で、感情的に相手を非難する態度である。一方、「し」は、ある状況では「婉曲に」理由を言外にほのめかせ、またある状況では接続助詞をあえて付加し、本来の構造的特性を潜在化させ、その構造を意図的に変化させることにより、話し手の対立的姿勢や不愉快さなどを示す談話効果を生み出していると考えられる。

また接続助詞の「言いさし文」では先行研究において「終助詞（的）用法」とされることが多い関係から、終助詞の「よ」「ね」と「し」との違いについての分析を行った。その結果、これらは、「しね」「しよ」など「し+終助詞」の位置関係が見られる。

さらに、「し」と「終助詞」の「よ」「ね」は、各々が異なる位置での使用も可能なことから、「終助詞」とは異なる機能で使用されているものとした。これらの語用論的機能としては「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」を示す標識として機能しているものと考えられる。終助詞「よ」「ね」と「し」との異なりは、終助詞は主に聞き手が意識されているが、「し」は「よ」「ね」とは異なり、独白にも使用できることから、聞き手より、話し手の意向を優先させる点で違いが見られる。

次に、「よ」と「ね」は形式の上で、複合形式を取っていてもその複合に矛盾が生じるものもある。その理由としては各々が持つ談話機能の異なりによるものとの分析結果を得た。

これまで「言いさし文」は統語的には不完全な文と捉えられる傾向にあったが、「言いさし文」は日本語の構造的特性から生じやすいものであり、その構造的特性を生かし、元の構造を運用の中で変化させ、新しい談話機能を持つようになったものとする。

「し」の「言いさし文」の使用については、本来同じ性質のものを並列でつなげてきたが、異質なものを組みわせることにより、新しい用法が生まれ、文法機能の拡張や制約の変化が生じ、「理由」の意味合いも生じてきたものと分析した。これらは、言語運用から言語規則の変化が生じている現象とも考えることができる。この点の分析を更に深めていけば、新しい「統語語用論的観点」から、研究を進めることも可能になる。つまり、並列か理由かは、いわゆる重文か複文か、従属節であるか、並列節であるかという構文的な分類の問題を含んでいる。これらの構造が先にあって意味内容が決まるという考え方とは別に、前後の文の種類による組み合わせの使用など、運用により、それらの「並列」や「理由」という意味は生じてくるものと、とらえることもできる。

新しい付加型の「言いさし文」において、統語論的構造は未完結であっても、語用論的には、完結しているものとみることができる。本研究の分析からは、この統語論的構造と、語用論的機能の「ずれ」が、新しい使用を生み出している可能性が考えられた。実際の運用においては、この「ずれ」をうまく利用しようとする話し手の戦略も見られた。「言いさし文」をあえて使用し、未完結にすることにより、主節が潜在化し、隠れた内容は聞き手の推論にそれを委ねるという話し手の戦略である。聞き手は、「言いさし文」を相手に使用されることにより、そこで発話が終わっているのか、まだ続ける意図があるのか、話者交替の適切移行場などを確定しにくい状況である。それは、聞き手に対する対応や話者交替における主導権など、会話の場における優位性の確保のために、「言いさし文」を利用しようとする話し手の意図とも読み取れるものである。

10.2 今後の課題

1. 白川(2009)の「言いさし文の分類」と Evans(2007)の「非従属化の段階」を重ね合わせる分析はこれまで見られないため、分析を試みる。
2. 最近の若い世代では「から」の「言いさし文」より「し」の「言いさし文」が使用される傾向にあるとしたが、数量的分析、使用動機の面からさらなる分析が必要である。
3. 話し手と聞き手の間に対立関係がなく、「し」が、反論で使用されない場合、どのような伝達態度を示すのか。「し」の使用状況および語用論的機能をさらに拡大し分析する必要がある。最近の使用例として、SNSなどに「○○し www」などの表記が見られる。この「www」の意味は「笑」の意味であるが、この場合の「し」は、本研究の「し」と同じ機能で使用されているのか分析を進めたいと考えている。

4. 本研究のデータでは「し」の言いさし文は独白でも使用されている。「し」「って」「から」「たり」の「言いさし文」を「独白性」という観点から分析を進めたいと考えている。
5. 「たり」の選言性が成り立たない場合、例えば「禁止」などの場合は「連言否定」ともなるが、連言性との関係の分析を進める。
6. 本研究は「統語論的構造」と「語用論的機能」を「言いさし文」において分析したが、研究を更に発展させる上で、言語運用と文法構造・統語規則のインターフェイスを「統語語用論」という新しい研究分野の方法論で、研究を進めたいと考えている。

参考文献

- 庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 岩男考哲(2003)「引用文の性質から見た発話「ーッテ。」について」『日本語文法』3巻2号 pp.146-162
- 内尾久美(1973)「助詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹『品詞別 日本文法講座9 助詞』明治書院
- 呉 泰均(2015)「(ッ)ス」の語用論的機能」『日本語語用論フォーラム1』ひつじ書房
- 大木一夫(2017)『文論序説』ひつじ書房
- 尾谷昌則(2015)「接続詞「なので」の成立について」『日本語語用論フォーラム1』ひつじ書房
- 大槻文彦(1897)『広日本文典』大槻文彦
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 加藤重広(2001a)「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』35巻 pp.31-48
- 加藤重広(2001b)「談話標識の機能について」『東京大学言語学論集』20, pp.121-138 東京大学
- 加藤重広(2002)「言語使用における使用動機のあり方について」『富山大学人文学部紀要』36, pp.43-50
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 加藤重広(2004)『日本語語用論のしくみ』研究社
- 加藤重広(2006)『日本文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広(2007)「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学大学院文学研究科紀要』122, 北海道大学大学院文学研究科、97-155
- 加藤重広(2009)『その言い方が人を怒らせる一言の危機管理術』ちくま新書 812、ちくま書房
- 加藤重広(2013)『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 加藤重広(2014)「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志、大島資生、橋本修、堀江薫、前田直子、丸山岳彦(編)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 加藤重広・滝浦真人(2016)『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房
- 金水敏(1993)「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4, pp.118-121 大修館書店
- 栗原さよ子(2009)「終助詞化した「し」」『学習院大学国語国文学誌』52
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告3、秀英出版

- グループ・ジャマシー(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐治圭三(1957)「終助詞の機能」『国語国文』26-7, pp23-31, 京都大学国語学国文学研究室
- 白川博之(1993)「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」『広島大学日本語日本語教 育学科紀要』3, pp. 7-14
- 白川博之編(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 白川博之(2009)『言いさし文』の研究、くろしお出版
- 鈴木和彦・林 巨樹(1973)『助詞 品詞別日本語講座9』明治書院
- 滝浦真人(2008)『ボライトネス入門』研究社
- 竹内美智子(1977)「助動詞(1)」大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語7 文法II』岩波書店
- 田中章夫(1977)「助詞(3)」大野晋・柴田武(編)『岩波講座 日本語7 文法II』岩波書店
- 寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括的命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8, pp. 67-74 明治書院
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタックスと意味』第Ⅲ巻 くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 中俣尚己(2014)『文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
- 永野賢(1969)『悪文の自己診断と治療の実際』至文堂
- 仁田義雄、益岡隆志(編)(1998)『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 橋本進吉(1934)『国語法要説』明治書院
- H. ラインバッハ(1982)『記号論理学の原理』大修館書店
- ポール・グライス著・清塚邦彦訳(1998)『論理と会話』勁草書房
- 堀池尚明(1999)「シ」を用いた原因・理由表現について『筑波日本語研究』第4号 pp. 71-90 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 本多啓(2007)「副助詞タリの用法」『駿河台大学論集』33, pp. 1-18 駿河台大学教養文化研究所
- 前田直子(2005)「現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法」『人文』4, pp. 131-144 学習院大学
- 前田直子(2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法-改訂版』くろしお出版
- 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版
- 町田健編・加藤重広著(2004)『日本語語用論のしくみ』研究社

- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃 (2002) 『モダリティ』 新日本語文法選書 4 くろしお出版
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』 角川書店
- 森田良行 (1984) 『基礎日本語 3』 角川書店
- 森山卓郎 (2000) 『日本語の文法 3 -モダリティ』 岩波書店
- 森山卓郎 (1995) 「並列述語論文考」 『複文の研究』 くろしお出版
- 安田 章 (1977) 「助詞(2)」 大野晋・柴田武(編) 『岩波講座 日本語 7 文法 II』 岩波書店
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館出版
- Brown, P. & Levinson, S. 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- ペネロピ・ブラウン、スティーブン・C・レヴィンソン (田中典子監訳、斎藤早知子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳) .2011. 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社
- Culpeper and Hardaker (2017) “*impoliteness*”, pp. 199-225. In: Culpeper, Jonathan. Michael Haugh and Daniel Ksdr (eds) (2017)
- Evans, Nichols 2007 “Insubordination and its uses” Irena Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and empirical foundation*, Oxford: Oxford University Press, 366-431
- Kato, Shigehiro 2014 “Insubordination type in Japanese, -what facilitates them ? -”, *Asian and African Languages and Linguistics*, Vol. 8, 9-30
- Robin, Lakoff. 1975 *Language and Women's Place*. Harper & Row.
- Searle, John R. 1969 *Speech Acts, an Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

資料

用例出典

フジテレビ放送 2014, 2015年 一話放送時間：約1分『紙兎ロペ』

【夏会議】〔フジテレビ放送：紙兎ロペ〕

アキラ：今年こそはあれだべ。本格的に蚊が出てくる前に例の問題をはっきりさせておくべ。

全員： ああ。

友達1：いや、ごちゃごちゃ言ってるのは、お前だけだし。

アキラ：いや、おめえだってじゃんよ。

友達1：いや、毎年言ってるけど、蚊は、刺されるだし。

あんな尖った針みたいなので刺すんだから、刺されるだって言ってんじゃんかよ。

友達2：いやいや、かまれるですよ。

英語だと「モスキートバイト」ですし。

友達1：はあ？

友達2：「バイト」って咬むっていう・・・。

【感動大作】〔フジテレビ放送：紙兎ロペ〕

ロペ：あれ？先輩だめでした？

アキラ：いや、まあ、あれじゃねえ。

ロペ：ああ、へへへ。泣いちゃいました？

アキラ：はあ？泣いてねえし。

ロペ：いや、目、めっちゃ赤くないすか。

アキラ：昨日、おれ、ほら、あまり寝てねえし。

ロペ：目の下の毛、カッピカッピになってますよ。

アキラ：あっ、いや、これ、ジェル。いや、泣いてねえし。

だいたいよ。あの演出、あざとっていうか、「はい、みなさん、泣くところですよ」的な？俺とかよ、そういう、いかにもっていうのは、逆に冷めるタイプだし。

ロペ：はあ。

【タイ焼きや】

アキラ：いや、おっちゃんがピンチだって言うから、相談にのってんじゃねえかよ。

主人：いや、ピンチはピンチよ。暖かくなると、ガクンと来ちゃうんだから。売上。

で、ほら、1割、2割引きするよね。客商売なんだし。

ちょっとでも、お客さんにアピールしていこう、していこう。でも、気がつけば9割引き。あと1割引いたら、10割引きですよ。ただですよ、ただ。なんだろう、これ。もう、笑うしかないよな。

これって、「試合に負けて、勝負に勝つ。」こういうことかな。

アキラ：いや、いや。

ロペ：勝ってないすね。

主人：はあ〜。(ためいき)

アキラ：まじかよ。

じゃ、友達とか知り合いに声かけまくるからよ。

とにかくじゃんじゃん客呼ぶし。

ロペ：そうすね。

その他の資料

【ゲーム友達】

アキラ先輩：なんだったら、いけます？

高橋：うなぎ？

アキラ先輩：おやつ、うなぎっすか？

高橋：いや、最近、何食べても、あまりねえ。だからどうせ、食べるなら、好きなもの食べたいなあと。

アキラ先輩：いや、いっしょに行きたいんすけど。

高橋：えっ？ おごるし。

アキラ先輩：いや、そんなんだったら、高橋さんとからみにくくちゃうから、いいすよ。

高橋：今日だけ。もう、うなぎ、食べたくなったし。

アキラ先輩：う〜ん・・・

高橋：特上とかおごらないし。な〜み。

アキラ先輩： う～ん・・・。

ロ ペ： 先輩、ここはお言葉に甘えて・・・。

アキラ先輩： う～ん・・・。

ロ ペ： 先輩、実はもうラーメンモード入ってません？

アキラ先輩： ばれた？だって、高橋さんが、どうせ食べるなら、好きなもんとか言うから
だっし。

三 人： (笑い)

【録画】

ロ ペ： 先輩、いや、絶対、結果言いませんし。

アキラ先輩： ほらきた、【中略】

リアルタイムで見れなくっても、ちゃんと録画して、ちゃんと頭からみる。そこ基本じゃねえ。そっからの結果じゃんか。結果あつてのゲームじゃねえし。

ロ ペ： あっ、まあ、はい。

【中略】

アキラ先輩： 負けたの？

ロ ペ： いや、言っていないんすか？

アキラ先輩： その、言っていないとか最悪。勝ちましたって言ってるみたいなもんだしよ。
っうか、勝ったんだべ？

ロ ペ： えっ？ いいんすか。

【どちらにしようかな】

【飲料水の自動販売機に向かって】

アキラ先輩： どれにしようかな。天の神様の言う通り。野球するなら～。

ロ ペ： アッハッハ (笑)、いや、先輩、それそんなんでした？

アキラ先輩： えっ？

ロ ペ： どちらにしようかな？天の神様の言う通り。なのなのな。鉄砲撃ってバンバン、みたいな・・・。

アキラ先輩： なのなのなって？

ロ ペ： えっ？こんなんでしたって。

アキラ先輩： えっ？ ちげえし。 (違うし)

なあ、牧野？

牧 野：ああ、俺も、野球するなら～。

ロ ペ：えっ？マジっすか？

アキラ先輩・牧野：（一緒に）野球するなら～（中略）（最後に）あっぷっぷ。

アキラ先輩：えっ？ あっぷっぷ？

三 人：（笑い）

アキラ先輩：じゃ、もう、俺は俺のやつでやるし。

アキラ先輩：どれにしようかな～（中略）（最後に）ダメ。

ロ ペ：先輩、ちょいたししてるんじゃないですか。

【パチンコ】

【鹿のキャラクター畑中のツノにゴム紐をかけ、アキラ先輩はそのゴム紐を遠くへ引っ張って行って、パチンコの要領で畑中自体を飛ばそうとしている】

牧野： じゃ、俺、あっち、行っとくし。

畑中： おれ、ここでいいっすか。

ロペ： これ、うまくいったら、マジやばいですね。

アキラ先輩：パチンコマ1号

畑中： じゃ、いっちゃってください。

アキラ先輩：行くぞ、牧野、じゃ、

牧野： オーケー。

アキラ先輩：やばかったら、すぐ言えよ。

畑中： 大丈夫っす。

アキラ先輩：やべえ。これ、絶対、やばえ。じゃ、そろそろ。畑中、大丈夫？

畑中： 大丈夫っす。

【かなり引っ張って飛ばそうとしたその瞬間、畑中のツノが取れ、ゴム紐ごとアキラ先輩にバッチンとぶつかる。】

アキラ先輩：えっ？

畑中： えっ？あっ？抜けちゃいました？

春にね。生え変わるんす。毎年。

アキラ先輩：いやあ、早く言えっし。

マジビビったわ、全くもう。

畑中： いや、もうそんな季節なんすね。

【スノボ】

友達仲間 3 人でスノーボードをしている

アキラ先輩：ヨッシャ、行くべ。スノボ、やべーな。

(雪がわずかに残る坂から滑り降りる)

アキラ先輩：なんだ、これ？(笑)

ロペ： いや、もう、これ無理っしょ。大体これ、ほぼほぼ、土ですし。(笑)

アキラ先輩：摩擦しかねえし。(笑)

三 人：(笑い)

【フグ】

魚屋： おっ？何だ？高校生。フグ買ってくれんのかよ。おお、いいね。買え、買え。

アキラ先輩：あのさ、なんでこんなに値段、違ってんの？

こっちのフグとあっちのフグ。

魚屋： おい、おい、おい、高校生。全然ちげえだろうよ。こっちは天然、あっちは養殖。

アキラ先輩：天然、高くねえ？

魚屋： そりゃ、おめえ、あれだよ。天然の方がおいしいに決まってるからだよ。

アキラ先輩：いや、同じ魚だし。

魚屋： いや、おめえ……。

【ハッピーバレンタイン】

老 人：ああ、もうここでいいです。

ロ ペ：えっ？中まで持っていてもいいですよ。

老 人：いや、いや、ほんと、君らと会えて助かりました。どうもありがとう。

アキラ：全然、方向一緒だし。ついで。

ロ ペ：はい、じゃ、これ。(老人に買い物袋を渡す)

アキラ：じゃあな。じいさん。

老 人：あっ、ちょっと待って。

アキラ：うん？

老 人：はい、これ。

アキラ：いや、いいし。

老 人：いいから。ちょっとしたお礼だから。はい。

アキラ：えっ？チョコ？いや、いつもだったら、うれしいけど。

ロペ：2月14日ですからね。

アキラ：タイミングが・・・。

ロペ：そうですね。

アキラ：いや、ありがとう。来月3月14日、クッキー持ってくるから。

老人：いや、そんな若い人が余計な気をつかなくていいですから。

アキラ：いや、気うか、ルールだし。

ロペ：そうっすね。

【日産 e-NOTE CM「まだ夏だし。金魚すくい編」】

A：（金魚すくいをしながら）あっ、はみだしちゃう！

B：えっ？ どうしたの？

A：アイスバーンの交差点！（冬のアイスバーンを想像しながら）

B：いや、まだ夏だし。

（場面変わって）

A：早く、冬来ないかな。

B：いや、まだ夏だし。

【日産 e-NOTE CM「まだ夏だし。プール編」】

A：（スライダープールで滑っている子供を見て）すべってるね。

B：えっ？ どうしたの？

A：冬の坂道発進！（冬の坂道を想像しながら）

B：いや、まだ夏だし。

（場面変わって）

A：早く、冬来ないかな。

B：いや、まだ夏だし。

【NEXT IDEMITSU! CM 出光石油（株）「父の仕事篇」】

（日本からベトナムに単身赴任している父と息子の絆を描くストーリーCM）

〔ベトナムの空港に息子が着く。〕（ ）の中は息子の独白（心の中の声）として放映

父：いきなり呼んですまん。こちら、ホアンさん。

息子：（父は、自分勝手だ。）

父： 母さん元気か？ 二人だけで寂しいだろう。

息子： (声、無駄にでかいし。)

父： ここね、春巻きもおいしいんだ。

息子： (話、全然聞かないし。)

父： ちょっと、夕方迄、仕事だから、あと適当にやってくれ。

息子： (つていうか、何でベトナムなんだよ。)

父： 明日、町の中、歩いてみたらどうだ？ (父に電話が来る。)

すまん、すぐに戻るから。

息子： (日本で、いいじゃん。)

(でかい仕事とか、知らないし。)

(製油所とか、関係ないし。)

[日本での過去の生活の映像]

(大事な時、いないし。)

父： ちょっと、出かけようか。

息子： (自分のことばっか、そう思っていた。この日までは・・・。)